分科会研究発表
研究協議等記録

分科会研究発表・研究協議等記録

幼稚園部会

第１分科会　錦華幼稚園

第２分科会　龍谷こども園

第１分科会

学校法人　錦華幼稚園

所在地　〒840-0008　佐賀市巨勢町牛島97－２
園　長　錦織 昌貴
園児数　95名（４学級）
連絡先　TEL 0952-22-6708　FAX 0952-22-6732
E-mail　kinka_yo@icloud.com
ＵＲＬ　http://kinka-kg.com

【研究主題】

『おもしろそう！やってみたい！
～子どもの心を動かす環境の工夫から
生まれる豊かな遊びと仲間意識』

「ホールでの自由遊びの様子」

「園庭での自由遊びの様子」

「全園児でのダンスタイム」

「年長児の活動の様子」

「年中児の活動の様子」

「年少児の活動の様子」

1　研究の概要

(1) 研究主題

『おもしろそう！やってみたい！
～子どもの心を動かす環境の工夫から生まれる豊かな遊びと仲間意識』

(2) 研究仮説

身近な環境の中で，自然と体を動かしたくなるような環境の工夫を施すことによって，幼児期に必要な体の動きを伴う遊びを子どもたちが自らの心の動きに従って主体的に行うことができるのではないか。また，子どもたちにとって試行錯誤しながら夢中になって遊ぶ時間が保障され，発達段階に応じた適切な援助が得られることにより，難しさや課題に直面しても好奇心やチャレンジ精神を発揮することができるのではないだろうか。そのような運動遊びを通して，子どもたちが〝自分〟ができた喜びと〝自分たち〟で達成した喜びを味わい，自他を認め合うことによって仲間意識や連帯感が高まり，子どもたちの「またやりたい！」に繋がっていくのではないか。

(3) 研究内容

(1) 環境の工夫や子どもの動線を丁寧に観察し，主体的な運動遊びを生み出す活動の実践
- ○　園庭の樹木などの環境を活用する工夫
- ○　運動遊具の特性を考慮した活動の工夫
- ○　子どもの「今，やりたい！」を妨げない遊具の設置場所などの工夫
- ○　主体的な遊び(自由遊びの時間を担保する工夫

(2) 保護者の意識を高め，親子で体を動かすことの楽しさを伝える活動の実践
- ○　幼児にふさわしい生活習慣の周知
- ○　親子で触れ合い楽しむ行事の活動内容の工夫
- ○　保護者が体を動かして楽しむ活動の充実

(3) 野菜の栽培（食育）活動を通した健康な体作りと運動遊びを関連づける実践

(4) 運動遊び関する教師の理解を深める研修の実施

【本園の教育方針】
お互いの違いを認め合い、ともに育ち合い、「おかげさまでありがとう」という心情を大切に育みます

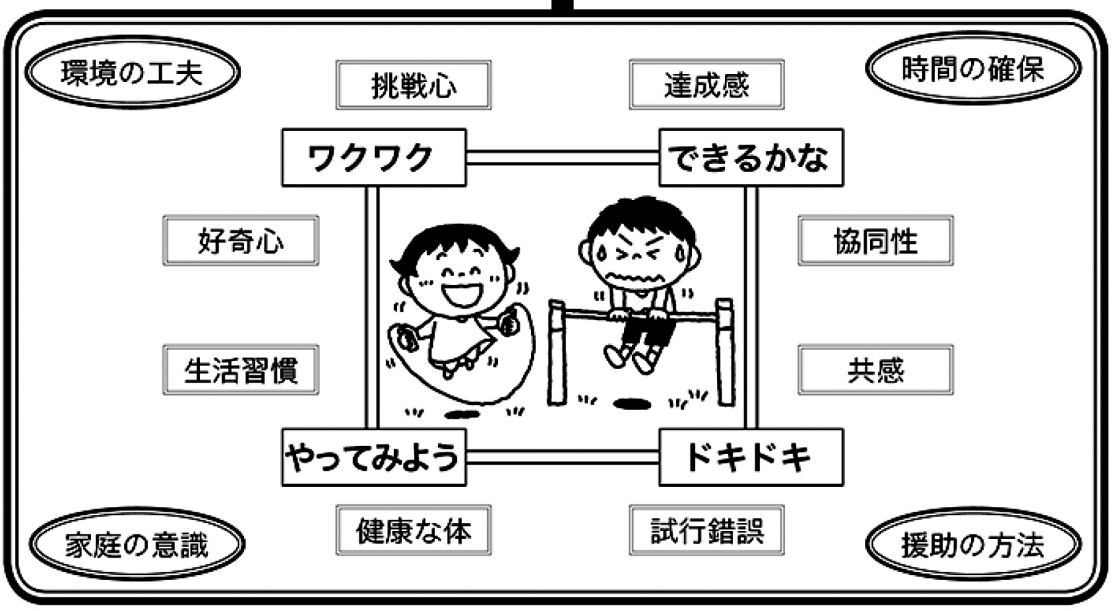
できる・できない、上手・下手など比較や競争で子どもの価値を計らない。

《社会的背景》
・安全な遊び場や地域の仲間の減少
・身近な自然の減少
・車での移動の増加、徒歩機会の減少
・ＩＴ化、テレビなどの視聴時間増大

《子どもの姿》
・外で遊びたがらない
・わずかな段差でも怖がる
・何もないところでつまづく
・偏食や少食、食事に対する欲求が少ない
・保護者中心の生活習慣による睡眠不足

【研究主題】
「心身の健やかな発達の基礎を培うワクワク・ドキドキする運動遊び」

「おもしろそう！やってみたい！～
子どもの心を動かす環境の工夫から生まれる豊かな遊びと仲間意識」



2　公開保育

(1)　５歳児　　保育者：江頭　未希

体を動かすことが好きな子が多い。進級当初より戸外で遊ぶことが多かった。しかし，クラス替えがないため固定化された友だちと遊ぶことが多かった。どうにかみんなで遊ぶことの楽しさを知ってほしい，という願いから年長児ならではのルールのある遊びに子どもたちを誘ってみた。

まず大玉を出してみると，子どもたちは大きくて迫力のある大玉に興味を示して遊び込むうちに，二つの大玉で競争したい，という気持ちに発展していった。それから次第に小さなボールでの転がしドッジボールに遊びが変わっていった。人数がいないと成立しない遊びをすることで誘い合い，遊ぶ友だちが固定されなくなり仲間意識が出てきた。二学期になってからドッジボールをしようと子どもたちに提案すると新しい遊びに興味を持ち，クラスの三分の二ほどの子が毎日のようにドッジボールで遊ぶようになっていった。ときにはボールが当たって怒り出す子やボールが取れずに泣いてしまう子がいてゲームが中断することもあったが，子どもたち同士で優しく声をかけたりボールを譲ったりするなど道徳性の芽生えが見られるようになっていった。

ビールケースを積み上げてダイナミックにジャンプして遊ぶ子もたくさん出てきた。興味はあるが怖くてできなかった子には何度か手を添えてあげると「もう大丈夫！」と自信たっぷりに遊べるようになっていった。そんな日常の遊びの様子からジャンプ遊びを運動会の競技に取り入れることにした。自分たちの好きな遊びが運動会の競技になることで，遊びへの意欲がさらに高まったようだった。しかし，その遊びが好きすぎて何度も繰り返しているうちにケガに繋がることがあった。存分に楽しみたい，挑戦したい，という意欲は受け止めながらもどこかで歯止めをかけなくてはいけなかったか，と反省もある。ビールケースの使用については他にも家を作ったり，高い枝になっている木の実をとる際に踏み台にしたり，子どもたち同士が言葉による伝え合いをしながら，板と組み合わせて迷路のようなコースを作って遊んでいて協同性が育まれていることが見て取れる。

そのほかにもサッカーや野球，長縄や短縄などいきいきと身体を動かして遊ぶことが以前にも増して見られるようになってきていた。どの遊びにも共通して言えることは，やはり遊びの環境には保育者の工夫と適切な援助が必要であるということ。大好きなドッジボールでも当たった，当たってない等のやりとりも出てくる。ビールケースでコースを作るときも何段も重ねたり，板の傾斜をつけすぎたりして危ないときもある。主体性を尊重しながらも子ども任せばかりせずに，子どもたちが安全やルールを意識してより盛り上がるために自分たちでどう考えればいいのか，適切なタイミングでの援助が必要だと感じている。そのためにもこれからも子どもたちの遊びにしっかり関わっていきたいと思う。

(2)　４歳児　　保育者：金岡　あかね　　納富　由佳

本園は各学年が単学級であるため，年少組からの持ち上がりの子がほとんどである。そのため，一学期は自分の好きな友だちとだけで遊ぶ姿が多く見られていた。折り紙やお絵描きなど，室内遊びを好む子どもたちも多かった。しかし，二学期になり運動会を終えると友だち関係の広がりが見られるようになり，積極的にいろんな友だちと関わろうとする姿が目立つようになっていった。

最近では外での遊びがとても活発になり，ベアーズランド（総合遊具）周辺で木登りや鉄棒をしたり，滑り台で友だちとくっついて遊ぶ〝ぎゅうぎゅう滑り台〟を楽しんだりしている姿が多く見られるようになってきた。そこで，今回はベアーズランド周辺で思い切り身体を動かして遊ぶことを計画した。ベアーズランドという遊具だけではなく，落ち葉や木の実など遊びを通して季節を感じることができるような環境も整えて，遊びの途中からはルールのある『色オニ』遊びを取り入れてみた。

空間的な限定があったことにより，クラス全員が二，三のグループに分かれながらも存分に身体を動かして遊ぶ様子が見られていた。しかし，関わりが増えてきたとはいえ，まだ「仲間に入れて」と言葉を出して遊びの中に自分から入れない子もいる。そんな子が自ら進んで遊びの輪に入れるようになるためにはどのような援助が適切なのか，また，周囲がそんな子に気づいて「一緒に遊ぼう」という協同性を発揮できるようになるための保育者の関わりがとても難しく感じた。

色オニ遊びでは，遊びに夢中になると，オニがタッチをした時に力が入り過ぎて「痛かった」とか「悔しかった」と些細なトラブルにつながってしまう。自分の思いが強すぎて相手への配慮やルールを守る意識が保てない姿も見られていた。そんな時に言葉による気持ちの伝え合いや思いやりの心を持つことの大切さを伝えていきたい。身体を動かして遊ぶのは楽しいが，一緒に遊ぶ仲間がいるからより楽しいんだ，ということを場面場面での子どもたちの感情に寄り添いながら伝えていくことを重ねていきたい。

(3) ３歳児　　保育者：吉田　菜々子　　古賀　美幸　　島田　まり子

もも組の子どもたちは，一学期は自分の好きな遊びを思い切り楽しんでいた。二学期になると友だちと一緒に集団で遊ぶようになった。自分の思いを言葉にして伝える姿も見られるようになった。そんな姿を受けて全体で一つの遊びを一斉活動のように行うよりも，自分の好きな遊びを友だちと組み立てて遊べるように環境を用意することを試みていた。

今回，もも組で行ったサーキット遊びは，保育者が完成させたサーキットで遊ぶのではなく，大型積み木やマットなどコースのベースとなるものだけを用意して，保育者はヒントを出しつつ子どもたち自らが意見を出したりアイデアを組み合わせたりして作り上げるサーキットにして遊びを広げられるような配慮をした。ときには「こうしたい」，「これを作りたい」，「ぼくは嫌だ」と自分の意見を出す姿がある。保育者はそれぞれの気持ちを受け止めて「それもいいね」，「友だちの意見もステキだと思わない？」と共感してみせて，子どもたちに自分の考えが遊びを作る，変えることができることを実体験として味わえるように配慮する。そのことによって子どもの『遊びたい』が『もっと遊びたい』という心のスイッチが入り，よりダイナミックに身体を動かして遊ぶようになったようだ。

しかし，今回の取り組みでは，自分たちでサーキットのコースを作り，自由に思いっきり遊んで欲しい，という願いがある半面，どこまでも子どもたちの自由に任せてしまうと，遊びがあまりにも無秩序になってしまい，ぶつかったりトラブルも増えたりしてしまうことが懸念された。安全面に配慮しながら，子どもがお互いに思いやりを持ってのびのびと遊べるような環境の工夫や保育者の適切な援助のあり方をこれからも研究していきたい。

３　研究協議

⑴　提案並びに協議内容

Ｑ１　ビールケースやボルダリングは年齢に応じて制限されているのか？

Ａ１（園長）登る高さやビールケースの使用に年齢による制限はない。
遊び方を知るには経験をしてみないと分からない。遊びながらここまで登るとボクは怖いな，ケースを３つ重ねるとグラグラするな，と子ども自身が自分の発達やスキルに応じて判断すればよい。子ども自身がやってみたいと思う気持ち，友だちがしているのを見て自分もやってみようという気持ちを尊重したい。ただし，職員間で子どもの情報を共有しながら遊びを見守ることは当然必要。

Ｑ２　運動遊びに限らず保護者との連携という意味において効果的なアプローチの仕方は？

Ａ２（園長）保護者の理解を得て園児の写真を掲載したホームページを更新している。親にとっては我が子が映っていて嬉しい気持ちになると同時に，園の取組が写真で伝わる。ホームページが親子の対話のツールになる。園では思い切り遊んでいる子でも家庭で尋ねられると「忘れた」という子も多い。行事ごとだけではなく，日常の子どもたちの輝いている姿を保護者に見て欲しい。ホームページなどを通して丁寧に子どもたちの様子を発信することが，園の方針や活動のねらいなどに対する保護者の理解や協力に繋がっていると感じる。

Ｑ３　全園児の９割近くが外遊び，室内でのコーナー遊びが少ないのでは？

Ａ３（園長）新聞紙や折り紙，すずらんテープ，粘土や廃材，お絵かき等子どもたちがしたい時にできるようにしている。公開保育に向けた取り組みの中で子どもたちには思いっきり外で身体を動かして遊びたいという欲求が高まっている。保育者から外で遊ぼうと声をかけることはしていない。

Ｑ４　幼稚園の先生が考える「遊び」を一言で表現すると？

Ａ４（年少）思い切り自分のしたいことを表現して，それが友だちにも伝わって心のやりとりをする。
（年中）人と関わることのできる大切な環境や空間。
（年長）色々な遊びを提供し，担任も遊び仲間の一人として一緒に遊ぶことを心がけている。
（園長）『私は私』,『私は私たち』自他のバランスを取りながらお互いを高め合っていくもの。

⑵　指導講評　　講師　　東京学芸大学　教授　　吉田　伊津美　先生

・子どものワクワク，ドキドキに焦点をあてた工夫。子どもがやりたくなる環境の提案と，興味関心に沿った環境の再構成。やらせる，与えるではなく，ついつい子どもがやりたくなる，子どもの主体性が発揮される環境を考えるようになったという先生の意識の変容がうかがわれる。
・子どもの自己決定を尊重した遊具等の扱いの見直し，遊びを通した指導がなされている。

褒める＝結果を重視ではなく，その取組や進捗を認める。できる，できないや他児との比較や競争ではなく，その子の取組そのものを褒める。結果ではなく過程を重視した遊び志向で評価や関わりを持っていくことが大事。成績志向≒結果重視では無力感や不安感や苦手意識，運動嫌いを育んでしまう。遊び志向≒過程重視では有能感や達成感，意欲，運動好きを育てる。遊び志向を重視した取組が錦華幼稚園ではなされていた。

・保育の時間は誰のための，何のための時間か？ということを見つめ直して，先生たちが『子どもの時間』に向き合うための配慮（朝礼やバス添乗の時間の削減）をすることが，子どもたちの遊びに好影響をもたらした。その気づきが大きな成果ではなかっただろうか。

今後は幼児期運動指針等にもあるように，さらに多様な動きを引き出す工夫があればよいのではないか。保護者を巻き込んでいけば，普段の生活の中でも体の動きの見直しができる。散歩で歩く，お手伝いがてら荷物を持たせて運ぶ，など。

4　成果と課題

(1) 成果

環境の工夫や子どもの動線を丁寧に観察し，主体的な運動遊びを生み出す活動の実践からの成果

とても意欲的に身体を動かして遊ぶ子どもが増えた。また，自分たちでより楽しくなるように遊び方を工夫することを通して言葉による意見の伝え合いや協同性が高まった。一人で遊ぶ子が減った。

保護者の意識を高め，親子で体を動かすことの楽しさを伝える活動の実践からの成果 **並びに** **野菜の栽培（食育）活動を通した健康な体作りと運動遊びを関連づける実践からの成果**

研究の取組を意識した親子行事や運動会の種目の構成をしたことにより，保護者は子どもたちのいきいきとした姿に我が子の良さを再確認できたのではないか。保護者からは園児の動きが今までと違う，との声が聞かれた。元気，力強い，勢いがある・・・などなど。

食育活動では何でも食べるともっと楽しく遊べる強い体になることを栽培活動を通して伝えて続け，偏食の克服への意識づけができた。

運動遊びに関する教師の理解を深める研修の実施からの成果

運動遊びに対する専門性を高める研修を多くもつことはできなかったが，各担任が持っているタブレットで撮影した画像をもとに環境構成の検討や，園児の発達段階に応じた個々の遊びの姿などの情報共有の話し合いを深めることができた。担任以外でも子どもの遊びのスキルの見極めができるようになったことは，安全に対する配慮に大きく寄与した。

(2) 課題

今回の研究を通して，適切な環境や保育者の援助があれば，子どもたちはいきいきと身体を動かして遊び込み，協同性や社会性，規範意識の芽生えまでも培う場面を多く作り出すことができることを実感した。しかし，そのような子どもにとっての魅力的な（挑戦心や好奇心を刺激する）環境を提供し続ける不断の努力や工夫が必要であると痛感した。その実践には常に子どもたちとの対話的な関わりが必要である。

第２分科会

九州龍谷短期大学付属龍谷こども園

所在地　〒840-0054　佐賀市水ケ江三丁目５－20
園　長　大串千代美
園児数　194名（９学級）
連絡先　TEL 0952-29-8411　FAX 0952-29-8411
E-mail　yochien@k-ryukoku.ac.jp
ＵＲＬ　http://www.k-ryukoku.ac.jp/yochien/

【研究主題】

『楽しみに思うこころを育む運動遊び』

～思わずやってみたくなる環境構成の工夫～

「年長児の活動の様子①」

「年長児の活動の様子②」

「年中児の活動の様子①」

「年中児の活動の様子②」

「年少児の活動の様子①」

「年少児の活動の様子②」

1　研究の概要

(1) 研究主題

『楽しみに思うこころを育む運動遊び』
～思わずやってみたくなる環境構成の工夫～

(2) 研究仮説

幼児自身が主体的に体を動かしたくなる，やってみたくなる遊びに夢中になって取り組めるような環境を十分に設定し，人と関わりながら運動することで，「またしたい！」と楽しみに思うこころが育まれるのではないか。

(3) 研究内容

＜本園の教育目標＞
・仏さまに手を合わせ、ありがとう、すみませんがいえる子ども
・自然に親しみ、生きものの命を大切にする子ども
・明るくすなおで思いやりのある子ども
・元気でのびのびした子ども
・お話をよく聞き、だれとでも話せる子ども
・創造的で、美しいものをよろこぶ子ども

＜まことの保育　よいこのおやくそく＞

＜社会的な背景＞
・安全な遊び場の減少
・共働き家庭増加で遊ぶ時間がない
・園で過ごす時間が多い
・少子化・核家族化
・車での移動が多い
・IT 化　・地域との関わりの減少

＜本園の子どもの実態＞
・明るく、素直な幼児が多い
・友だちと一緒に工夫しながら、遊びを進める幼児が多い
・すぐに「疲れた」と言う
・園庭でよく体を動かす幼児とそうでない幼児の差が大きい

＜本園卒園児の実態　新体力テストの結果より＞
・新体力測定８種目全てで他の児童の平均値を下回る結果である。
・特に女児の握力・長座体前屈・５０メートル走・ソフトボール投げの結果が低い。

幼児自身が主体的に体を動かしたくなる、やってみたくなる遊びに夢中になって取り組めるような環境を十分に設定し、人と関わりながら運動することで、「またしたい！」と楽しみに思うこころが育まれるのではないか。

・子ども自身が主体的にやってみたくなる環境構成の工夫
・保育教諭や友だち、異年齢の友だちと体を動かす楽しさを味わうための工夫
・職員間の連携に繋がる職員ミーティングの実施

2　公開保育

(1)　５歳児　　保育者：牧口　千音美

年長児では，進級当初，幼児体育の中で体力測定を行っているが，その中で経験の差や体力の差を大きく感じた。日頃の遊びの中でも戸外遊びが好きな子と，室内遊びを好む子に別れていたため，みんなが楽しんで運動に触れられるよう遊びの中に取り入れる機会をもつようにした。また，年長組では，子ども達同士で日頃から話し合いをもつことを大切にしている。運動遊びにおいても遊びの前後に話し合いの時間を設定し，どんな事をして遊んだのか，工夫した所，友達や自分の良かった所などを話し合うようにした。そして子ども達から出た案は部屋の前のホワイトボードへ記入し，ボードをみながら子ども達が自分で，活動や友達の姿を振り返ることができるようにした。

本日は，日頃の遊びの中から「跳ぶ」を意識した活動をメインに計画を立てている。「ゴム跳び」や「フープで遊ぼう」は，活動当初，遊びのきっかけに保育者から提示したものではあるが，陣取りや道づくり，フープ鬼ごっこ，それぞれの遊びでのやりとりは，子ども達自身の遊びの中や話し合いの中で生まれている。「タッチタッチタッチ」は日頃から，室内に同じ環境を設置しており，いつでも楽しめるようにしているものをホールの一角に同じように設定した。一見するとやりとりがないようにも見えるが，一番高いところに位置する的を狙っている子に他の子がアドバイスをするなど，日頃から親しんでいるからこそ，友達の様子に目を配り，自信を持ってアドバイスする姿が見られた。ステージに設定した色々な跳び方の表示は，みんなで考えた時に出た案の中からチームで相談し，それぞれのチームで作ったものである。表示通りに跳ぼうとする子や自分で道を作り直し，自分でルールを決めて遊ぼうとする子など様々だった。

これまで遊び方や友達との関わりなどについてはみんなで話し合ってきたが，空間の使い方や道具の使い方については話し合ったことがなく，危険な遊びも見られた。またみんなで話し合いながら考えていきたいと思っている。

(2)　４歳児　　保育者：黒木　佳奈子　　江口　未帆

何かになりきって遊ぶ事が好きな子ども達の姿と，最近，散歩に出かけ身近な秋の自然にたくさん触れた経験をもとに，本日の教育・保育計画を考えた。

地図や看板を用意し，子どもの視覚から入ってくるものを大切にして遊びを進めていった。本日も活動に入る前に地図を紹介し，遊びに入るようにした。

第Ⅳ期の年中組での運動遊びのねらいは“ルールのある遊びに進んで参加し，友達と一緒に楽しむ”である。子ども達の理解度と経験には差があり，現在の子ども達の姿から，ルールを理解できない子，ルールを守っている子など様々な様子が見られると予想した。そこで，運動遊びを楽しみながらも子ども達に様々な学びを経験してもらえればと願い，本日のねらいを「いろいろな動物になって友達と一緒にルールのある遊びを楽しむ」とし，活動計画を立てた。各コーナーを子ども達自身でつないで，遊ぶ姿が見られ，イメージと遊びがつながっていたこと，友達の姿を見ながら真似をして遊ぶ姿が見られたこと，遊びながらも友達が困っていたら助け合う姿が見られたことなど良い面がたくさん出てきた。

鬼ごっこではただ走るだけでなく，隠れたり曲がったりできるように，空間に障害物を配置していたが，死角ができたり，跳ぶコーナーではたくさん跳びすぎてマットがずれてしまったりするなど安全面での反省があった。

(3) ３歳児　　保育者：原田　知佳

進級・入園当初から体を動かす事が大好きな子ども達である。鬼ごっこやサッカー等様々な外遊びをしている。鬼ごっこでは自分たちなりのルールを決め，遊ぶ姿が見られる。また，新聞紙を使った遊びが好きで丸めてボールにし，投げたり蹴ったりする事を楽しんでいる。投げたボールを自分でキャッチしたり，友達や先生とキャッチし合ったり，フープに投げ入れたり等多彩な動きが見られた。そこで，今回は投げる事に注目して遊びの環境を整えた。指導助言の鈴木先生より，事前にアドバイスを頂いたこともあり，ボールの種類を増やした。

また，新しいものや場所に不安を感じる子どもがいるが，日々少しずつボールに触れる事で徐々に抵抗なく出来るようになってきている。今，遊戯で魚を題材としたものを踊っていることから，今回の環境の場を水中と見立て，魚がいる空間を作った。バスケットボールのゴールのコーナーではリングに直接ボールを落とす子が多かった。ラインを引いてみると，「先生！ここから投げるよ」「入った」「見てみて」と自分達でラインを意識して投げようとする姿が出てきた。また，坂道は子ども達が部屋の傾斜を見つけてボールを転がす遊びを見つけた所から着想を得ている。ボールプールは動く事に前向きではない子が楽しんでいた。音を鳴らそうコーナーにあった鈴は設定した位置が高すぎたためか，子ども達の視界に入りづらく活動は少なくなったように思う。ワニのコーナーはワニの口の下からボールが転がるように設定していたものの，ボールによっては転がりづらいものもあり，修正したいところである。

３　研究協議

(1) 提案

Ｑ１　年長児の保育を参観していた。ゴム跳びでは友達の様子をみながら力加減をしていたり，フープ遊びではジャンケンをしたり，友達同士で遊び方を教え合う姿が見られた。今回の活動を経て，これからどんな見通しを立てているのか教えて欲しい。

Ａ１（年長）ゴム跳び，フープ遊びとここまで子ども達自身で遊びを作りあげてきた。フープを使った鬼ごっこは最近子ども達の中から出てきた遊びである。鬼はケンケンで追いかけたり，ガムテープで道を作ってフープとフープをつないだりしている。友達同士でルールを考えたり教え合ったりする姿が出てきたが，遊びこむことで更に自信をつけ，今度は年少組の友達へ自分ができるようになった事を教えたり，年少児の事を思いながら一緒に遊んだりできるように子ども達と話し合いながら遊びを広げていきたい。

Ａ１（年中）まだまだ部屋遊びや製作遊びが好きな子が多い学年である。ごっこ遊びは大好きなため，体を動かしてのごっこ遊びにからめていければと思う。プールの時期にはワニに変身して遊んでいた。リトミック活動などでもぐらや土の中をミミズになって動いたりする遊びをとても喜んでいたので，子ども達の好きな活動から運動遊びに楽しみを見出していきたい。

Ａ１（年少）今回の活動でも子ども達の中から「高く」や「(ゴールを）上の方にして欲しい」という言葉が出ていた。子ども達の動きに触れながら，子ども達が“やりたい”という環境を作っていきたい。また，保育者が仲立ちになって遊びを進めていくのではなく，友達同士のやり取りを大切にしたり友達との関わりを深めたりしていきたい。

Ｑ２　環境構成が素晴らしかった。発表は室内での遊びだったが，園庭では普段どんな事をしているのか。

Ａ２（年長）最近はドッジボールをしてよく遊んでいる。また，ドッジボールをする事を楽しみに登園している子もいるほど盛り上がっている。ルールを守ることや友達の気持ちを考えること，当たったら外に出ることなど，トラブルについてもみんなで話合いを行い遊びが深まってきている。

Ａ２（年中）年長児のドッジボールに参加している子もいる。室内と戸外とを行き来しながら鬼ごっこをしたり，友達に「守っていてね」と声をかけ，砂遊びなどをしながら合間に鬼ごっこを楽しんでいる。

Ａ２（年少）鬼ごっこが好きな子が多く，保育者と一緒に遊びを楽しんでいる。年中児がお面をつけて鬼ごっこをしている事に子ども達が気付き，鬼にお面をつけるようにしたら，随分自分たちだけでも鬼ごっこができるようになってきた。最近では年長・年中児を見ながら「バナナになる鬼ごっこをやってみたい」という声が出てきている。のぼり棒や鉄棒などの固定遊具にもチャレンジし始めた。

Ａ２（全体）雨天の心配もあり，今回は全てを室内での発表にした。２歳児も保育園舎から遊びに来たり，交代したり一緒に遊んだりしながら，みんなで戸外遊びを楽しんでいる。

Ｑ３　今回の子ども達の遊びの中でできた環境構成ではどこにねらいを置いたのか，お勧めは何か，どんな意図や工夫があったかを教えて欲しい。

Ａ３（年長）当初は運動がメインとなり，一人で楽しむための指導案になっていた。しかし，一人での活動では遊びにも運動にも広がりが見られず，活動計画を見直していった。日々の子ども達の姿を見ながら，運動を主に置きつつも，友達との関わりやこれまで大切にしてきた事を盛り込んだものにし，「友達と遊ぶ中で進んで運動遊びを楽しむ」とねらいを立て環境構成を考えていった。

　フープやゴム跳びなど提示したのは保育者だったが，あとは子ども達同士のやりとりや遊びの中で生まれたものであり，この限られた空間の中で取り組めるものは何かと考え活動計画を立てた。

Ａ３（年中）広い会場で，伸び伸び・広々とどんな風に使うかを考えていった。鬼ごっこでは，ただ走るだけではなく障害物を置き，隠れたり避けたりできるようにした。また，這うという動きは日頃あまりでない動きであり，腕で進むという経験が出来るように環境構成の中に取り入れた。茶色から黒にトンネルが変わるところでは暗くなるため，トンネルが狭くなっていくような感じがあったようだった。

Ａ３（年少）繰り返しやってみたくなる環境を意識した。10月の芋ほりの経験からワニへ芋をあげるのは子ども達から出た案である。ワニのところがもっと楽しめるように，当初の予定から工夫をした。ボールが部屋いっぱいになってしまったため，場所の使い方や空間を考えての道具の出し方，工夫をしていきたい。

⑵ 協議内容　夢中になって遊びこめる環境の工夫があったか。

○子どもの事を見ながら活動計画を立ててあり，環境の工夫があった。保育者間の連携があり，さりげなく誘導していくなど遊びを広げる工夫があった。保育者も環境のひとつである。

Ｑ４　高校の体育館は日常的に使えるのか。

Ａ４　学内の施設として，運動会を高校グラウンドで雨天時には高校体育館で行い，日頃から時々行き来はあるが頻繁ではない。しかし，年長児は月に二回，他学年は学期に一回ずつ高校のサッカー場に行っており，広い場所で遊ぶ経験はあった。

○みんながよく動いていた。体育の環境＝運動量であり，よく成果が出ていたと思う。だが，幼児教育の“遊び”としてはどうだったのか。遊びの発展が今後の研究に値すると思う。

(3) 指導講評　　講師　十文字学園女子大学　准教授　鈴木　康弘　先生

鈴木先生　指導案から二つの視点に注目した。(1)思わずやってみたくなる環境であったか。(2)３つの指導案の共通点は「一緒に遊びを楽しむ」だった。“一緒に遊ぶ”に，どのような意味を持たせるのか。

工夫し，よく考えられた指導計画だった。東京大学薬学部の池谷先生の著書に「やる気はどうやって出てくるのか」について書かれたものがある。ポイントは４つあり，やる気は脳の淡蒼球（たんそうきゅう）に関連をしているとのことだった。４つのポイントは，①記憶に残るものに刺激を受けるとやる気が出る。(例：音楽をならす)，②イメージを持つ。(例：４歳児の地図を見せてからの移動)，③実際に体を動かす。動くことでやる気を動かすポイントとなる。(例：シブリング活動)，④誉める。このような工夫が環境の中に盛り込まれていた活動だった。

Ｑ　それぞれの学年に分かれる前，５歳児と３歳児が一緒にいたことの意味はなんだったのか。

Ａ（年長）年長組では，先の質問でも述べたように，自分たちで自信を持って遊べるようになった事を，今度は一年間一緒に過ごしたこども園での弟・妹である年少児に伝えられるようにしていきたいと考えている。シブリング活動を通して思いやりの心や，年下の友達への接し方，優しくする気持ちなど育んでいきたいと，進級・入園当初から各担任が思いを持ってペアを考え組んでいる。これまでも，運動会をはじめ，日常的に関わり遊ぶ機会を設け，園生活での楽しみの一つになっている子もいるようだ。

鈴木先生　シブリング活動の遊戯の中で５歳児としての，年少児を誘導した踊りができたのではないか。例えば，手をつないでジャンプをする時の手立てなど。運動の中でどのように心を育て，関わり方を育てていけるか，また運動の中でどのような動き方に工夫が必要だったかを考えていかないといけない。

Ｑ　５歳児なりの「一緒に遊ぶ」の目的は何か。この環境やこの仕掛けの中で一緒に遊ぶことの意味は何か。

Ａ（年長）これまでの付き合いの中で，それぞれ友達一人ひとりのことは子ども達同士がよく知っている。友達同士で教えあい，友達同士でお互いに思い合いながら遊びを広げていけるようにしていきたいと考えた。

鈴木先生　主体的に工夫して遊べるようになって欲しいという願いと共に，保育者としての工夫や遊びを提供して“このくらい伸びるのでは”という目安を持っておくことが遊びを広げるきっかけになる。

４歳児の保育に対して，基本的な運動パターンを色々な運動を通して楽しむことが出来ていた。ダンボールがあることで動きに変化が出ていた。４歳児なりに「友達と一緒に楽しむ」がどう出ていたのか。関わり方の違いから子どもの経験をどう深めていくか。

３歳児の保育に対して，ワニにエサをあげるための手立てについて。「ここから投げて」は難しいと思われる。そこに行けない・近づけない工夫をして遠くに投げさせる経験をさせるようにする。「いろいろ何の色」での片付け方は面白かった。

４　成果と課題

(1) 成果

やってみたくなる環境構成の工夫から見られる成果

・「またしたい！」「やってみたい！」という子ども達の思いが広がり，楽しみに思うこころに繋がった。

友だちと体を動かす楽しさを味わうための工夫から見られる成果

・友だちや保育教諭，異年齢児と一緒に体を動かして遊ぶ中で，動きを工夫したり，真似をしたりしながら，自然に多様な動きを経験することができた。

職員間の連携に繋がる職員ミーティングの実施からみられる成果

・子どもが主体的に遊びに夢中になって取り組めるような環境を具体的に共通理解することができた。

・異年齢のクラスの職員と指導計画を検討することで異年齢での活動機会が増えた。

(2) 課題

・保育教諭と子どもたちが協力して遊びを楽しむことはできていたが，主体的に自分たちでやってみようというところまでは至らなかったので，今後検討する必要がある。

・保育時間が長くなる中，保護者との連携をどのように行っていくか具体的に考えていく必要がある。

卒園児の実態　新体力テストの結果より　＜28年度卒と29年度卒の平均比較＞

28年度卒（平成29年度実施）	握力（kg）	上体起こし（回）	長座体前屈（cm）	反復横とび（点）	20mシャトルラン（回）	50m走（秒）	立ち幅とび（cm）	ソフトボール投げ（m）
本園の卒園児	8.20	8.33	20.93	22.70	12.60	12.75	88.07	5.93
その他の児童	**8.88**	**9.39**	**23.06**	**24.32**	**13.72**	**12.10**	**93.19**	**7.49**

29年度卒（平成30年度実施）	握力（kg）	上体起こし（回）	長座体前屈（cm）	反復横とび（点）	20mシャトルラン（回）	50m走（秒）	立ち幅とび（cm）	ソフトボール投げ（m）
本園の卒園児	9.71	**9.92**	**22.17**	**25.63**	**16.92**	12.00	95.75	**5.71**
その他の児童	**10.76**	9.73	21.87	23.97	15.64	**11.99**	**103.03**	5.54

分科会研究発表・研究協議等記録

小学校部会

第３分科会　佐賀市立勧興小学校

第４分科会　佐賀市立循誘小学校

第５分科会　佐賀市立神野小学校

第６分科会　佐賀市立新栄小学校

第３分科会

佐賀市立勧興小学校

所在地	〒840-0814　佐賀市成章町３番16号
校　長	中村　敏智
児童数	333名（通常学級12学級，特別支援学級５学級）
連絡先	TEL 0952-24-4235　　FAX 0952-24-4236
	E-mail　skanko@city.saga.lg.jp
ＵＲＬ	http://cms.saga-ed.jp/hp/kanko-e/home/homeMain.do

【研究主題】

主体的・対話的に運動やスポーツを楽しもうとする児童の育成

～「できる」「わかる」「かかわる」を保障した授業づくりを通して～

【３年生の授業風景①】

【３年生の授業風景②】

【５年生の授業風景①】

【５年生の授業風景②】

【分科会の様子①】

【分科会の様子②】

1　研究の概要

(1) 研究主題

主体的・対話的に運動やスポーツを楽しもうとする児童の育成
－「できる」「わかる」「かかわる」を保障した授業づくりを通して－

(2) 研究仮説（ねらい）

体つくり運動における児童相互が「かかわる」活動を通して，「できた」という達成感や成功体験を味わわせたり，「わかる」という動きの理解を深めたりすることができれば，主体的・対話的に運動やスポーツを楽しもうとする児童の育成が図れるであろう。

(3) 研究内容

ア　児童の実態と系統性を踏まえた，低・中・高学年ごとの体つくり運動における指導計画の作成を行う。

①　運動に関する児童の実態調査（５月・12月）をもとに，運動に対する意識の実態把握を行うとともに，実践を通しての意識の変容の比較・検証を行う。

②　新体力テストや児童の実態調査をもとに，体つくり運動における指導計画を作成し，検証を行う。

イ　「できる」「わかる」「かかわる」を意識した体育科学習指導の方法を検討・実践し，学習効果を検証する。

①　体つくり運動を中心とした体育の授業実践を行う。児童の実態把握と指導方法・指導内容の検討を行う。

②　学習過程や学習環境，教材教具の工夫などの検討を行う。

③　外部指導者と連携を図りながら，授業実践を行う。

2　公開授業

(1) 第３学年　単元名「エンジョイ！SUN SUNサーカス（多様な動きをつくる運動）」

授業者　Ｔ１大串　郁子　Ｔ２井﨑　夢元

○単元のねらい・構成

当初の指導計画では，それぞれの基本の動きをもとに工夫することに主眼を置いた授業であったが，児童が工夫することにこだわりすぎて，何を身に付けたのかが明確にできなかった。そこで，動きの質を高めることを，一人でできたことをグループでさらに高め合うため，「サーカスを開いて発表しよう」という課題を設定した。サーカスのショーを作るという目的のもと，一人一人が多様な動きを身に付け，みんなで作り上げるという目的意識をもって学習に臨む姿が見られた。

○対話的な学び

「もっと動きがよくなるにはどうするか」という対話題のもと，グループ同士お互いにできた動きを見せ合い，アドバイスを送り合った。時数を進めるにしたがって，自然と対話する姿が見られるようになってきた。

○Ｔ２（外部指導者）の役割

苦手な児童への支援やアドバイスを行ったり，できるようになった動きのコツを児童の

言葉として広げたりした。ＴＴの役割分担を明確にすることで，より詳しい児童の見取りを行うことにつながった。

⑵　第５学年　単元名「自分の『体力ハンドブック』をつくろう！（体の動きを高める運動）」

授業者　Ｔ１戸高　俊彦　Ｔ２井﨑　夢元

○単元のねらい・構成

スポーツテストの結果や様々な運動を通して，児童が自分自身の体力をチェックし，自分の得意な運動・苦手な運動は何かを明らかにした。「体力向上を図るための運動をプログラミングする」という，中学校に向けての素地を培うためにも，高学年で経験させる必要性を感じ，単元を構成した。

○主体的な学び

様々な運動を児童に取り組ませたいと考え，児童に提示したが，魅力的な運動，やってみたいと思える運動を大前提とし教材・教具の工夫を進めた。さらに，児童の体力に適した運動内容を考慮して，基準設定を慎重に行い，運動の負荷なども児童の実態にあわせて調整した。課題としては，普段の生活の中でも経験できるような運動を，児童とともに経験し，継続的に行えるようにできたらと考える。

○対話的な学び

高学年は活動を行いながら児童相互のかかわり合いができるように取り入れてきた。対話題は，その時間で児童が何について一番話したいかを優先的に考え，対話の有用性を持たせるようにした。振り返りに「友達から教えてもらってできるようになった」等を書いている児童が多く見られた。対話力の向上を目指してきたが，体育科だけでなく，他教科等でも対話力の向上を意識したカリキュラム・マネジメントが必要だと考える。

３　研究協議

⑴　提案

協議の柱としては，「主体的に運動を楽しむための手立てについて」「対話的に運動を楽しむための手立て」とし，２つの視点に沿って意見を求めた。

⑵　協議内容

Ｑ１　３年生への質問です。サーカスをするということで，子どもたちは意欲的に活動していたと思います。振り付けの調整など表現活動に近づきそうな内容でもあると思いますが，いかかでしょうか。
Ａ１　基本の動きから離れないように指導をしているのですが，その危険性はあると思います。子どもたちの動きを細かく見てチェックする必要を感じました。子どもたちの活動がねらいから外れてきた場合は，声掛けをしっかりし，修正していきたいと思います。

Ｑ２　５年生への質問です。苦手バージョンと得意バージョンの違いは，どのようなものでしょうか。
Ａ２　単元の初めに体力チェックシートを使って，自分の体力を測定させました。レベル３を基準としてチャレンジさせ，全部の運動を経験させています。その時に自分がクリアできなかったものを中心に苦手バージョンとしました。

Ｑ３　振り返りの共有は思考面のみをねらってさせていますか。子どもたちの動きの広がりについてはいかがでしょうか。
Ａ３　まず，思考面と知識面の共有がねらいにあります。次に，子どもの意見を称賛し価値づけることで更なる動きの質の向上や広がりが出てくることを期待しています。

Ｑ４　今，身につけている基本的な動きは４年生へどうつながっていきますか。
Ａ４　全部の動きを２学年単位で身につけさせていきたいと考えています。１・２年生で色々な動きを経験させ，３・４年生でさらに動きの工夫をしながら動きの質を高めていきます。４年生の最後に，基本的な動きを組み合わせる時間を設け，今まで身に付けてきた動きを利用して様々な組み合わせの動きができたらと考えています。

Ｑ５　５年生に質問です。「コツカード」に書いてあることは得意な子どもたちの意見ですか。
Ａ５　得意バージョンを行う上で子どもたちから出てきた「動きのコツ」をもとに「コツカード」を作成しました。子どもたちの意見で足りない分は教師がコツを書き足しています。

Ｑ６　知識・技能はどうのように評価をされていますか。
Ａ６　５年生：正しい運動を行ったかで評価しています。 ３年生：基本の動きが正しくできていたかで評価しています。

(3) 指導講評　　講師安田女子大学　教授　徳永　隆治　先生

○仲間と豊かに関わらせていくためには，話し合いのさせ方や学習カードの使わせ方が重要になってくる。

○新学習指導要領で特に重要なことは「主体的・対話的で深い学び」である。「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」がそれぞれスパイラル的に関わることが大事である。

○改善の具体的事項に「全ての児童が，楽しく，安心して運動に取り組むことができるようにする」とあるが，要するに児童が「嫌だな」「恥ずかしいな」と思わない体育の授業をしていかなければならないということである。また，「特に，運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮する」とあるが，様々な人々が「共生していく」時代であることを意識して今回の改訂で明記された事項であることをよく知っておく必要がある。

○「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには「問題意識を掘り起こす」ことが大事である。つまり，「こうなりたい」「こうしたい」という欲求を高めていくことである。教師が教えたいことを児童が学びたい事にしていく働きかけが必要となってくる。児童の活動を見守る中で，「いいぞ」「そうだね」といった教師の「指導的評価」が効果的である。

○「主体的・対話的で深い学びを実現する活動」の「児童相互のかかわり合いづくり」としては「一人の学びをみんなの学び」にしていけるように共有のさせ方を工夫していくと良い。「場づくり・用具の工夫」については，本日の公開授業の内容を参考に，自分たちの学校でできることを考え，工夫していくことが大切である。

○「体の動きを高める運動」については，「体力の向上」が主たる目的ではない。

○内容の「思考力・判断力・表現力等」に「友達に伝える」や「他者に伝える」とあるが，伝え方としては「他教科にもある伝え方」と「体育独自の伝え方」の両面を意識するようにするとよい。

４　成果と課題

(1) 成果

・主体的に学ぶ児童の姿

「サーカスを開いて発表しよう」「自分の体力ハンドブックをつくろう」といった課題設定が児童の実態に合ったものだったので，意欲的に運動に取り組む姿が見られた。また，使い慣れた教具であったり，「やってみたい」と感じる場づくりであったりしたため，児童自ら主体的に取り組む姿が見られた。

・対話的に学ぶ児童の姿

「かいわタイム」をグループ学習・ペア学習の場面で設定し，対話題を明確にすることで，児童自身かかわり合う必要性を感じながら対話する姿が見られた。

・Ｔ２（外部指導者）の役割

外部指導者とＴＴの形態で授業を行った。指導者同士で役割や児童の見取りを分担することで，苦手な子への支援や正しい動きの習得，さらには，動きの質の高まりにつなげることができた。

(2) 課題

・動きの質の高まり

児童は，互いにかかわり合いながら基本的な動きをもとに動きの質を高めていく活動に取り組んできたが，教師が一人一人の動きの質の高まりをいかに見取り，評価していくかが課題である。

・運動の日常化

体つくり運動を中心に様々な運動に触れさせてきたが，それを休み時間や放課後の時間に児童が実践する環境が整っていない。普段から体育学習で行った運動ができる学校環境の整備を図る必要があると考える。

第４分科会

佐賀市立循誘小学校

所在地　〒840-0822　佐賀市高木町15番30号
校　長　音成　　隆
児童数　385名（16学級）
連絡先　TEL 0952-22-4436　　FAX 0952-22-4437
E-mail　sjunyu@city.saga.lg.jp
ＵＲＬ　http://www2.saga-ed.jp/school/edq1010/

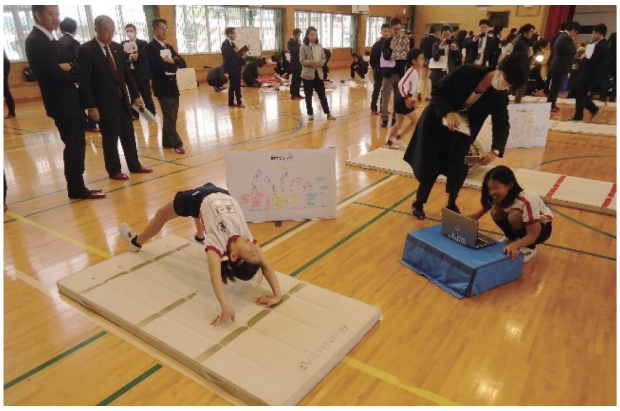
【研究主題】

運動の楽しさや喜びに触れ，主体的・対話的に運動やスポーツに親しむ児童の育成

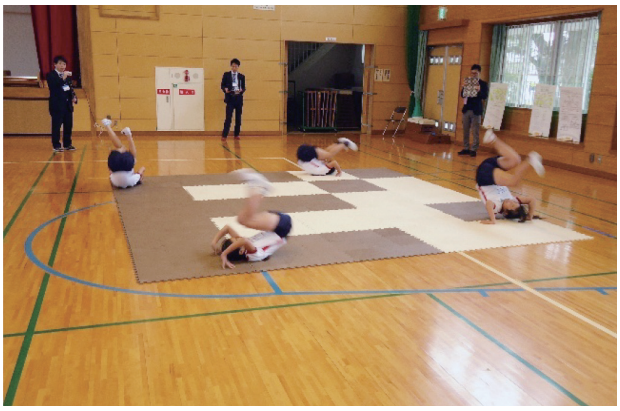
～器械運動の学習を通して～

【６年生の授業風景①】

【６年生の授業風景②】



【４年生の授業風景①】



【４年生の授業風景②】

【分科会の様子①】

【分科会の様子②】

1　研究の概要

(1) 研究主題

運動の楽しさや喜びに触れ，主体的・対話的に運動やスポーツに親しむ児童の育成
～器械運動の学習を通して～

(2) 研究仮説（ねらい）

器械運動において，児童の実態に応じた授業作りを行うことで，達成する喜びを感じさせることができれば，主体的に運動やスポーツに親しむ児童の育成が図れるであろう。また，体育の見方・考え方を働かせる学習課程を組み入れ，児童が教え合いながら活動することで，課題解決への思考力，判断力，表現力等が高まり，対話的に運動やスポーツに親しむ児童の育成が図れるであろう。

(3) 研究内容

ア　器械運動領域における体育科学習指導の方法の確立

①　器械運動領域に関する授業研究・実践や環境整備を進める。

②　器械運動領域における体育科学習指導についての検討会を行う。

イ　低・中・高学年ごとの器械運動領域における年間計画の作成

①　小学校学習指導要領解説体育編の例示を参考に，器械運動領域の２年間を見通した年間計画の作成を行う。

②　器械運動領域の年間計画を６年間の系統性が明らかになるように修正をする。

ウ　器械運動領域における体育の実践授業

①　体育部による授業公開を行い，講師を招聘し全校授業研究会を行う。その中で児童の実態把握の仕方や指導方法などの検討を行う。

2　公開授業

(1) 第６学年　単元名「跳び箱運動」　　授業者　野崎　慎悟

〇単元のねらい・構成

単元を構成する際，児童の技能の実態把握に努めた。結果，技能の差が大きいことから，児童一人一人の課題が異なることがわかった。以上のことから，学習形態をスパイラル型にし，児童がそれぞれのめあてを持って活動できるようにした。めあて１（エンジョイタイム）の活動では，今できる技のできばえを高め，めあて２（チャレンジタイム）の活動では，もう少しでできそうな技に挑戦するように単元を組んだ。単元が進むにつれ，めあて１（エンジョイタイム）の活動時間が多くなるように単元を構成した。

〇主体的な学び

スパイラル型の学習形態をすることで，児童が自ら立てためあてに向けて活動することが可能となった。児童がめあての技を達成するために，跳び箱の段数を変えたり，マットを敷くといった練習の場を作り変えたりする姿が見られた。また，めあて１（エンジョイタイム）で抱え込み跳びの練習をし，めあて２（チャレンジタイム）では屈伸跳びをするといっためあてのつながりが見られた。

○対話的な学び

学習資料として技の形態図を用意した。児童は自分の課題を見つけ，課題を解決するために学習資料を見たり，技ができてる子の技を観察したりしながらコツをつかむことができるようになっていった。また，お互いの技を見合う場を設定してアドバイスをする時間を設けた。さらに，拡大した形態図も用意をし，技のコツを付箋で書き込ませることで課題解決に向けた手立てをとった。

課題としては，技のどの場面を見てアドバイスをするか戸惑っている児童も見られた。「よかった」などの情意的な言葉ではなく，技のコツなどのアドバイスの質を高める手立てが必要でる。

(2) 第４学年　単元名「マット運動」　授業者　前田　晃宏

○単元のねらい・構成

できる技を増やし，できばえを高めたいという児童の願いから授業を考えた。マット運動では，「腕支持」「逆さ感覚」「体をスムーズにマットにつける」等が重要なため，毎時間の始めにそれらの感覚を養うための動きづくりの時間を多く設けた。また，技能差が大きいことから，自己の能力にあっためあてを選択させ，めあて１「エンジョイタイム」(今できる技を続けたり組み合わせたりして，できばえを高めながら楽しむ)，めあて２「チャレンジタイム」(もう少しでできそうな技に挑戦して楽しむ）のスパイラル型で授業を行った。

○主体的な学び

めあて１では，各班のマット以外に５ｍ×５ｍのマットの場を用意した。児童は技能レベルが同等の友達と声を掛け合って３，４人のグループを作り，回転系の技をシンクロさせる等，進んで活動する姿が見られた。めあて２では，坂道マットやロールマット等を活用して場の工夫をしたり，技ができる友達に技の行い方を聞きに行ったり，パソコンを用いて友達に動画を撮影してもらったりして，自己の課題を解決しようとする姿が見られた。

○対話的な学び

拡大した技の形態図に見つけた「技術のポイント」を「着手・離足」は赤の付箋，「姿勢」は黄色の付箋，「着地」は青の付箋に色分けして貼らせるようにした。めあて２では，その拡大図を練習する場に持って行き，友達の見つけた「ポイント」を意識して技に取り組む児童が見られた。また，パソコンで技の行い方の動画を見たり，技ができる友達にアドバイスをもらったりして，必要に応じて自分から学ぼうとする姿が見られた。

課題としては，自己にあった技を選択して取り組んでいるため，同じ技に挑戦している友達同士では対話が生まれるが，全体で共有する場をもっと設けることで，「ポイント」をもっと早く掴める児童もいたのではないかと考えられた。

３　研究協議

(1) 提案

協議の柱を「本授業は，児童が主体的・対話的に活動しながら，運動に親しむものであったか」とし，「めあて」と「場づくり」の２つの視点に沿って意見を求めた。

(2) 協議内容

Ｑ１　いろんな技をしているところをどのように指導するのか。どのように教え合いをマネジメントするのか？
Ａ１　まずは，児童が技をしっかりと理解することが大切である。動画を用意し，どのように体を動かすのかをしっかり示し，理解させている。体育の時間以外でも動画を見せながら共通理解，事前指導を行っている。それが，互いにアドバイスすることにつながっており，教え合いのスキルも高まった。指導する児童は，毎時間数名に絞っている。新指導要領解説に記されている「苦手としている児童への指導」を熟読し，佐賀の体育の資料も読み直しをしている。それらを踏まえて指導をしている。

Ｑ２　場の工夫について，学校，学年において統一されているのか。マットや跳び箱を平行に並べないことで全体が見られる等の工夫がある。場の設定や教師の立ち位置等，学校全体で何か共通理解があるのか。
Ａ２　場の設定で考えていたことは，跳び箱で必要以上に助走を走らせないようにすること。助走ではなく，踏切と着地をきちんとそろえて飛ぶことに意識を向けさせたかった。したがって跳び箱の位置を固定していた。学校でも同じ考えで試してみて，情報交換をしている。

Ｑ３　めあて２の場の提示に関して，教師と児童の共通した決まりごとがあったのか。それとも，児童の内発的なものから生まれたものであるのか。
Ａ３　教師側から場を提示していた。マットをつなげているものを分解したり，自分で考えて場を工夫して線上を回るようにしたりしていた。

Ｑ４　６年生の授業で，フラフープの場からアドバイスを送る姿がよかった。得意な児童が苦手な児童に教えるような場面は設定していなかったのか？
Ａ４　得意な児童が苦手な児童に教えるということを，前に出しすぎないようにしていた。だから，そのような意図的な対話の場面は仕組んでいなかったが，実際には，そういった姿が見られるようになっている。やらされてするのではなく，困ったら友達に聞くことで主体的な学びになるようにしたいと考える。

Ｑ５　４年生の授業でシンクロの場を設けてあったが，どのような意図があったのか。
Ａ５　学習指導要領に「心と体を揃える」との表記がある。前転と後転しかできない児童でも，友達と合わせることでマット運動を楽しむことができるようにしている。

Ｑ６　新学習指導要領「表現」をどう考えるのか。この授業ではどのような視点だったのか。
Ａ６　「表現」についてどう評価するのかは自分自身も悩んでいる。もっと単元が進んでから，表現の観点から評価することがあると思うが，児童の声掛け等から見取りたいと思っている。判定基準については，まだ検討中である。

その他（感想）

○活動の中で，児童同士の対話がたくさん見られてよかった。めあて１，めあて２の間，ふりかえりでの教師と児童，児童同士の対話がもっとあればよかった。付箋だけでなく対話で共有することが良かった。ふりかえりの場では，自分の感想だけでなく，もらったアドバイスを全体で共有する場面があった様相が見られるとよかった。

○児童の課題意識がどのレベルまで高まっていたのか。「腰が上がらない」「勢いが足らない」という具体的なものか，「できている」「できていない」といったものか。課題まで意識が高まっていなければ，アドバイスが散漫になる。それは技が多様であるからという面もあるという感想を持った。だから「がんばれ」等のアドバイスになっていた。

○めあて学習を行うと，児童の気付きが伸びないという悩みがあった。技がいっぱいあると対話が見られない。共通課題を設定させ，同じ技で取り組んでいくと技のポイントが交流できる。そのような観点から考えると，全てを個人課題にするのは難しいのではないか。

○京都市でもスパイラル型の学習を実践している。児童がそれぞれにめあてを立てて活動することは見取りが難しい。学習資料がそれを支えている。映像（ICT）技カード等を活用しながら関わっている。今回の授業では，特に形態図での積み重ねが見られた。それらを媒介とした対話がなされればよりよい。

(3) 指導講評　　西九州大学　教授　福本　敏雄　先生

○一学級最大40名の児童がいる中で，一時間の内に教師が一人で全ての児童に関わるのは不可能である。特に器械運動ではそうである。だから危険な行動をしそうな児童や，器械運動が苦手な児童へ時間を割きたい。その間に，しっかりと自律的に学べる児童は，「学び合い」で進めてほしい。自律的に学ぶところまで高まっていない児童でも，仲間の課題を見てあげることはできる。

○「できないけど分かる」が大切になってくる。分かることを伝える活動を繰り返すことで，対話を通した学びのスキルが上がっていく。「技を広げすぎ」という指摘もあるが，接点技や倒立技等，類似の技で系統的に考えるときに共通した課題もある。児童自身が「わかったこと」を「表現」し，仲間に伝達する過程を大切にしたい。「訳が分からないうちにできてしまった」で済ませてしまうことはよくない。

○児童の立場に立って運動を見ていくことが大切。その際には，できない児童の立場から見て，つまずきを共有することが大切である。

○生涯スポーツの観点から，自分の生活にもスポーツを取り入れていく必要がある。学校体育もその基礎となる。だからこそ，児童の能力に応じて技に取り組ませていくことが大切である。一斉に技に取り組ませていくことは，教師側の指導のしやすさが視点となっており，できない児童にとってはとても苦痛なものである。

○90％の児童が技を習得できる指導はとても素晴らしいものではあるが，残りの10％の児童は楽しさを味わうことができない。残りの10％を指導する力が教師側に必要である。全ての児童に技ができるようにさせる指導は難しいところもあるが，スモールステップであっても，自分で進歩できていることを感じることができれば，大きな満足感を得ることができる。

○器械運動において「できる」は難しい。そこで準備運動にアナロゴンを取り入れ，次の技

へのステップとする。類似の易しい運動に取り組ませることが，運動感覚を養うことにつながっている。

○何度も繰り返し行うことで，児童が「できる」から「わかる」の世界へステップアップすることができる。ここでは，「どうやってできたの？」という教師の問いかけが必要である。できたことに対する満足だけでなく，どうしてできたかを考えさせることが，技の定着につながる。タブレットでは自分の動きを見返すことが技の理解へとつながる。これは他の運動においても同様である。

○技の系統表は，自分の技能の状態を把握するためには絶対に必要なものである。また，技の形態図を活用し，その技はどういう動きかということを把握させておくことが大切である。運動はすぐに消え去ってしまうので，タブレットの活用は有効である。形態図だけではスピードや力動感が分からない。スピードは動画では分かるが，力動感は分からない。練習するときは，着地の局面から練習するとよい。最後の局面を準備運動から練習しておくことがよい。主要局面はスピードが速いので，動画をスローモーションで見せるとよい。

○器械運動におけるシンクロは，全国の実技指導講習会でも紹介されている。多くの児童は，仲間と一緒にリズムを合わせてすることに興味をもっている。手をつないでみたり，腕を組んでみたり，ジャンプしてみたりしながら活動することが，チームの課題を意識したり喜びを味わったりすることへとつながる。

○「児童のやりたいこと」と「教師が教えたいこと」をどのようにして調整していくかということが，学習計画の中心となる。

4　成果と課題

(1) 成果

○主体的に学ぶ児童の姿

・自分の能力に応じた技を選んで取り組むことができたので，児童は意欲をもって活動することができていた。スパイラル型の学習は，児童の運動欲求を満たす学習スタイルとして有効なものであることが分かった。

・児童の実態を考慮し，低学年の器械運動遊びの動きを系統表の中に取り入れたことで，器械運動に苦手意識をもつ児童も活動しやすくなっていた。当該学年の技に縛られず，柔軟に対応することが全ての児童の主体性を高めることにつながっていた。準備運動で取り組んだアナロゴンも主運動につながる運動として効果が高いことが分かった。

・「できた」という達成感を味わわせることが，児童のさらなる主体性を導き出していた。「できた」という達成感だけでなく，「上達した」という達成感も味わわせるために，技のできばえを高めるエンジョイタイムを大切にした。同じ技であっても場を工夫してみたり，友達と合わせたりすることで様々な楽しみ方ができることを発見し，児童の活動の幅が広がっていた。

○対話的に学ぶ児童の姿

・「技に入る前に，どこを見てほしいのかを伝えること」「自分の技が済んだら必ず次の人の技を観察して一言声をかけること」に取り組んだことで，全ての児童が仲間と対話をして活動することができた。

・発見した技のコツを付箋に書き，拡大した形態図に貼らせるようにした。つまずいた時

にはいつでも参考にできるように掲示しておいたので，多くの児童が参考にしていた。同じコツでもそれぞれに表現の仕方が異なっており，自分に合ったものを技に生かす姿が見られた。資料との対話ができていた。

・前年度の反省から，今年度は跳び箱の高さで活動する場を決めた。同じ場で様々な技を行うので，エンジョイタイムでもチャレンジタイムでも活発な教え合いがなされていた。

(2) 課題

●運動の日常化

・改訂学習指導要領では，運動をする子としない子との二極化を受け，「スポーツをする」だけでなく「みる・支える・知る」といった多様な視点から，「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指す」と改められている。器械運動は非日常的な動きをすることが多く，体育の授業で学んだことを日常の遊びの中で行うという機会は少ない。現在，佐賀県が行っている「スポーツチャレンジ」を積極的に活用し，馬跳び等に取り組むことで器械運動の日常化に努めたい。

第５分科会

佐賀市立神野小学校

所在地　〒840-0805　佐賀市神野西二丁目４番８号
校　長　平田　繁正
児童数　783名（30学級）
連絡先　TEL 0952-30-4255　FAX 0952-30-4256
E-mail　skono@city.saga.lg.jp
ＵＲＬ　http：//cms.saga-ed.jp/hp/kono-e

【研究主題】

仲間と共に学び合い楽しみながら運動に取り組む児童の育成

～「わかる」と「できる」を往還させる対話活動を通して～

【５年生の授業風景①】

【５年生の授業風景②】

【５年生の授業風景③】

【６年生の授業風景①】

【６年生の授業風景②】

【６年生の授業風景③】

1　研究の概要

(1) 研究主題

仲間と共に学び合い楽しみながら運動に取り組む児童の育成
～「わかる」と「できる」を往還させる対話活動を通して～

(2) 研究仮説

主体的に学べる場を設定し，「わかる」と「できる」を往還させる対話活動を進めていけば仲間とともに楽しみながら運動に取り組む児童の育成につながるであろう。

(3) 研究内容

ア　主体的に学べる場の設定

①　児童の意欲を高めるために工夫された場の設定を行った。様々な場の設定が，児童の意欲に繋がる。ボール運動で考えられる工夫の観点として，「ボール」「ゴール」「コート」「ルール」「人数」などが挙げられる。これらの場の設定を工夫することで児童の意欲を高め，主体的な学びに繋げられるようにした。

②　自ら考え工夫する力を身に付けるための活動として，児童に自分の力に合っためあてを設定させた。児童が自ら考え工夫する力を身に付けるためには，児童が主体的に活動できるような授業にしていく必要がある。そこで，その領域に合った準備運動や主運動につながる運動を提示し，児童が自分の力，チームの力に応じて準備運動を選択できるようにした。

イ　「わかる」と「できる」を往還させる対話活動

①　視点の共有化をもとにした指導を行った。視点を「コツを引き出すための見方」と捉え，対話的な学びの核と位置づけて研究に取り組んだ。コツを引き出すために，自他のチームの良い動きなどを毎時間ワークシートに書かせて，それを学習場面に分類して掲示することでクラス全体に視点を広げていった。

②　作戦タイムなどでの話し合いだけではなく，ゲーム中にチームメイトに向けた言葉かけや授業最後の振り返りの時間に出た言葉のやりとりも対話活動とした。対話活動を設定するには，児童が単元前半で十分にその運動に慣れ親しみ，ボール操作に関する動きや，ボールを持たない状態での動きについて「言語化」が進んだ状態である必要があった。そこで前半から対話活動を設定するのではなく，単元の後半で設定することで，より質の高い対話活動に繋げようとした。

ウ　その他の取組

①　６年間を見通したボール運動系の年間指導計画の作成

②　全校児童による体育（スポーツタイム）の実施

2　公開授業

(1) 第５学年　単元名　ハンドボール　　授業者：真崎　芳洋

〇場の設定

ソフトハンドボール１号級を使用したところ，操作性が高く，児童にとっても使いやすいようであった。一度にゲームに入れる人数はキーパーを含め４人としたが，全員が動き

回ることができる妥当な人数であったため，個人のめあて達成に繋げることができた。ゴールの大きさはもう少し大きい方が，攻撃の仕方の幅を広げる場の設定に繋がったという反省もあった。

○視点をもとにした対話活動

単元前半には授業の時間内で対話するための時間はなかったものの，児童は準備運動やハーフタイムを利用して，チームメイトで対話活動を行っていた。その内容も前半と後半で違いがみれらた。前半では「技術習得・技能向上のための対話」，後半では「チームが勝つための対話」が主であった。視点をもとに自分やチームメイトの動きを言語化でき，その結果，児童間での対ゲーム中の対話の質も向上していったことは成果の一つである。

○視点をもとにした技能の向上

視点をもとにした振り返りやめあてを学級全体で共有したことで，対話活動が活発になり，結果的に「わかった」と感じる児童が増えていった。そこで児童は自分自身の課題解決のために試行錯誤を繰り返していった。児童一人一人のシュート数・ゴール数が向上していることから，「わかった」と感じた児童が「できた」と感じるようになっていった。

(2) 第６学年　単元名　ツインリングゲーム　　授業者：河上　泰彦

○場の設定

バスケットゴールの下にもう一つゴールをぶら下げたことで，多くの児童がシュートする楽しさを味わせることができるようにした。ボール運動が苦手な児童もシュートを決めることができた。ダンクシュートも可能となり，シュートの打ち方の幅が広がり，チーム独自の作戦を立てることに繋がった。運動能力が低いチームでも勝率が上がり，主体的に話し合いを行っていた。

○視点をもとにした対話活動

視点をもとにした振り返りを学級内で共有することで，チーム内で自分達の動きに関しての言語化が進み，対話活動が活発になっていった。ゲーム中にも，チームメイトがどう動いたら良いか支持する声が多く見られたり，作戦タイムでは作戦ボードなど使わずに，会話のみで作戦を練り直していたりと，単元当初に比べ，対話内容の質も量も充実していった。

○視点をもとにした技能の向上

視点をもとに理解が進むことで，「できた」と感じる児童が多くなっていった。「わかる」と「できる」が往還し，深い学びに繋がったと言える。シュートを打つためにシュートチャンスを作ったり，そのためにどんなパスが有効か試行錯誤したりと，技能を確実に上げていった。

(3) 協議内容

質問

Ｑ１　単元の最終段階の授業である今日の授業で，先生が目指す攻撃の形はどのような形だったか。それが，子どもたちの姿に表れていたか。
Ａ１①　目指す攻撃の形とは，「自分たちの力に応じた作戦であったか」ということを重視した。単元を通して，児童は，ロングパスはあまり効果がないと思っていたが，視

点の「速さ」を意識して早い展開させたいという児童が増え，ロングパスの必要性を感じ始めた。ある班がロングパスもキャッチさえできたら有効だということを見せてくれたので取り上げた。そのチームにとっては，ロングパスが有効であるが，他のチームは一緒とは限らないので，「自分たちの力に応じた作戦を立てることができていたか」が大事であることを問いかけながら作戦を立てさせてきた。

Ａ１②　目指す攻撃の形とは，「それぞれのチームの力・よさを生かした作戦を使うことができていたか。」ということ。青チームは，背の高い児童を生かしたロングパスを使ったり細かいパスをつないだりするなど，相手の状況に合わせた動きができていた。青とオレンジは，自分達が考えていた攻撃の形になっていた。白とピンクはうまくいってなかった。

Ｑ２　タイムマネージメントで，音楽を使用していたことがよかった。視点があったので，教師とも共有しやすいし，子供たち同士が対話できてよかった。ツインリングの授業後に泣いている子がいたが，どうして，そんなに夢中になれるのか，理由が知りたい。課題としては，運動の特性を味わわせることが大切なので，運動の特性で上げている文章を疑問形にして投げかけてもいいのではないか。本時の目標が達成できたかを見とるのが難しいし，児童も，話し合いの内容が，立てていた作戦と一致していたのだろうか。ホワイトボードに作戦やめあてを書いて確認できるようにしておけばよかったと思う。ボールが小さいとシュートがよく入るといういいところもあるが，キャッチミスも多かったように思う。

Ａ２①　ピンクチームは今まで負けていなかった。運動能力としてはピンクチームが一番低かったが，リーダーを中心に声掛けをして，アドバイスをして，練習をして，みんなでやろうと試行錯誤してチームでまとまってやってきたので，負けが悔しかったからだと思う。自分たちで作戦を考えてきてうまく通用しなかった，思い描いた通りにできなかったのが悔しかったからだと思う。つまり，子供たち自身で話し合いをしたり，作戦を考えたり練習をしてきたりなど，自分たちでやってきたことが夢中になれた理由だと思う。

Ｑ３　単元を貫くテーマとして「どうやったら勝つことができるのか」を挙げているので，勝つことに意識してしまっていた。「こんなことが分かったよ」「こんなことができたよ」が生まれていたのに，勝てなかったということで，消されてしまっていたようだった。単元を通しては，どうだったのか。

Ｑ４　前時の授業を次の時間にどのように生かしていくのか。めあてが変わっていない子はどのように取り扱っていくのか。

Ｑ５　ＩＣＴの活用で，タブレットで撮影はしていたが活用をしていなかったのでどのように活用するのか。

Ｑ６　作戦シートは，あまり見ていないようだったが，どのように活用するのか。

※Ｑ３～Ｑ６については，協議の中で話題にすることにした。

協議

柱１　主体的な学びの場について

Ｑ７　今日の授業で，どういった技能を身につけさせたかったのか。

Ａ７①　５年生では，学習指導要領の解説書を元に，パスを受けてシュートすることができる，近くにいる味方にパスすることができると考えた。判断が遅くてできなくても，パスをしようとしただけで，近くにいる味方にパスをするという技能を身につけようとしていることに繋がるので，その視点が見られたことはよかった。
Ａ７②　５年生の目標に加えて，空いている空間，得点しやすい場所に動くというところを見つけさせたいと思い，視点を元に声をかけていった。

Ｑ８　どの子たちに基準を合わせて授業を行っていたのか。

Ａ８①　初めは，運動が苦手な低位の子に基準を合わせて，全員が楽しめるような場づくりを考えた。技能差をより縮めていくことが課題と考えるので，上手な子も苦手な子も楽しめるということを考えながら場づくりをした。苦手な子もシュートができて楽しく活動ができたので，下の子を見つめて場づくりができたと思う。しかし，７／８ではついていくだけの子もいたので，いろいろな場の設定のしかたもあったのではないかという反省点もある。
Ａ８②　ツインリングゲームで，２つリングを吊り下げたことで，シュートを決めたことがない子にたくさん得点をできる喜びを味わわせたいと思い，スタートした。ボールを小さくしたのは，前学年で扱いなれていることと，大きなボールは上位の子だけしかうまく使えないので，技能差を縮めるために考えた。一番は，ゴールする喜びを味わう子が増えるようにこのゲームを考えた。

Ｑ９　今まで積み重ねてきたものがあって，いい学びの場であったと思うが，問いが勝つことだったので負けたことで全部が否定されたのでは，残念だと思う。

Ａ９①　勝とうとすればするほど技能を身につけようとする，分かろうとするのが運動のよさだと考えている。子どもたちが楽しんでやっているので，勝てた時の楽しさ，シュートを入れた時の楽しさがより倍増をする。そこで，勝つというのを問い続けていきたいと思う。
Ａ９②　ピンクチームは，勝てなかった悔しさもあると思うが，今まで，勝っていても，立てた作戦がうまくいかなかったことにしょんぼりすることがあったので，その度に，うまくいかなかったところはどうしたらいいか，うまくいったところは続けていこうと声をかけてきた。勝てなかったことだけが涙につながったのではなく，自分達が目指していたゲームができなかったことが大きな原因だと思う。

Q10　今日の授業では，どのようなことを指導内容として捉えていたのか。子どもたちに身に付けさせたい力は何か。子供たちはよく頑張っていてゲームは成立しているが，体育として何をどういった手立てでやっていきたいのかがよく分からなかったので教えてほしい。

A10①　子供と運動が身近になるために，手立てやめあてを一人一人立てさせてきた。教えたいというより，子どもが何を学びたいかということを問いかけ，発言させてきたり，書かせてきたりして，優先させてきた。パスが大事やシュートチャンスをつくりたいということが出てきた時に，必要感にかわるように声掛けをしたり全体に共有したりしてきた。パスをしたい，シュートをしたいという気持ちになるように，声掛けをしてきた。個々に，違っためあてを把握していたので，準備運動の時やゲームの時に声掛けをしていった。シュートができていない子には，どこでもらったらいいだろうか，どこに走ったらいいだろうか，と声掛けをしたり，動けない子には手を引っ張っ

て行ったりしてしながら感覚をつかませたいと思っていた。指導内容と子どものめあてにねじれが生じた場合も子どもたちのめあてを優先し，めあてが指導内容に向くように価値づけていこうと努力をした。動けない児童には，シュートできるようになるように，毎時間の終わりに聞いて，教師との対話を繰り返しながら一緒に学んでいった。

A10②　指導より，個人が立てためあてを元に，話をしていった。必ず振り返りカードを書かせ，学んだことやうまくいかなかったことを書いているので，ヒントとなるようなことをコメントに書いて，子どもたちに応じた指導をしていた。その時間にこれを絶対やるという設定はしていない。振り返りではその子なりに分かってきているのだが動きには結びついていないので，その手立てを課題にしていかないといけないと思う。

Q11　シュートに向かっての分かる・できるを子どもたちにどう伝えていけばいいか考えさせられた。主体的な学びの場として，ツインリングゲームは，ゴールの裏があったり，上の網から下の網に入ったりするということから，子どもたちがゴールに結びつく場になっていたと思う。

柱２　評価について

Q12　休む間もなく走り続けていたり，話し合いをしたりする子どもたちはすごかった。今日の授業の評価は思考判断であったが，ＡＢの違いを知りたい。具体的な子どもたちの姿で知りたい。また，今日の時間で子どもたちをどのように見とるのか教えてほしい。

A12①　B…視点を元にした作戦を選んでいる　A…これまでの学習・振り返りを元に自分たちの力に応じた作戦を選んでいると位置付けた。Bにおいては，今まで，視点を元に学習をしてきたので，ほぼできたいた。今までの試行錯誤の末作戦を考えているチームがA。青チームでは，２名，緑チームで４名がA。オレンジ１名　ピンク１名「前はよかったよね。」と言ったのでAである。あとは，ワークシートで評価を考える。

Q13　子どもが何を学びたいかということに必要感が生じたときに教師の出番があるという基本的な先生の姿勢が主体的な学びの場を与えていると感銘を受けた。６年生のバスケットで，青チームは，ＢかAか？

A13②　評価のＡとＢは，５年生と同じ。青チームは，これまでの積み重ねにおいて，ロングパスを使っていたのがうまくいかなくなって，小刻みにつないでいった。さらに，身長が高い女の子がシュートを決めれるようになって，ロングパスが通るのではないかと作戦を立てていた。これまでの学習を振り返ってロングパスと高さを生かすということを考えた作戦だったのでAと考える。オレンジチームの片方は，ボールを出したら前に出るということがうまくいって点数を決めることができたのでAと考える。あとは，ワークシートを見て決める。

柱３　視点をもとにした対話活動について

Q14　子どもたちが生き生き活動していた。得点が入らなくなってきたのは，守りの意識が出てくるから当然のことだと思う。それを，どうすればいいのかと，視点を元に対話していけばもっと発展していくのではないかと思う。

Q15　苦手な子には難しいのではないかと思った。速攻型は，自然と出てくるものだと思うが，社会体育で活躍している子が中心に戦術的なことをやっていた。より，その子たちが際立っていたように思った。入り乱れにしないで，３オン３などでやっていけば攻撃が一定になって苦手な子も今何が行われているのかが分かると思う。攻撃を考える，ディフェンスを考える，ボールカットを一度に考えるのは難しいと思う。役割分担的なものになっていた。セット型は，意図的な攻撃に展開をもっていけるので，苦手な子も何をすればいいのかわかってくるし，先生としてもどんな攻撃がいいのか見えてくると思う。おもしろさを全員に味わわせたいと思っているのでそれを考える機会になった。

Q16　青の作戦はロングパスを使うだったが，その振り返りが，「決めるところで決めれてよかった」「サインを見てなかった」など作戦に対して振り返りができていなかったのが残念であった。一方で，「友達がスペースを見つけてくれ，前へ来い！とサインを出してくれるから動きやすかった」という感想もあり，攻め方（作戦）が動きとしてできる瞬間も見られたので，分かる・できるが結びついたことを取り上げて拾っていくとテーマに沿った具体的な姿に繋がっていくと思った。

Q17　ゲームがメインになっているので低位の子は，何が起きているのか分からない。局面を作り出してあげるのが一番だと思う。タスクゲーム（サークルゲーム・トライアングルパスゲーム）などの手立てを施したうえでゲームに参加させると，低位の子も空きスペースに動くということが分かると思う。

※Q14～Q17は意見としてうかがった。

Q18　子どもたちは夢中になっていて育っていると思った。学びの視点はなぜ，この３点だったのか。スペースが大事なのではないか。また，子どもたちの話の中で，ハンドボールで，三角でだめだったので速さでいこうという作戦になっていたが，なぜ三角がだめだったのかに向かうのが，子どもの学びを支えるものになると思う。

A18①視点に関しては迷った。たくさん設定しすぎると子どもたちが混乱するのではないかと思い，３つに絞った。子どもたちの学びの中には，視点に当てはまらないものもあったが，実際，視点に基づくものが多かった。５年生は，初めて高度なゲームになったので，より分かりやすく，身近なものに感じやすくするために子どもたちのためと思って３点に絞った。また，ボール運動が苦手な子供たちもたくさんいたので３点に絞って良かった。しかし，別の視点もあったのかなと思ったこともあったので，参考にしたい。

Q19　対話活動の質が問われていくのではないかと思う。今日の授業では，平面のゴールと空間のゴールの違いはあったが，ボールも同じであったし，パスをどうやって通すか，パスをどうやってカットするかなど対話活動の内容が同じであったと思う。ボールの大きさが変わるだけでも，対話活動の内容も変わっていくと思う。

A19①　ボールの大きさは三種類迷った。大きすぎると上に向かってシュートが打てなかったり，ドリブルが上手な子たちがもちすぎてしまったりする可能性を考えた。昨年ハンドボールを経験して，女の子でも痛い怖いということはなく，ボールに向かって手を出したり体を張ったりしてプレーをすることができていたので，ツインリングの楽しさに触れることができるのではないかと思い，今回はボールを小さくした。ご意見にもあったように，あまりにもボールが小さいからできないこともあったことは反省しているので，場づくりについては，今後も考えていきたい。

(4) 指導講評　　講師　佐賀大学　准教授　堤　公一　先生

ア　コンピテンシー・ベース時代におけるボール運動（ゴール型）の体育授業づくりとは？

今回の佐賀大会は，2020年度から全面実施となる改訂学習指導要領（小学校から順次実施）において，移行措置１年目となる研究大会であった。改訂学習指導要領の趣旨を踏まえた１年目の佐賀大会として，小学校・中学校・高等学校の12年間を通して，生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現（継続）する力を育成するため，「何ができるようになるか（資質・能力）」を明確にし，「主体的・対話的で深い学びの実現」につながるように研究の重点１～３を設定していた。そこで，神野小学校では，学校の実態やこれまでの研究の流れから，佐賀大会の研究の重点１「今持っている力で運動やスポーツを楽しむことからスタートし，『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業づくり」を中核としたボール運動（ゴール型）の授業提案を行った。

改訂の背景にある中央教育審議会答申等によると，「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は，「コンテンツ・ベース（内容）重視の授業づくり」から「コンピテンシー・ベース（資質・能力）重視の授業づくり」へ転換という教師の認識の変化を促す試みであるといわれ，「教え」と「学び」の営みである授業において，教師の「教えがい」以上に子供の「学びがい」がある授業づくりが求められる時代に突入したということである。

イ　主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた体育の授業づくりとは？

改訂小学校学習指導要領解説体育編では，主体的・対話的で深い学びの実現に向けて，「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」をそれぞれ次のように定義している。

「主体的な学び」：運動の楽しさに気付き，運動についての興味や関心を高め，課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組み，考察するとともに学習を振り返り，課題を修正したり新たな課題を設定したりする。「対話的な学び」：運動についての課題の解決に向けて，児童が他者(書物等を含む)との対話を通して，自己の思考を広げたり，深めたりする。それらの（主体的・対話的な）学びの過程を通して「深い学び」：自己の運動についての課題を見付け，解決に向けて試行錯誤を重ねながら，思考を深め，よりよく解決する。

今回の神野小学校におけるボール運動（ゴール型）の体育授業では，学びの当事者性に着目し，「主体的に学べる場の設定」「『わかる』と『できる』を往還させる対話活動（視点をもとにした)」という手立てを工夫して，「ボール運動ゴール型のゲーム理解」に迫っていくという３つの学びの実現に向けてチャレンジしていた。

このように，今回の神野小学校における体育授業の提案は，コンピテンシー・ベース時代におけるボール運動（ゴール型）の体育授業づくりのひとつとしての提案であり，全国からお越しになっている先生方と研究協議で活発に議論できたことが何よりの成果であったと思う。来年度以降の研究大会でも引き続きコンピテンシー・ベース時代における体育授業づくりとは？「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた体育の授業づくりとは？について議論を深めていってもらいたい。

4　成果と課題

(1) 成果

・単元が進むにつれて「児童の心に残った対話活動」の数が増えていった。アドバイスや指示をしている児童が多く，その一連のやり取りから振り返りをしている児童が多くいた。児童が主体的に学習を進めていき，技能向上に向けて試行錯誤を繰り返していった。さらに，ゴール数が増えていることから，児童の技能が向上したことも成果の一つとして考えられる。主体的で対話的な深い学びがなされていたからこそ，児童の中で「できる」と「わかる」が往還し，楽しみながら学習に取り組む児童の姿に繋がったのではないかと考えられる。

・「目線・方向」「距離・場所」「時間・速さ」という３つの視点を用いて活動を行ったところ，全ての児童が自分の活動について振り返りやすく，動きについて考えを深めていく姿が多く見られた。視点があるおかげで，学級の中の共通言語に動きやコツの見方がしぼられたため，児童が動きを捉えやすくなり，児童同士での対話活動の活性化に繋がった。運動に対して苦手意識を持っている児童でも，パスやシュートの仕方について考えることができた。

(2) 課題

・「目線」「速さ」「場所」という視点はボール運動においては有効であったが，陸上運動や器械運動においても同様の視点を用いようとしたところ，「速さ」の視点があまり児童には浸透しなかった。各領域でそれぞれの運動の特性にあった視点を考えていくことが必要である。そうすることで，どの領域でもその運動に深くかかわろうとする児童の育成に繋がることが考えられる。

・運動に対して苦手意識をもっていても，ある程度の運動能力がある児童には，視点はとても有効であったと考えられる。しかし，苦手意識もあり，運動能力が極端に低い児童には「できる」という思いをもたせることができなかったので，今後は，苦手意識をもつ児童が「できる」と感じるようにする手立てを考えていきたい。

第６分科会

佐賀市立新栄小学校

所在地　〒840-0850　佐賀市新栄東二丁目６番34号
校　長　古賀　善充
児童数　386名（16学級）
連絡先　TEL 0952-22-8111　FAX 0952-22-8112
E-mail　shinei-e@mail.saga-ed.jp
ＵＲＬ　http://cms.saga-ed.jp/hp/sinei-e/

【研究主題】

運動やスポーツの楽しさを味わい，仲間と共に主体的に運動やスポーツに親しもうとする児童の育成

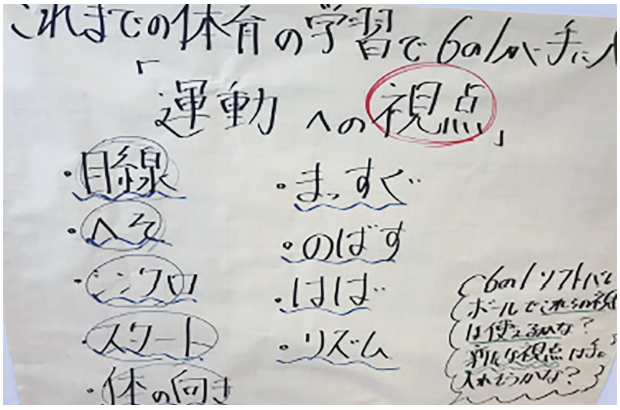
～学習内容を明確にした体育や保健の授業づくりを通して～

（「高跳び（４年）」の様子）

（「けがの防止（５年）」の様子）

（「ソフトバレーボール（６年）の様子）

（作戦を立てている様子）



（学習内容の視覚化）

（ICTの利活用）

1　研究の概要

(1) 研究主題

運動やスポーツの楽しさを味わい，仲間と共に主体的に運動やスポーツに
親しもうとする児童の育成
～学習内容を明確にした体育や保健の授業づくりを通して～

(2) 研究のねらい

体育科において児童の児童の実態に応じた体育の授業づくりを基本に据え，学習内容を明にしていくことを通して，仲間と共に運動やスポーツの楽しさを味わい，主体的に運動やスポーツに親しもうとする児童が育つ授業実践を目指す。

(3) 研究内容

ア　今持っている力で運動やスポーツを楽しむことからスタートする「できる・わかる・かかわる」を保証した授業づくり

①「できる・わかる・かかわる」について

「できる・わかる・かかわる」をそれぞれ次のようにとらえる。

○「できる」とは，運動の特性に応じた技能を身につけること。けがの手当てと不安や悩みの対処ができること。

○「わかる」とは，運動や保健に関わる知識を身に付け，理解すること。また，「めあて・活動・振り返り」を通した学び方を身に付けること。

○「かかわる」とは，仲間と共に，言葉掛けやサポートをして運動をしたり，ICT機器や学習資料を活用して課題発見や課題解決を図ろうとする思考力,判断力，表現力等を発揮したりすること。また,学びに向かう力，人間性等のこと。

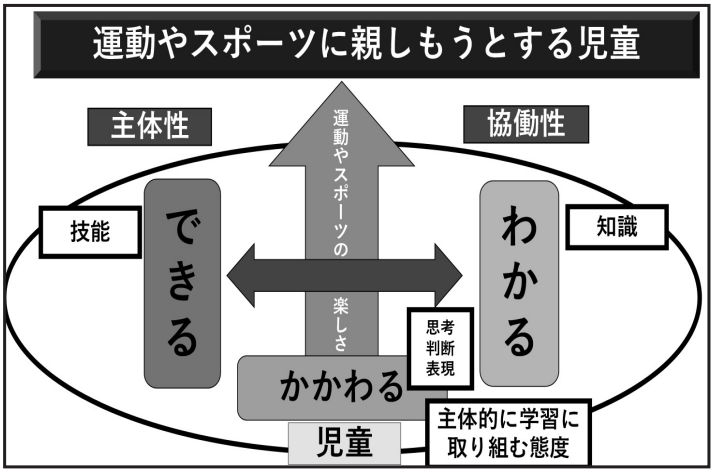


図１「できる・わかる・かかわる」を大切にした授業イメージ

上記の「できる・わかる・かかわる」の３項目が相互に関連できるような授業設計を行う（図１）。そして，児童が今持っている力で運動をスタートした児童が，主体性や協働性を発揮しながら学習活動を行い，運動やスポーツの楽しさを味わい，「知識及び技能」,「思考力，判断力，表現力等」,「学びに向かう力・人間性等」を身に付けることができる授業や単元を繰り返すことによって，運動やスポーツに親しもうとする児童を育成することをねらう。

②　「できる・わかる・かかわる」を関連させた単元づくりの具現化

図２は，単元の導入でどんな学習をするかや，目指す姿を児童と共有することなどを示したものである。児童に問いかけながら考えさせ，単元のゴール像をイメージしながら学習を進めていけるようにする。

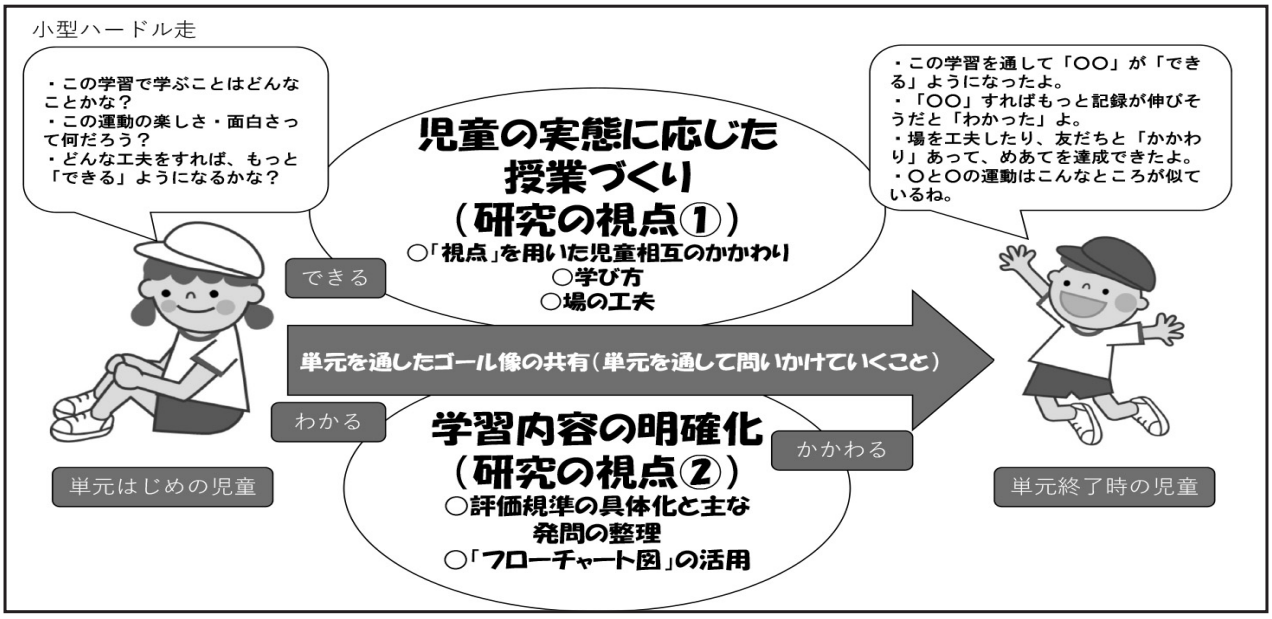


図２　単元づくりのイメージ

イ　学習内容の明確化

①　カリキュラム・マネジメントの視点からの年間計画

学校行事や他教科他領域でのかかわりを意識しながら単元を配列したり，低・中・高学年の各２年間や６年間を考慮した単元の配列を心掛けたりして年間計画を作成する。

②　改訂学習指導要領を踏まえた知識及び技能の系統性の明確化

改訂学習指導要領への移行を円滑に行うため，知識及び技能の系統性を明らかにしていく。

③　フローチャート図の活用

児童が単元を通してどのような技能を習得すべきか，その過程で児童がどのような思考をするのか，教師側が技能習得に向けてどのような発問をすればよいかをフローチャート図に整理する。この整理により，単元全体の指導や評価の見通しを持つことができ，教師側が積極的な評価や具体的な指導に生かすことができる。

④　視点の活用

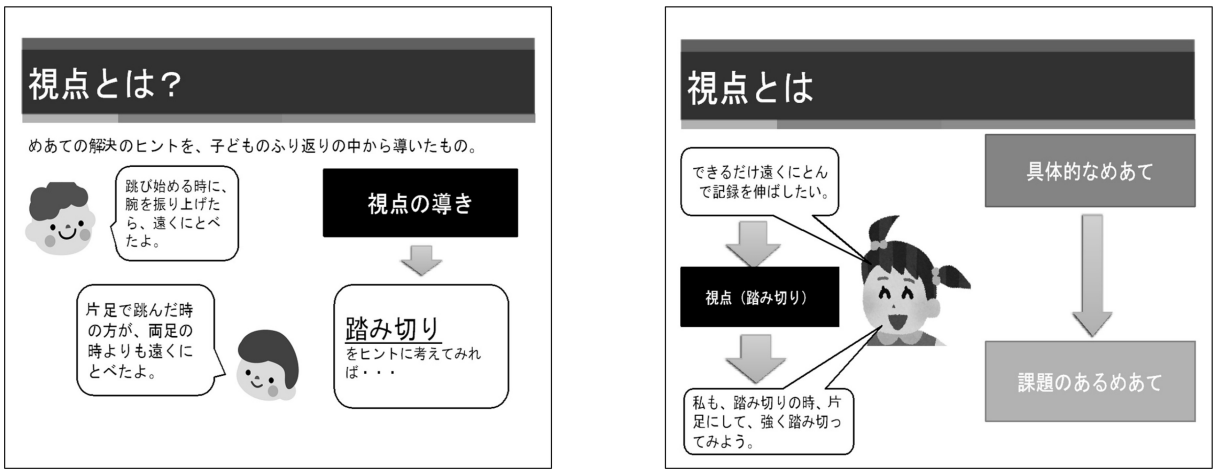


図３　視点について

ここで述べる「視点」とは，体育学習で児童の振り返りをもとに，課題を見つけたり，解決したりするための見方を示したものである。図３はその考え方を示している。例え

ば３年生の幅とびの学習の中では児童の振り返りの中から「踏み切り」や「目線」「空中姿勢」といった視点を段階的に扱っていく。

ウ　ポートフォリオ評価

これまでの取り組みをポートフォリオ評価によって振り返り，自己の体育学習への取り組み方や運動やスポーツへの見方・考え方を深めていき，生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力を育成していく。

エ　「SE（新栄ENJOY)タイム」の設定

月２回程度，朝の時間に，全校で楽しみながら運動や遊びを行い，意欲の向上と習慣化をねらう。

２　公開授業

(1) 第５学年　単元名　けがの防止　　授業者　田中　蓉子

これまでの保健の授業は知識の教え込みが中心だった。その反省から，自分達で話し合い，深めるながら「できる」「わかる」「かかわる」授業を目指した。本単元では「危険の予測」「安全な行動」に焦点化して行った。本時は児童が「かかわり」ながら考えが深まっていたかどうかを確認したい。

けがの防止の授業に当たって，身近な日常の体験や事例などを題材にした話し合いや，思考を促す資料の提示，応急処置の実習などを取り入れた。これらの学習を通して，内容に関心を持てるように工夫した。また，健康に関する課題を解決する学習活動を積極的に行うことにより資質・能力を育成させるようにした。さらに，適宜養護教諭と連携・協力を図ることで子供たちの関心を高め，理解を助けるものとした。

本単元の学習内容と結びつけ，「新栄小けが防止プロジェクト」として低学年に学習に用を伝えることで学校全体のけが防止，高学年としての意識向上，学習内容の振り返りへとつなげられるよう工夫した。

(2) 第４学年　単元名　高跳びチャレンジ（走・跳の運動）　　授業者　吉田　宗平

単元を通して，「どうしたら高く，ふわっと跳べるかな」と問いかけていった。単元の初めに「助走」「踏み切り」「振り上げ足」などについて個人の課題をつかませた。「課題にチャレンジ」では，共通の課題を持つ友達と課題解決に向けて活動を行い，自分の記録を伸ばすことにより達成感を味わわせた。「共有タイム」では，チームや学級でうまくいったことや困ったことを出し合わせ，解決のヒントを与えたり課題を明確にさせたりした。「記録にチャレンジ」では，チームで役割分担をしながら測定をしあい，単元の最初の記録と比較させた。どれだけ伸びたか感じることで達成感を味わわせた。単元を通してチームで活動することで，互いの記録や跳躍の仕方の変化に気付けるようにした。

竹のバーに緩衝材を巻き，恐怖感を軽減させり，スタート地点や踏み切り位置に目印を置いて意識化を図ったり，踏み切り板を置いて力強く踏み切ることを意識させたり，抜き足の引き付けを意識させるようにゴム紐とバー2本で幅を作ったりするなど，教具や場の工夫を行った。さらに，必要な動きのコツを教えたり，仲間を励ましたり，気付きを伝えたりするための手助けとしてICTを活用した。

(3) 第６学年　単元名　ソフトバレーボール～自分たちの攻め方を積み重ねて勝利をつかめ～（ボール運動）ネット型　授業者　田中　孝

「ボールを相手コートにいかに落とすか，どうすれば自分のコートにボールを落とさせないか」を単元のゴール像とし，児童と教師がそれを共有しながら授業を進めた。また，勝つためにチームの一員として何ができるかを考えさせた。

落下速度が遅くなるように軽いボールを使用したり，ネットの高さを高めにしてボールを受けやすくしたりしてボールに対して恐怖感を持つ児童がゲームに楽しめるようにした。また，１打目，２打目まではボールをキャッチしてよいというルールにしたことで児童が目線や体の向きなどにも意識できる余裕ができ，三段攻撃を味わうことが可能となった。

試合はローテーション形式をとらず，陣形もチームで考えさせるなど自分達のチームの特徴を考えながら作戦を立てさせ，勝敗を競い合えるようにした。

ICTの利活用については，主に２つの効果があった。１つ目は，前時の様子を動画で見せながら，学級全体に課題をつかませることができたことだ。２つ目は，撮影した動画を見ることで，チームの特徴をつかんだり，チームでの連動した動き方をとらえさせたりすることに役立ったことだ。

３　研究協議

(1) 協議内容

Ｑ１　高跳びについて他の学年もフローチャートは作成されているのか。
Ａ１　まだ残せていない。今後残していけたらと思う。

Ｑ２　ICTの利活用は「使わなくてはならない」という感じになってはいないか。そのまま関わった方が効果的なところもあったように思う。
Ａ２　たくさんの子供達に意見を出させる時間を作るために全体の共有場面でICTを活用したが直接グループ同士話し合わせられる場面もあった。ロールプレイングにおいて動画は効果的だったので必要に応じて活用していきたい。ICTはあくまでもツールの１つ。子どもたちの理解度を高めたり，思考を活性化させたりする場面で活用したいと思っている。

Ｑ３　高跳びについて個人の課題は単元を通して１つなのか。複数必要ではないのか。
Ａ３　その日に書くワークシートに次のめあてを書く欄があり，実際に複数の課題を書いている児童もいる。だから，単元を通して１つというわけではない。

Ｑ４　高跳びの意欲が終盤にしぼんでいった理由についてどう考えるか。
Ａ４　高跳びは記録だけにこだわると個人の能力もあり，どうしても停滞していく。フォームなどに着目させると，後半記録が伸びない時も意欲が下がらなかったのではないかと反省している。

Ｑ５　高跳びで個人のめあてと共有するめあてが違っていた。めあてが違うことで子供たちはどちらに気を付けるのかがはっきりしなかったのではないか。
Ａ５　個人のめあてと共有するめあてということで，児童は個人と全体のめあてとして把握できていたと思う。

Ｑ６　兄弟チームの一人に着目して動きを観察させる手法が多いが，今回チーム全体の動きを観察させていた。難しいのではないか。
Ａ６　活動量を保障するため，兄弟チームを設けなかった。だからこそ，タブレットを活用し，休み時間に見ることで観察が忙しすぎることを解消させた。

Ｑ７　ローテーションをしないので，攻撃に関わる児童は限られていた。全員点数を入れたくはないのか。
Ａ７　「ねらい１」で得点に関わる動きを十分楽しませている。その上で「ねらい２」としてチームとしての動きを考えさせた。本時においても，アタックはしなくてもフェイントで参加するなど，チームの役割を意識しながらプレーしていた。

Ｑ８　勝ちを意識させることについてどう考えるか。
Ａ８　勝ちを意識させすぎると感情的になりすぎる児童もいる。今回はあえて表面に勝ち負けを出さず，子どもたちの内在的な意識の中でだけにし，全体で共有しなかった。

Ｑ９　ソフトバレーボールは児童の動きとして１打目はキャッチなしでも十分試合が成り立つようになっていた。あえてこのルールにした理由は。また，今後キャッチを減らす計画はあるか。
Ａ９　中学校へつなぐことが大切になってくる。今回はボールをつないで存分に楽しむことに重きをおいて授業を組み立てた。１打目をキャッチなしにするとボールに触れる児童が限られてくる。実際には早く攻撃につなげるため，キャッチしないチームも出てきていた。バレーボールの特性を大切にしながら自然に中学校へつながるように計画している。

(2) 指導講評　　講師　愛媛大学教授　日野　克博先生

ア　これからの体育授業について

2017年４月にスポーツ庁から出された「第2期スポーツ基本計画」によるとスポーツは「みんなのもの」としてスポーツ参画人口の拡大をねらっている。そのためにどのような体育の授業を目指すのかが問われている。

イ　授業の見どころについて

新栄小の研究授業の見どころは児童の姿。いい表情が見られ，「楽しいからもっと楽しい」「みんなが楽しい」「みんなで楽しい」が表れている授業だった。これからの体育は子供の「愛顔（えがお)」があふれるものでなくてはならない。そういう授業で前向きな気持ちや思いやりの心が育つ。そのような授業の提案だった。

ウ　「子供ファースト」な授業について

授業づくりは①子供にとって課題がやさしい②子供にとって条件がやさしい③子供にとって言葉がやさしい「やさしい」授業でありたい。また，やさしいことを「わかりやすく」することも大切である。学習内容に視点を与え，焦点化し，可視化させていく。ＩＣＴをそこで利用していた。思考といかにつなげていくかが重要である。ゴールイメージを共有することで「分かる」授業を目指していた。分かると「できる」ようになり，楽しくなる。また，友達や教師からの称賛や承認で喜びを感じる。他者と豊かに関わることで「たのし

い授業」となる。

さらに①教材・教具を工夫②学習カードや学習資料を工夫③ポートフォリオ評価を工夫④支援を要する児童への配慮などから「深い」授業となる。

豊かなスポーツライフを楽しみ，共生社会に生きる子供たちを育てるために以上のような授業づくりを目指していく必要があると考える。

4　成果と課題

(1) 成果

・子どもたちの今持っている力で運動やスポーツを楽しむことからスタートする「できる・わかる・かかわる」を保障した授業づくりを行うことができた。

・３領域に分かれ，研究を進めてきたが，各領域において話し合い活動や授業相互参観を行い，研究を深めることができた。また，各領域とも，ICTを効果的に活用することもでき，今後につながる研究ができた。

・保健領域では，子どもに切実感を持たせたるための課題提示の工夫や，ICT機器を活用した活動の工夫を行うことができた。子どもたちも，これまでの知識を活用しながら，「危険予測」や「正しい判断」を行うことができるようになってきた。さらに，「安全な行動」と「危険予測」の２観点に焦点化して子どもが思考することができるようになってきた。

・陸上領域では，場や教材の工夫をすることを通して，子どもの主体的な活動や協働的な活動を支援することができ，自分のめあてに向かって，友達とICT機器を活用しながら，試行錯誤する姿を見ることができた。「どうしたらふわっと高く跳び越すことができるか」の高跳びの特性に十分触れさせながら，指導することができた。

・ボール運動領域では，「キャッチあり」などのルールやボールの重さ，ネットの高さなどの場の工夫することによって，誰もが攻撃，守備共に参加でき，楽しめる活動となった。「いかにボールを相手コートにボールを落とすか，自分たちのコートにボールを落とさないか」を問い続けたり，チーム内で自分たちのチームや他チームの動きについて話し合ったりする時間を充実させることによって，陣形や攻撃パターンを各チームで工夫するなど，ゲーム理解を促すことができ，バレーボールの特性を十分に味わわせることができた。

(2) 課題

・子どもたちのレディネスに差が大きい運動に対して，どのような授業を行うことが子どもたちにとって有益かを考え，改めて授業づくりを行っていく必要がある。

・各領域の系統性を踏まえ，「いつ・何を」具体的に指導していくかを再度，全校で共通理解していく必要がある。

・今回は３領域を中心に研究を行ってきたので，他領域においても活用できるか，さらに研究を深めていきたい。

分科会研究発表・研究協議等記録

中学校部会

第７分科会　佐賀市立城西中学校

第８分科会　佐賀市立大和中学校

第９分科会　佐賀大学
教育学部附属中学校

第７分科会

佐賀市立城西中学校

所在地　〒840-0027　佐賀市本庄町大字本庄1021番地１
校　長　大藪日左恵
生徒数　352名（平成30年５月１日現在）
連絡先　TEL 0952-24-9220　FAX 0952-24-9219
E-mail　josai-j@mail.saga-ed.jp
ＵＲＬ　http://cms.saga-ed.jp/hp/josai-j/

【研究主題】

仲間とともに向上を目指す学習の方法

～個と集団をつなぐ学習を通して～

「再生動画を見て，
課題をみつける様子」

「団体戦に取り組む様子」

「選択練習の様子」

「踏切りの位置から，
スタート位置を探す様子」

「跳躍の頂点が，バーの真上に
きているか確認する様子」

「ふりかえりの様子」

1　研究の概要

(1) 研究主題

仲間とともに向上を目指す学習の方法　　～個と集団をつなぐ学習を通して～

(2) 研究仮説（ねらい）

本校保健体育科では，仲間とともに「主体的な学び」や「協働的な学び」を取り入れた実践を通して，体力と運動の技能，課題解決力，コミュニケーション能力，論理的思考力を高めることによって，生徒はより各種の運動の楽しさや喜びを味わえるような授業の実践を目指すことができるようになるであろう。

このことにより，中学校学習指導要領おける保健体育科の目標である「明るく豊かな生活を営む態度を養う」ことが実現するであろう。

(3) 研究内容

生徒の「主体的な学び」,「協働的な学び」が積極的に行われ，体力と運動の技能，課題解決力，コミュニケーション能力，論理的思考力を高め，運動に親しむ能力をつけさせるために,以下のような手立てを仕組む学習カードの工夫を行うことで研究を進めた。

ア　主体的・協働的な学習活動の工夫

班での役割分担を行ったり，練習やゲーム運営ができるようにしたりする。また，課題解決に向かうような協働的な学びにつなげるために，仲間からのアドバイスをもとに，個人でふり返りを行うことで課題や改善点を学習カードで共有し，次時のめあてを確認させるようにする。また，ＩＣＴ利活用により授業の導入で動画や写真を提示して生徒の興味・関心を高め，学習意欲と見通しをもたせる。

イ　課題を明確にする学習カードの工夫

めあてや課題をもって主体的に取り組みやすくするための資料の提示とともに，学習カードに習熟度のレベルを示してステップアップできるようにする。習熟度をステップに分け，技能的に容易な技から難しい技へのステップを明確にすることにより，生徒の主体的な活動を促し，お互いに高め合う集団の育成につなげる。

ウ　学びの履歴が見える手立ての工夫

生徒が目標を立て，その目標を達成するための計画，　その実行による学習過程，これらを学習の履歴として見えるようにした学習カード（ポートフォリオ形式）を用いて，教師が生徒の学びを把握し，評価につなげる。加えて，生徒のつまずきを把握して，学習方法の改善に生かしていく。生徒自身は，自分の頑張りや課題が見えることで，自信と意欲につながり，課題解決に向けて，学習を進めていくことができるようにする。

2　公開授業

(1) 陸上競技（走り高跳び）　　授業者：千住　靖明

対話的な学びの流れの中で,「キーワード」を使ったアドバイスや会話ができるようになり,跳躍に失敗した場合の原因を探る質の高いグループ活動ができるようになったと思っている。練習を選択する際に,選択した理由をはっきりと全体の場で聞くことができなかったことが指導者の今後の課題であり,十分なグループ活動が保証できるような授業展開を改め

て考え直していく必要があると反省している。グループ内で共有できた部分を全体の場で発表したり,グループ活動同様に全体の場で共有したりすることは難しい部分ではあるが,仲間とともに向上を目指す姿が着実に見えていたことは事実である。

またICTの利活用や用具の工夫により,子ども達の意欲をかき立てられたことも今後に生かしていきたい。学習カード（ポートフォリオ）を使用する際は,前回の課題や反省に着目し,自身の課題やグループの活動につなげることができた。まだまだ細かい部分の見直しや今回ご指摘いただいた部分を訂正していけると学びの履歴が分かりやすく見てくるので,今後も様々な種目に応じた学習カードを作成していきたい。

３　研究協議

(1) 提案

ア　主体的・協働的な学習活動の工夫

イ　課題を明確にする学習カードの工夫

ウ　学びの履歴が見える手立ての工夫

(2) 協議内容

Ｑ１　積極的に取り組むということと,生徒が自分で練習方法を選ぶという点に課題をもって授業を参観した。協働的な学習について同じようなジレンマを抱えていたので，今日の授業は提案となる授業であった。「ＡかＢかＣか」ではなく「ＡかＢ」でもなかった。「ＡができていればＢ」という，中学校１年生という生徒の実態に合ったやり方であった。

学習カードが生徒の思考の過程が見える形になっていればいいのではないか。２段目の『今日のめあて』に対応して下にめあてを設定した理由を書く欄があれば思考の過程が見えるのではないか。網羅的に，継続的に記録をとることも履歴としては意味のあることだが,「今日は練習方法の選択」，２時間目は「出来栄えを相手に伝える」という思考・判断の学習の中でも，伝えているのか観察で見取るのではなく，全ての生徒がどうであったかというところを見なくてはいけないので，思考・判断・表現のところですべての生徒を評価するという点で，学習カードの作り方は重要になってくるのではないか。

Ａ１　対話的と協働的な学びと違いということで，城西中の保健体育科が考える協働的な学びについて説明したい。「協働的」ということで，協力すること，グループ内で働きかけをしていくことを大切にしている。具体的な「働きかけ」の例としては，アドバイスをする人，記録をホワイトボードに記入する人，安全面に配慮してマットの位置を正す人，タブレットで撮影する人などいろいろな役割があるが，１人１人がグループに対して働きかけができるよう，教師側もアドバイスをしていきたい。対話的な学びによりさらに発展させた形を目指していしたいと考えている。

Ｑ２　最初にタブレットを見ている生徒たちの距離が，頭がぶつかりそうなくらい近くて，普段から行っている授業の成果として生徒同士の関係性ができていることが感じられた。

４班の活動の様子を見ていく中で，I君の助走はリズムがほとんどなく，歩幅も同じような状態だった。団体戦になる時，同じ班のMさんが「全部同じになっているから，１・２は大股，後の１・２・３は小股だよ。」とアドバイスをしていて，それを受けたI君は正しい動きに近づくことができていた。

協働的な学びとは，具体的にこのような場面としてとらえていいのか。

これから求められる対話的な学びとはどのような違いがあるのか考えをうかがいたい。

Ａ２　協働的な学びから対話的な学びへギアをあげて学習しているという話に関して，協働的な学びをずっと追及していって11月に研究公開があった。その時に京都大学の石井教授の指導助言をいただいた。「対話的にギアをあげるというのは，協働的な学びで生徒と生徒をつなぐことを中心に考えてやってきて，生徒同士の対話ということに注目していたが，対話というのは教師と生徒の会話も意味するし，対象世界，教科の本質，その教材との対話も含まれてる。」という言葉に「なるほど」と思えた。もっといろんな対象物との対話をするということを目指して来年度の研究へと向かいたいと考えている。

Ｑ３　椅子を使って行っていたはさみ跳びをもう少し詳しく教えてほしい

Ａ３　いすの低い位置にゴムバーがついていて，横にはさみ動作でしっかり太ももを上げるように意識させている。自分の振り上げ足によって体の向きも変わる。早いリズムで飛べるように繰り返し練習させている。学研の実技の副読本から生徒に紹介している。

Ｑ４　グループ分けをどのようにしたか

Ａ４　数式で算出した目標記録の近い人同士で組んでいる。

Ｑ５　ゴムバーやマット運動用のマットで何センチまでいけるのか

Ａ５　今の城西では，はさみ跳びで着地までしっかりできて155センチが最高。

Ｑ６　ゴムバーから手を一本分とるのはなぜか

Ａ６　踏切の位置を検索するのに片腕の長さを利用してというのは学研の副読本に載っていることでこれを参考にした。踏切が近いと振り上げ足が引っかかってしまうというのは生徒たちも理解はできている。

Ｑ７　グループワークをする際に，何のためにするのか目的を確認されていたが，時間設定がされてなかったのでされなかった理由があったのか。また振り返りの場面でもアドバイスしたことは聞いたけど何でその練習方法をしたのかといったことに触れられなかったのでなぜかなと思った。

Ａ７　毎回繰り返していることなので生徒たちはわかっていると思っていた。選択した理由を最後の振り返りのときにもっと深めていかなければならないと思った。聞けなかったことは学習カードを参考に判断している。

Ｑ８　今日の課題は，「練習方法を選択しよう」となっており，観点は思考・判断となっていた。千住先生が描いていたゴールはどのようなものだったのか。振り返りの時に生徒がどのようなことを書いていたら良しとするのか。自分の授業でも振り返りを書かせると，感想になってしまう生徒がいるので，課題に対してまとめの欄をつくって今日の授業を自分の言葉でまとめさせ，そのあとに振り返りを書かせている。振り返りを書くときに，「今日の課題が何だったっけ」となる生徒がいるので，振り返りを書く前に何を書くのか伝えないといけないと感じている。

指導案の５番に学習のねらいと評価規準のところの思考・判断のところで，「学習課題の取り組み方を工夫することができる。」とあり，「自分や仲間の力にあった課題をもち，基礎的な知識や技能を活用して学習課題への取り組み方を工夫することができる。」とあるものがこの単元のねらいになるのかと思う。「工夫することができる」とあるのが，どういった点で工夫することができたとするのか伺いたい。

Ａ８　協働的・対話的な活動の中で活用できたらいいと考えている。今日も対話的な部分で，キーワードを用いて対話的な流れが活性化するように仕組んだ。まだ，課題は多いが生徒にも会話の中での工夫，言葉の使い方，キーワードを使いこなして対話的な流れが成立してくれたらと考えている。

※Ｑ９・Q10は意見としてうかがった。

Ｑ９　協議の柱のア主体的・協働的な活動の工夫について。グルーピングの工夫として，今回は計算式で個人の目標値を設定してグルーピングをしたとのことであったが，対話の必然性をもたせるために，同じ課題をもてばいいのではないかと考える。計算式で目標値を設定し，グルーピングをした場合，身長が高い生徒や，走るのが速い生徒が高い数値が出るようになっている。現在は，ただ単なる数字で分けたグループということなので，ばらばらの課題をもった生徒が集まっている。例えば，それぞれの技能レベルや，同じ目標の伸び率，同じ課題をもつグルーピングにすれば，同じ困り感をもった生徒がいるグルーピングになったのではないか。そうなると課題が共有されているので，アドバイスや対話がうまれるのではないか考える。

Q10　来年，全国大会での研究授業を控えている。指導言語という話を周囲の先生たちと話をしていた。生徒たちを意図的に動かすためには，適切で端的でわかりやすい言葉が必要なのではないかと考える。自分自身の授業を考えるにあたって，発問をどう工夫して授業のねらいに迫っていくかということを勉強している。今日の授業でも，発問に注目していた。先生と生徒の会話が答えを教えるのではなく，生徒から引き出すような会話が多くあった。普段から，授業の中でそのような取り組みが行われているのを感じ，参考になった。楽しそうに自分たちで活動できている姿は，１年生の今の段階では，十分だと感じた。練習の場の工夫も十分になされており，生徒の思考を引き出しながらの授業と合わさって，２年生，３年生になったときの伸びが楽しみである。

Q11　安全面について一番配慮されたことは。
A11　両足着地ができるように目指している。マットを２枚置いているので跳んでいるとそこに溝ができてしまうので跳んだあとは直すようにしている。床にポイントを付けている。

(3) 指導講評　　講師　立命館大学　教授　大友　智

ア　新学習指導要領について

学習指導要領の改訂で，一人一人の教員が授業を変えることが期待されている。生徒が体育を学ぶ過程，学習過程を変えることが国民から期待されている。これからの社会変化に応じて使いまわすことができる汎用的な能力が求められている。共鳴する，表現する能力が必要である。汎用的な能力とは何かを具体的に決める必要があるということで，基礎的リテラシー，社会スキルというところが上がってきた。各教科の特徴を教える中で，汎用的な能力を教えることが必要だと示した。

・2030年に生きる子供を育てる。
・内容論に能力論が加わった。学力論が拡大した。
・子どもに獲得させたいもの，ことに対する考え方。一つのものを見てたくさんの見方・考え方ができるようにさせる。開かれた教育課程。
・授業をどのように変えるか。課題を発見し，合理的な解決に向けた学習過程が求められている。課題発見のツールを提示してやる。教員が合理的な練習方法を複数提示し選ばせる。
・『明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる。』究極の目標。
「態度を育てる」から「資質能力を育てる」と究極の目標が変わった。

イ　本時の授業について

・『主体的・対話的で深い学び』学ぶことに興味・関心をもって本時は学習できていた。学習に見通しを持っていた。粘り強く取り組んでいた。「自己の学習活動を振り返って，次につなげるような深い学び」という点が，まだ改善の余地があったように思える。
・『対話的な学び』子ども同士の協働もできていた。「知識を相互に関連付けて考えを広める」という点では，いくつか手立てはあった。
・今回は頭がぶつかるほど近くで映像を見ていて，大変授業の状況が良好だったと思う。

4　成果と課題

(1) 成果

・グループ活動で「キーワード」を使って，アドバイスや会話ができるようになり，できない理由やできた理由がグループ内で共有することができた。
・学習カードの中に仲間からのアドバイスや技能の習得過程におけるチェックをさせるような，個と個，個と集団，集団と集団のつながりをもたせることで，課題解決に向けて振り返りながら学習を進めることができるようになった。

(2) 課題

・集団の構成としてグルーピングの仕方・班の中での役割のもち方

班の構成は同じくらいの習熟度の生徒で構成したり，スキルテストをもとに技能を均等に分けた班にしたりと，単元の特性や生徒の実態に応じて，有効なグルーピングの仕方を考えていくことを視野に入れていきたい。数式に拘って考えるだけでなく，同じ目標の伸び率，同じ課題をもつグルーピングにすれば，同じ困り感をもった生徒がいるグルーピングができ対話的な学びが生まれやすいのではと考えた。

・一人ひとりに合っためあてや課題の設定

個人の目標の設定において，体力や技能の差はあっても一人ひとりの頑張りが評価されるような課題を多くもたせたい。そして，誰もが意欲的かつ主体的に学習していける授業づくりに心がけていきたい。

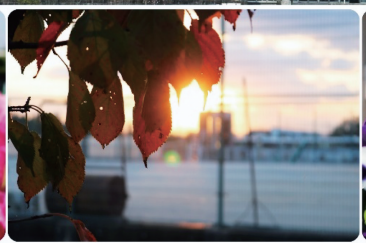
・さらなる意欲につながる発表の場の設定

個と集団をつなげる学習をテーマにおいてきたが，もっと記録会や発表会などを設定し，成就感や達成感を感じることができたり称賛されたりする場面を増やし，生徒がさらに生き生きと活動する姿が見られるように，授業を組み立てていきたい。また，生徒が教師の準備した学習カード・用具を使って，手がかりを見つけ，失敗しても常に向上心をもって，意欲的に取り組むたくましい生徒の育成に努めたい。

本校の保健体育科が考える「深い学び」とは何かをもっと追求し，対話的な活動を引き出して，主体的に運動の技能の習得に努めていけるような仕掛けをもっと作っていく必要があると考える。

第８分科会

佐賀市立大和中学校



所在地　〒840-0211　佐賀市大和町大字東山田3554番地１
校　長　林　　正昭
生徒数　589名
連絡先　TEL 0952-62-1315　　FAX 0952-62-0251
E-mail yamato-j@mail.saga-ed.jp
ＵＲＬ　http://cms.saga-ed.jp/hp/yamato-j/

【研究主題】

運動やスポーツを通して，主体的・対話的で深い学びを実践する保健体育授業

1　研究の概要

(1) 研究主題

運動やスポーツを通して，主体的・対話的で深い学びを実践する保健体育授業

(2) 研究のねらい

生徒が自己実現を図り，生涯にわたって学びを続けていくためには，確かな学力の育成が不可欠である。知識基盤社会といわれる現代社会では，知識・技能を習得するだけでなく，その知識・技能を活用して日常生活に役立つ思考力・判断力・表現力等を育成することが重要である。次期学習指導要領改訂の方向性では新しい時代に必要となる資質・能力として「生きて働く知識・技能の習得」，「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」，「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」の３つの柱が示されている。これら社会に開かれた教育課程の実現に向けて，主体的・対話的で深い学びの視点から学習過程の改善が求められる。

(3) 研究内容

ア　明確化した単元構造図の作成

発達段階に合わせ，単元構造図を作成したことによって教師の指導する内容も明確になり，生徒は見通しをもって学習を進めることができる。また，活動に対する関心や意欲が高まり，目標達成しようとする自主的・意欲的な活動につながる。

イ　深い学びにつながる場の設定

主体的・対話的に活動するために，ねらいに沿って主体的に話し合うことを位置付ける。このグループ活動を通して疑問や自己の課題を話し合い，まとめた内容や疑問をボードに書き記し，教師がグループごとに確認したりそれに答えたりすることで，自ら考え行動し「分かる」，「できる」授業につながる。

ウ　ICT機器（タブレット）の効果的な利活用

身に付けたい技能や動作の基本をスクリーンに提示することで動きがイメージしやすいようにする。また，自分の動きと手本となる動きを比較できるようにタブレットを活用し，自分の苦手な動作が視覚的に捉えられるようにしたい。さらに，このことが前述しているような自主的・意欲的な活動につながるのではないかと考えられる。

2　公開授業

(1) 第３学年　単元名「保健」　　授業者　平野　弘高

改訂学習指導要領では，第２学年で取り扱う授業内容であった。「がんの予防について課題を見付け，その解決方法と理由などを，他者と話し合ったり，ノートなどに記述したりして，筋道を立てて考えることができる」を本時のねらいとした。思考・判断・表現の観点で，観察とワークシートによって評価したところ，Ａ評価は63％，Ｂ評価とＣ評価はそれぞれ34％，３％であった。本時は，主体的で対話的な学習を展開するために，まず個人で「がん撲滅プロジェクト」を考えさせ，グループによる話し合い活動を位置付けた。さらに，具体的な根拠まで書くことができていた。

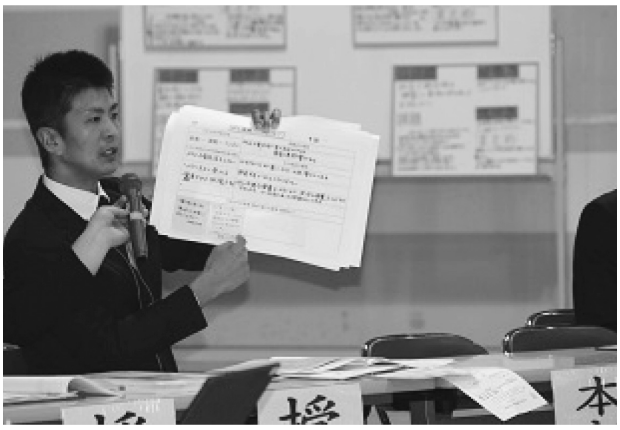
今後の課題は深い学びにつながる手立てである。本時のまとめでもまだ十分だとはいえな

い。新しい発見を引き出すことができるような発問などを工夫する必要がある。

(2) 第３学年　単元名「武道」　　授業者　添田　貴之，中尾　久美子

本時のねらいは，「自己や仲間の技術的な課題やその課題解決に有効な練習方法の選択について，自己の考えを伝えることができる」であった。思考・判断・表現の観点は，学習ノートでは80%，観察でも70%が達成できていた。単元構造図については，生徒のノートにも貼っていたので，効果的に活用でき，学習評価のポイントを知り，意欲にもつながった。本校では，剣道・柔道を２年時より選択学習している。それで，グループ編成は２年時にも剣道を選択していた生徒を中心にグルーピングすることで，話し合いが活性化できるようにした。学習ボードの活用は，これまでの学習の流れや学習のつながりが確認でき，次時の目標にも役立った。また，授業後に評価したりＴ２と確認したりするためにタブレット端末を活用した。

課題は，生徒の発達段階に合わせ単元構造図をもっと分かりやすくすることが挙げられる。グルーピングは意図的にしたが，活性化を更に図るために，試合時はトリオ学習を位置付ける工夫も考えられる。「分かる」「できる」を実感できる授業をしたい。



平野教諭

添田教諭

３　研究協議

(1) 提案

・改訂学習指導要領改訂に向けての取組は
・どのように深い学びへつなげていくか

(2) 協議内容

Ｑ１　剣道具について。マジックテープ式は着脱の時間短縮になったと思われるが，本来のひもを利用させるとどのくらい時間がかかったか。（岡山県）
Ａ１　昨年度，２年時はひもを使っていた。防具をつけるまで少なくとも５分はかかっていた。ワンタッチ面にしていたがそれでも時間がかかった。授業展開の時間確保を優先させるために本時のようにマジックテープ式を使った。簡単であったため時間短縮できた。確かに，結ぶ文化も必要ではあるが，時間確保を優先することにした。

Ｑ２　打突を楽しむ工夫，恐怖を感じる生徒への手立てはどうされたのか。武道のイメージを変えたいが，音楽をかけた意図は何か。（福岡県）
Ａ２　打突をするためには基礎・基本が必要だが，１，２時間目で基本技ができるようになったら，打ち合わせた。最初はすんなりといかなかったが，２年時にできていた生徒がうまくリードして，お互いに確認後，まわりの生徒ができるようになっていった。音楽をかけることで，時間が分かるようになり話し合いやすい雰囲気ができたと思う。効果的だった。

Ｑ３　保健の授業で。初めに予防法の話題が７つ提示されていたが，３つに絞った理由は何か。また，授業が進むにつれ子どもたちから出てきた疑問を，今後どのように解決していくのか。（熊本県）
Ａ３　これまでの経験から多く出てくることが想定できたので，今日は時間確保のため３つに絞った。生徒から出された疑問点はコメントを書いて渡す予定。自分たちで解決できるように考えさせたい。

Ｑ４　剣道の授業で。柄の持ち方を細かく指導しなかったのはなぜか。（佐賀県）
Ａ４　基礎の段階では指導をしていたが，進んだ段階では細かく指導しなかった。打ち合いをさせる実践に時間を使った。

Ｑ５　保健の授業で。佐賀県は全国ワースト１だが，海外の国や他県との比較は検討しなかったのか。（佐賀県）
Ａ５　自分たちの県であることを強調したいために，比較まではしなかった。

Ｑ６　深い学びのためには，これについて知りたいなどの自発的な気持ちが必要で，生徒の言葉を拾ってめあてを立てることが必要ではないかと思うが，教師が示した意図は何か。また，評価方法については観察と学習カードとなっているが，観察で思考・判断は見て取るのはむずかしいと思うが，表現の部分を観察されていたのか。（北海道）
Ａ６　剣道の授業では，子どもたちがコミュケーションをとりながら深い学びにつなげることが今回のテーマであったが，めあての提示については非常に悩んだ。１年前のプレ大会のときは練習時にいきなりやらせてみたが，やはりできなかった。練習方法と選択方法を提示すると，子どもたちが学習ボードに書いていることと照らし合わせて観察し，話し合いの様子から確認できた。ただ，１時間ですべてを見取ることはむずかしいので，タブレットを使って記録に残すと再確認ができる。Ｔ２と確認することで評価のずれもなくすことができる。 保健の授業では，指導と評価に示していたので，子どもたちにはかみ砕いて提示した。観察で見取り方は子ども同士の話での疑問を出し合ったりするところをチェックした。同時に，根拠をもって意見を書いているかを評価した。

Ｑ７　剣道の授業では，班ごとにタブレットがあれば話し合いの活動がもっと活性化したのではないか。また，アドバイスシートがあればよかったのでは。技能テストはしないのか。（沖縄県）
Ａ７　教師用タブレット１台のみ使用した。運動時間の確保のために各班には使わなかった。アドバイスシートは今後活用してみたい。技能テストの評価はしていない。生徒にも伝えていない。タブレットで記録して技能の高まりを確認し評価をしている。これはT2との評価のずれが生じないようにする目的もある。

Ｑ８　タブレット利活用の実践例がどなたかないか。（司会者）
Ａ８　ICT利活用の授業では，自分の動画を見てお手本動画と比べるという授業を行ったことがある。ただ，運動量がかなり減ってしまう。（佐賀県）

Ｑ９　今回，「佐賀モデル」として評価を３観点にされているが，他県で話題になったことはないか。（司会者）
Ａ９　１学期の成績について，３観点での評価（知識・技能50％，思考・判断25％，態度25％）で試行したところ，知識・理解と運動の技能が別々ではなくなったため，評定４であった生徒が３になり，結果的に評定３の生徒が増えた。あとで，助言いただきたい。（佐賀県）

Ｑ10　今日のように，音楽を使って授業をしているところはないか。（司会者）
Ａ10　補強運動で実践したことがある。リズムトレーニングで準備運動の活性化につながり，効果的である。（長崎県）

(3) 指導講評　　講師　福岡県豊前市立角田中学校　校長　藤田　弘美　先生

ア　授業展開について

まずは，「教えて考えさせる授業」「ペアで考える，グループで考える，最後はみんなで共有する」という授業構想力マネジメントがすばらしかった。

今日の保健の授業では，全ての知識を教えてしまったが，討議の中で課題を見つけていくという授業も考えられる。剣道の授業は，たいへんテンポのいい流れであった。班ごとのホワイトボードの活用は学習のめあてが明確になり，個人の目標を短冊に書いて貼り付ける工夫も時間短縮になった。引き小手は初心者には難しいし，指導要領では高校２年生以上に移行している。

イ　指導内容を明確にした単元構造図の作成と活用について

教えることと評価することを一体とした大切な授業であることを考えると，単元構造図を生徒に配布することで，ゴールが見やすくなり，効果的である。活動を通して何を学ぶかを明記すると更によくなる。それと，評価規準がきちんとしている。観察で見取り，遅れているかいないか，つまずいている子がいないかなど把握しやすい。複数回することで，妥当な評価になる。評価は学びを振り返るものなので，質問にあった４が３になっても悪くはない。

(4) 講話　　早稲田大学　准教授
吉永　武史　先生

課題解決学習を盛り込みながらの，楽しさを教える授業という点で，学習指導要領に向けたヒントとなったと思う。保健の授業では，共同的な学びを通して，課題を解決していく展開で，話し合い活動で思考が広がっていた。批判的な思考力も使って考えることにつながり，もっと学びたいと思うような授業だった。剣道の授業は，学習内容を明確にして素材を教材に変えていたために，よい授業になっていた。学年を通して深い学びにつながっている。個人のめあてを立てていることがよかった。球技ではチームのめあてを立てる場合，自分の意思決定がなく，深い学びにつながりにくい。チームの目標に沿った個人目標が必要になる。また，今日のように，個人の練習したものを実際に試す場面，時間を設定し保障することで，更に思考が深まり，メタ認知にもつながる。

４　成果と課題

(1) 成果

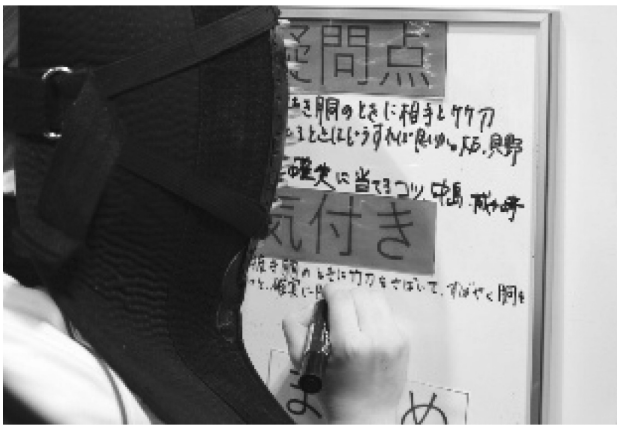
・単元構造図を作成し，活用したことで，生徒が授業への見通しをもつことができるようになり，授業に自主的・意欲的に取り組み活発に活動することができるようになった。また，教師側も教える内容を把握することができたためスムーズに授業を展開することができた。
・グループ活動を通して疑問や自己の課題を話し合った内容ボードの書き記し，教師が答えることで，自ら考え，行動し「分かる」，「できる」につながる授業展開ができるようになり，生徒自身が主体的・対話的に活動することができた。
・タブレットを活用したことで，自分の苦手な動作を視覚的に捉えられるようになり，自己の課題を見つけることができた。また，身に付けたい技能や動作をスクリーンに提示することで動きをイメージすることができ，技能の向上に効果的だった。

(2) 課題

・活動時間を確保するための工夫として，剣道においては，手ぬぐいの兜つくり，面ひもを短くして面をつけやすくするなど，スムーズな授業にするための工夫が必要である。
・Ｔ２の授業への関わり方を工夫する必要がある。例えば，運動が苦手な生徒への配慮だけ

でなく，授業のねらいに沿って，生徒がどのように解決を目指しているのかを評価するなど，関わっていく立場を明確にしていくことが大切と考える。

・課題解決の方法として，グルーピングの在り方を考えることが必要である。同じ課題をもった集団，異質の課題をもった集団など，どのようなグルーピングにするかは，検討が必要である。



第９分科会

佐賀大学教育学部附属中学校

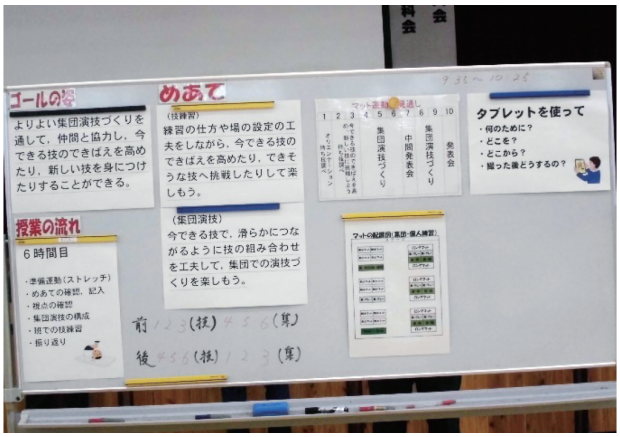
所在地　〒840-0041　佐賀市城内一丁目14番４号
校　長　古賀　勝利
生徒数　471名（12学級）
連絡先　TEL 0952-26-1001　FAX 0952-26-1003
E-mail　fuchu@ml.cc.saga-u.ac.jp

【研究主題】

生活を豊かにするための保健体育科の授業づくり

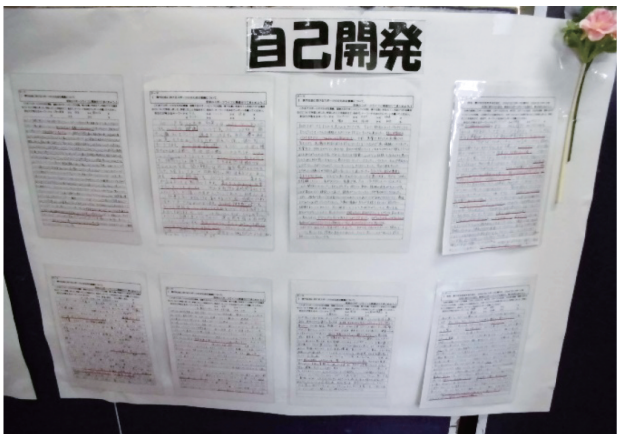
「タブレットで動きを確認している様子」

「話し合い活動の様子」



「単元・授業の流れ」

「意見交換の様子」



「スポーツと生活の関わりについて」

「振り返りの様子」

1　研究の概要

(1) 研究主題

生活を豊かにするための保健体育科の授業づくり

(2) 研究仮設（ねらい）

以下のような手順で研究を進めることで，「主体的・対話的で深い学び」を実現し，生活を豊かにするための授業づくりにつながると考える。

ア　保健体育科として育成を目指す「資質・能力」についての捉え方を整理し明確にする。

イ　資質・能力を育成するための，保健体育科の「主体的・対話的で深い学び」の捉え方を整理し，よりよい授業づくりの実践に取り組み，めざす生徒像を明確にする。

ウ　授業づくりにおける学習過程を工夫する。

エ　授業における学習の場や視点・手立てを工夫する。

これらの検討結果を踏まえて授業を企画・実践し，成果を検証する。

(3) 研究内容

ア　保健体育科として育成を目指す「資質・能力」の捉え方

①　３つの柱

改訂学習指導要領で示されている資質・能力に『知識及び技能』『思考力，判断力，表現力等』『学びに向かう力，人間性等』とある。この３つの資質・能力の柱に沿って本校保健体育科では育成を目指す資質・能力を以下の表１のようにまとめた。この３つの柱を授業づくりの根幹に据えて取り組んでいく。

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
・運動の楽しさや楽しみ方，行い方の知識。 ・運動を楽しむための基本的な技能。（走る・跳ぶ・投げる，捕るなど）	・自己やチームの課題に気づき，その解決のための方法について伝える力。（メタ認知，課題解決，課題発見，適応的学習力，コミュニケーション力）	・自主的，自発的な態度で粘り強く課題に挑戦すること。 ・仲間を尊重し協力することや自分の役割を果たすこと。 ・ルールや勝敗に対して公正公平な態度であること。

表１　保健体育科として育成を目指す「資質・能力」

②　保健体育科として重点を置く「言語の要素」

本校保健体育科では，育成を目指す「資質・能力」を広げ，深めるために「話し合う」「対話する」「振り返る」「比較する」の言語の要素を意識して授業に取り入れている。「話し合う」では，チームの課題・問題点を明確にするような話し合いを行う。「対話する」では，他者と意見（指示・疑問・アドバイス・称賛などを含む）を交わし合いながら，学習を進める。「振り返りをする」では，学習ノートを活用し，毎時間のめあての記入，学習の自己評価をする。「比較する」では，タブレットを利用し活動の様子を撮影し，映像の分析をし，課題発見につなげていく。

イ　資質・能力を育成するための，保健体育科の「主体的・対話的で深い学び」の捉え方

本校保健体育科では「主体的・対話的で深い学び」について，表２に示すように整理し，学習過程の改善に取り組んだ。

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
・生徒たちが見通しを持って粘り強く取り組み，「単元を貫く問い」や「単元のゴールの姿」を求める過程において，自らの学習活動を振り返って次につなげる学び。	・仲間との協働（学び合い活動・作戦会議等）を通じて，自らの考えを広げ深める学び。	・今まで習得した概念や考え方を活用し，運動への関わり方や課題解決に向けた取り組み方が，より自分やチームに合うものに変化していくこと。そして，それぞれの単元での学びが，他の単元に活かされている。

表２　保健体育科が考える「主体的・対話的で深い学び」

ウ　授業づくりにおける学習過程の工夫

第１段階では，第１，２時間目に「試しの試合」を行い，課題をもつ。第２段階では，課題に対し具体的な練習方法を考える。そして，計画的に練習を進め，その課題解決に必要な知識・技能を身につける。第３段階では，試合を行ったり，作戦会議等協働的な学びなどを行ったりして，成果を確かめる。第４段階では，これまでの試合をもとに，さらに個人やチームのレベルアップを図るために，新たな課題を発見する。そして，その課題克服のために，自分やチームに適した課題解決法を考え，実践する。第５段階では，第１段階での試合から第５段階での試合を振り返り，個人やチームの変容を見取り，次の授業につなげていくようにする(表３)。どの単元でも，同じ学習過程で実践を行った。

１　目標を確認し（単元のゴールの姿や単元を貫く問を提示），今，もっている能力で試合を行う。 ２　個人・集団の計画に沿って練習する。 （試しの試合後，発見した課題の解決に必要な知識・技能を身につける） ３　２の成果を確かめる。(共同・協働的な学び) ４　３の成果をもとに，新たな課題を見付けたりよりチームに合った練習方法を発見したりして，計画を修正する。 ５　振り返る

表３　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習過程

エ　授業における学習の場や視点・手立ての工夫

①　学習の場（詳細な場面）の設定

「単元を貫く問い」や「単元のゴールの姿」に向かう過程において，自ら課題に気づいたり，課題を解決したりするために，生徒の実態に応じた学習の場の設定を行う。具体的には，保健分野においては詳細な場面の設定，体育分野においては試しのゲームを実施し，個人やグループの今もっている技能や課題を把握させ，生徒の能力や目的に応

じたチーム編成や様々な条件を設定した場の設定，チームの課題解決に必要な練習場所の設定をするようにした。

② 視点に応じた活動の場の設定

作戦タイムやグループ活動の場では，４つの要素に重点を置き活動を行う。その際，視点に応じて活動することで，自分たちの明確な課題に気付くようにする。視点は，めあてに沿って全体で共有したり，グループや個人の課題解決と新たな課題発見のために設定したりして，具体的な活動につなげるようにする。

２ 公開授業

(1) 第１学年　単元名　器械運動（マット運動）　授業者　安武　誠

単元のゴールの姿を「よりよい集団演技づくりを通して，仲間と協力し，今できる技のできばえを高めたり，新しい技を身につけたりすることができる。」と設定し，集団演技づくりを通して，生徒自身が技の習得に内的必然性と必然性を感じ，主体的に取り組むように手立てをとった。ゴールの姿を目指す過程においては，「美しく見せるためには？」という問いを設定し，そのためにはどこに視点を置けばよいかを生徒と共有し取り組んだ。生徒と授業者の視点が共有され，明確になったことで，チームや個人の振り返りがより明確になり，それぞれに合った新たな課題の発見があり，主体的な学びの姿が多く見られた。また，4つの言語の要素を活用することで，話し合い活動が活発化したり，取り組むべき課題が明確になったりして対話的な学びが多く見られた。場の設定においては，個人の技練習と集団演技をする場所を設定し，活動量の確保は十分できた。しかしながら，それぞれの技の練習方法について，練習の意味を理解した上で取り組む生徒が少なかったことが，今後の課題といえる。

(2) 第３学年　単元名　体育理論「文化としてのスポーツの意義」　授業者　内川　梨恵子

「生活を豊かにするために，スポーツとどのように関わり，どのように生活に取り入れるか」をめあてとして取り組んだ。最初に「自分にとって豊かな生活とは何か」について考えさせた。ほとんどの生徒が「病気やケガをせずに，健康に過ごしたい」と答え，何らかの形でスポーツを行っていきたいと考えていた。授業では，事前課題として３年間の学習を踏まえて意見文を書かせておき，その考えをもとに４人班で意見交換を行った。意見交換した後，代表者の発表でさらに多くの考えを聞くことができた。自己の考えをもとに，他者の意見を聞くことは，自分と違う見方・考え方や価値観を知ることができ，考えに変容が見られた授業であった。スポーツを「健康づくり」としてだけ捉えていた生徒も他者の意見を聞いて，スポーツを「みる」「支える」ことでも生活に取り入れていきたい，と考えが変わった生徒もいた。

スポーツをすることで心身への影響を実感していた生徒は，授業での他者との意見交換を通して，スポーツを取り入れることで生活が豊かになることに気づいたり，新しい関わり方を発見したりすることにつながった。スポーツと「する」「みる」「支える」「知る」という関わりがある中で，それぞれの生活に応じた関わり方をしてほしいと考える。

３　研究協議

(1) 提案

・「主体的・対話的で深い学び」について

(2) 協議内容

Ｑ１　「今できる技を組み合わせて集団演技を楽しむ」取組の中で，集団演技で能力の高い生徒は技の出来ばえや新しい技への挑戦についてはどう自発的な活動につなげていくのか？個人の出来ばえ，能力に応じての手立てはどのように工夫されたのかを教えてほしい。（宮崎県）
Ａ１　集団演技の設定（構成）を３つの段階に区切っており，共通の技，選択の技，オリジナルの技としている。オリジナルの技の場面では，全員でそろえているグループもあるが，「こういう技を取り入れたい」という要望を出してくる生徒に対しては，一人ひとりの表現を取り入れることを勧め，個々のレベルに応じた工夫をした。

Ｑ２　今日の活動では，活動１・活動２があり，個人で技の練習に取り組む活動では，なかなか積極的に活動できていなかった。集団演技の練習になったら生き生きと活動していた。前転・後転や開脚前転ができない生徒がいたが彼の本時の学びがどこにあったのか，彼が何を楽しんでいたのか，先生の考えを聞かせてほしい。また，先生がこの授業（学習）を通して，マット運動の本質をどのように楽しませたいと考えておられるか聞きたい。（三重県）
Ａ２　対象の生徒が何を楽しんでいたかということに関しては，授業の振り返りカードを確認しないとわからないが，集団演技の取組の中で，課題を発見したり，出来ばえや技のつなぎ方について意見を交換したり，さらには友達の補助をしたりすることで技術的なことだけでなく，仲間との関わりを通してマット運動は楽しいなと感じて欲しいと考えている。

Ｑ３　マット運動の学習を見て，目標や単元の見通しがはっきりしている。また，技の系統やICTの利用など，何より集団で学習に真剣に取り組む姿が素晴らしいと感じた。これは，１日で作りあげられるものではなく，日々の積み重ねがあるからこそだと思う。ワークシートも見せてもらったが，今までの蓄積を感じた。質問ですが，集団演技の学習は１年生のみなのか，２，３年生につながっていくのか，１年生のこの10時間だけの取り扱いとするなら，もう一つの設定として最終学年で設定して，その演技を見せることが１年生の目標になるのではないか。今回の学習の前半で手本となる動画を見せる中で，単技だけでなく，集団演技も見せることで，さらに，学習も盛り上がってくるのではないか。自分も集団演技に取り組んでいるが，音楽に合わせて実施をしている。音楽に合わせて実施をすることで，技の切りかえもはっきりして，効果的だと思ったが，どうでしょうか。さらに，YouTubeなどで新体操の演技を見せることでさらにイメージや美しさが湧いてくるのではないかと思う。（福井県）

Ａ３　実際に生徒が今使っているタブレットの中には，基本となる技や今の２年生が１年生の時に行った集団演技を入れており，いつでも見られるようにしている。

Ｑ４　授業を参観して生徒の言語能力の高さを感じた。横浜の学校の中には在籍生徒の半数が外国人という学校もあり，なかなか学校全体としてこのような言語活動は難しいと感じた。すべての班が授業を通して健康が大事と考えていたことが日ごろの指導の成果と感じた。体育理論の前の３時間は，いつ頃実施されたのか？体育理論の実施時期，年間計画の中での位置づけはどのようになっているか。また，今回の健康についての学習を今後どのように活用されていくのかを教えてほしい。（神奈川）
Ａ４　１，２年生は年度始めに計画している。３年生は卒業後の生活のことも考えてこの時期に実施している。保健が１，２学期に入るが，部活動が終わったこの時期にストレスを感じ，体育の授業でしか体を動かす機会がない時期こそ，スポーツの必要性を感じてほしいと考え設定した。

(3) 指導講評　　講師　　宮崎大学　教授　三輪　佳見　先生

ア　器械運動（マット運動）について

マット運動では，集団演技がクローズアップされているが，集団演技は手段として使うことが必要である。技能の差が大きく生徒が活動に積極的に取り組むということが難しい中，集団演技を取り入れることで，意識づけになっていることは，良い事である。マット運動でおさえておかなければならないことで，系統図を提示したり，ICTを利用してどういう動きの技かを確認したり，また，集団演技のなかで同じ技（規定演技）を取り入れることで，気をつけなければならないところを生徒間で共有できるが，上手くできない生徒には「自分はこの技はできない」という欠点だけを認識するだけで，「どうやったらできるか」はなかなか生徒にはわからない。もちろん，電子黒板で技は提示されていましたが，どうやったらできるかという練習方法をきちんとわかっていたのかという部分については課題が見られた。例えば，伸膝前転で傾斜を使って練習している。傾斜を使う原理，理由を理解しないままに練習をしているため，傾斜を使って転がって傾斜の下で，勢いに負けてドンと尻もちをつく。お尻の位置を高くもってくるというところが難しいので，それを習得するためのものということが理解されていない。新指導要領の「知識・理解」の要点は，運動の行い方を知っている。この技はこういう技術があるということを知っておくということであり，それを理解して技ができるようになることが大切である。そういう部分では少し残念であった。

評価については，評価項目が多いときは，まず，技の評価規準においてできない生徒（観点「Ｃ」）を拾い上げる。そして，指導していくなかで，「Ｃ」になる生徒が「Ｂ」になるようにする。そうすればある程度，幅広く評価する問題点は解消されると思う。

集団演技の組み合わせは，人と技の組み合わせ，技の組み合わせで，それを重視しすぎると，人と人の動きを合わせることが目的になってしまう。１年生で取得してほしい技の組み合わせの美しさは何かというと，技と技のなめらかな連続である。ところが，技の習得技能があまり高くない生徒は，前転を２回しようとするとき，他の生徒に合わせようと

するために２回回ってしまったら止まってしまう。本当は連続するということなら，止めずになめらかに続けなければならないが，そこで切らないと集団としての演技にならなくなってしまう。人と人の動きを合わせることが目的になってしまって，技と技のなめらかな連続の組み合わせからずれてしまう。集団演技は，意欲づけとしてはいいけど，本来の学習内容を壊してしまうことがあることを認識しておくことが大切である。

イ　体育理論について

体育理論がクローズアップされたのはごく近年で，授業実践で内川先生が挑戦されたことは素晴らしいことだと思う。１ヶ月前に同じ授業を違うクラスで見させていただいたが，その時の授業と今日の授業とでは，ものすごく授業改善が行われていたことをお伝えしたい。文化としてのスポーツという内容は，新しい知識の獲得だけで終わってしまうところがあり，そこで新しい考えを生み出すことは難しい。それを今日は見事に改善していただいた。細かいところになるが，生徒の言語能力が非常に高いので，友達の意見を聞き，それを記録するという時間が短くても対応できるスキルの高さは，附属中の素晴らしさであり，日ごろのトレーニングの成果ともいえる。ただ，ここは違うのではないかと感じたのは，付箋を使う活動で，赤色の付箋紙には，友達の意見で自分が参考になったこと，青色の付箋紙には，友達に質問したいことを記入し，両方を発表者にかえすという活動であったが，聴いて参考になったことは自分がそのまま持っていた方が良かったのではないだろうか。そうした方が，友達の意見を参考にさらに自分の考えをまとめ直すこともできるのではないだろうか。先ほど質問に出た振り返りのＡ・Ｂ・Ｃについては，内川先生から相談を受けて私がアドバイスしたことで，「考えを深める」という本時の目標があって，知識の習得があって友達と会話して自分の考えを深めるという「深まった」という評価の発問の仕方はまずかった。もう少し具体的な聞き方が良かったと思う。生徒も「深まった」と評価しているものは少なかった。最後に，どちらの授業に関してというわけではないが，他の領域や保健分野とのつながりをどのように考え，「主体的，対話的で深い学び」という視点でカリキュラムマネジメントをしっかりしていくことが大事であるということをお伝えして話の終わりとしたい。

４　成果と課題

(1) 成果

・「単元を貫く問い」「単元のゴールの姿」を設定する際に，種目の特性や楽しさを味わうことができるような活動を取り入れるなどの工夫を加えたことで，主体的・対話的な学びが見られるようになった。

・学習過程の工夫をしたことで，個人や班の課題がより明確になり，内的必然性と必然性のある課題が明らかになった。

・課題に応じた場の設定を行ったことで，個人やチームの課題解決に効果があった。さらに技能の向上にも効果があった。また，同じ課題をもった人との協力や教え合いなどが，自然と行われるようになった。

・「話し合う」「対話する」「振り返りをする」「比較する」の「言語の要素」を意識して活動を行ったことで，具体的な課題や取組，練習方法を考え実践することができるようになった。

(2) 課題

・「単元を貫く問い」や「単元のゴールの姿」に向かう過程において，これまで取り組んできた学習の場の設定や話し合い活動について振り返り，反省点を整理することで，より生徒の実態に合った課題を設定できるように見直しを図っていく。（より具体化を図る）

・どの種目においても，本時の課題が明確になり，次時のめあてが立てられるようなワークシートを作成していきたい。（自己の振り返りを具体的にし，振り返りを活かした課題にするため）

分科会研究発表・研究協議等記録

高等学校部会

第10分科会　佐賀県立佐賀北高等学校

第11分科会　佐賀県立牛津高等学校

第10分科会

佐賀県立佐賀北高等学校

所在地　〒840-0851　佐賀市天祐二丁目６番１号
学校長　渡邊　成樹
生徒数　826名
連絡先　TEL 0952-26-3211　FAX 0952-25-7042
E-mail　sagakitakoukou@mail.saga-ed.jp
ＵＲＬ　http//cms.saga-ed.jp/hp/sagakitakoukou/

【研究主題】

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを送る」基盤となる保健体育授業のあり方

～ＩＣＴ機器の利活用を通して～

バスケットボールの授業の様子

柔道の授業の様子

1　研究の概要

(1) 研究主題

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを送る」基盤となる保健体育授業のあり方
～ＩＣＴ機器の利活用を通して～

(2) 研究仮説（ねらい）

ICT機器（学習用パソコン（タブレットPC））の利活用を通して，視覚情報の活用により自己を客観的に捉え，思考・判断していくことで，運動技能の向上を図ることができると考えられる。また，体験から感じ取ったことを言葉や身体などを使って表現することを通して，仲間とともに運動の楽しさや喜びを味わい，自己の目的を達成することで豊かなスポーツライフを継続する資質・能力の育成につながると考えられる。

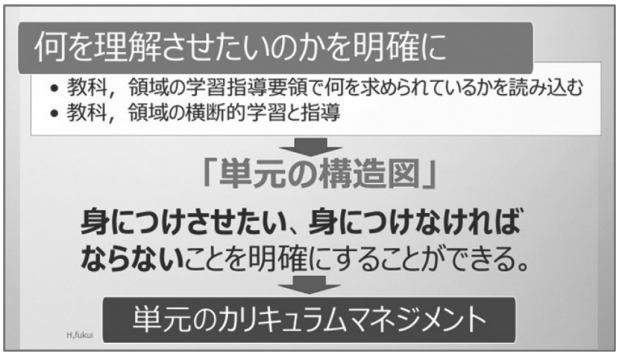
(3) 研究内容

①　指導内容を明確にした指導と評価の計画の作成

学習内容を明確にするために単元構造図を作成し活用させることで，生徒が授業の流れや身につけなければならない学習内容を理解し，主体的に活動することができる。また，教師も指導内容が明確になり，いつ何を身に付けなければならないのか，それを評価することで指導と評価の一体化が図られ，「わかる」「できる」授業が展開できる。

指導に当たっては，

・発達の段階や生徒の実態に合わせ，指導内容を明確にする。
・毎時間，明確なねらいを掲示し，主体的に活動できる指導の工夫をする。
・学習内容として身につけなければならない技能等を理解できるように生徒と共有する。



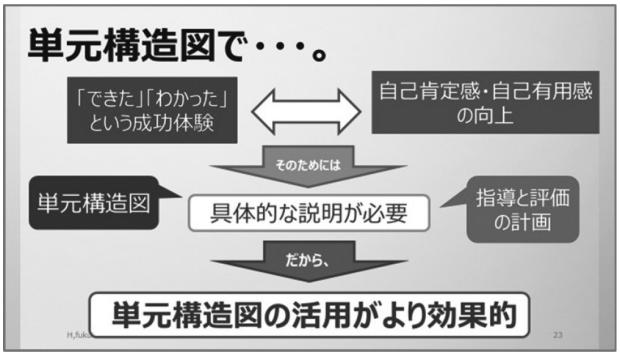


図１　単元構造図の意義

図２では，「わかる」「できる」授業を実践し，これからの時代に必要とされる資質や能力を育むための，本校におけるカリキュラムマネジメントのイメージ図である。

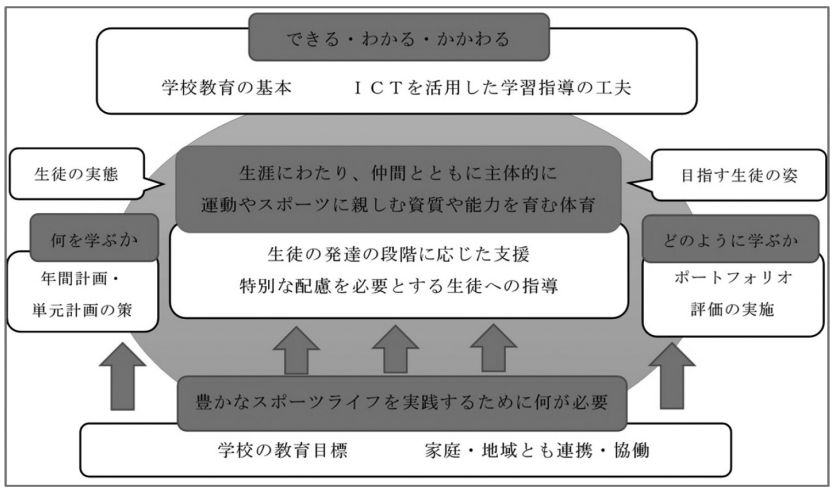


図２　佐賀北高校 カリキュラムマネジメントイメージ

また，図３においては学校の教育目標や重点目標を出発点とし，各領域を横断的に学び，「主体的・対話的で深い学び」とするために必要と考えるカリキュラムデザインのイメージ図である。

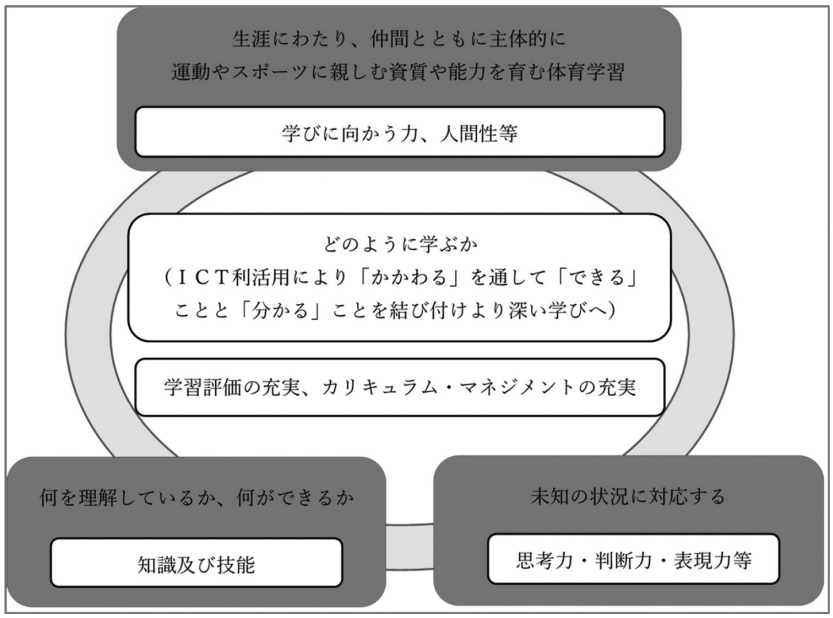


図３　佐賀北高校　カリキュラム・デザインイメージ

②　コミュニケーションツールとしてのICT機器（学習用パソコン（タブレットPC））の活用

本県高等学校では，平成26年度よりすべての生徒がすべての教科でタブレットPCを活用した学習活動に取り組んでいる。本校保健体育科では，このタブレットPCを「主体的・対話的で深い学び」のコミュニケーションツールの一つとして捉え，動画機能を用いて，自己や仲間の課題に応じた練習を工夫するために，動きを撮影し，動きや技の改善点を見つけさせるようにする。このような学習活動を通して，目的や場面，状況等に応じて互いの知識や考えを適切に伝

図４　タブレットPC

え合いながら学習を深めさせたり，他者の考えを理解し，自分の考えを広げ深め，自己の課題に取り組ませたりする。

また，このような言語活動を通して，仲間とともに運動の楽しさや喜びを味わうことをできるようにし，仲間同士で自己の状況に応じた体力の向上を図れるようにする。

2　公開授業

(1) 第１学年　球技 バスケットボール　　授業者　緒方 重宣，中島 耕一

本時は10時間中の７時間目で４対４のゲームを通して学び合いの活動の深まりが出るように授業を行った。合意形成しながら自分のチームの課題を発見し，自己の考えたことを他者に伝えているという単元目標を設定し活動させた。グループでの話し合いの場をできるだけ設定し，グループでの共通理解を深め，目的意識を持って活動できるよう指導を計画した。話し合いの場の工夫が生徒の活動量や活動時間を減少させてしまう懸念があったが，生徒たちの主体的な活動に助けられ計画通りに活動することができた。また，試合間で課題練習を行っているが，課題練習の選択において，練習のテーマの合意形成がまだまだうまくいかず，キャプテンを中心とする発言力のある生徒の意見に流され，練習を決定している傾向にある。全員の意見をしっかり吸い上げ，全員がテーマや課題を把握して課題練習に取り組む必要性を感じた。課題練習の内容に関しては，事前に提示した練習内容から選択させたが，今後は自分たちの課題に応じた自分たちオリジナルの練習を考え，実行できるよう手立てを講じたい。

(2) 第１学年　武道 柔道　　授業者　久保 貴大，寺戸 健

本時は，「技を高め攻防が展開できる楽しさや喜びを味わうことができるようにする」をねらいとした。学習用パソコンを活用し，男女共習を取り入れグループ活動で教え合って，技を高めていけるように活動をさせた。投げ技のポイントの資料と自分を撮影した動画とを比較することで，グループ内での活動や言語活動は全体的にできていたと思う。グループ活動が活発でないところは，グループ内に入って声かけを積極的に行い，仲間の指摘と自分の考えを比較させ，他者に対してアドバイスを送るようにして活性化に努めた。最後の固め技の簡単な試合の前に，発問をして抑え込み条件を確認し，併せて応じ方も理解させて試合を行った。活動量を確保することも考慮し数試合行い，試合後の一礼の後にお互いにアドバスを送って，学習を深めていけるようにした。

本時のまとめでは学習用パソコンを活用し，シートに学習の成果と課題などをまとめさせた。数名に発表してもらい，授業評価を聞き，最後のまとめで学習が深まったことを伝えた。本時のまとめの途中で授業終了の時間がきてしまったので，授業内容の精選や説明の簡略化が必要であると感じた。

今回の研究発表を通して，柔道の授業におけるICT機器の活用は，興味や関心，技能を高めること，男女共習や活発な言語活動を促せることなど様々なことが発見できた。生徒が「できた」「わかった」と笑顔になる授業を展開するために，今後もICT機器の活用方法や教材研究に励んでいきたい。

３　研究協議

(1) 提案

新学習指導要領に謳われている，「主体的・対話的で深い学び」を実践するために，以下の２点に絞って研究協議を行った。

①　男女共習について

男女の身体的差異をどのようにして解消し，効果的な学習活動に繋げるか。

②　ICT機器の利活用について

平成26年度から，全国に先駆けて佐賀県が導入している学習用パソコンの効果的な活用方法。

(2) 協議内容

Ｑ１　運動時間の確保とICT機器を用いた話し合いのバランスについて，今後どのようになっていくと考えられるか？ （奈良県）
Ａ１　確かに，話し合う時間を設定することにより運動時間は減少する。単元の前半部では問題点が多いため，話し合う「場」の設定が増える傾向にあるが，学びを深めるためには不可欠であると考えている。単元の後半部では，前半部で得た知識と技術を用いてゲームを行うことで運動量が確保できると考えている。

Ｑ２　評価について，男女間で評価規準に差異を設けてあるのか？ （愛知県　東海学園高校　大橋先生）
Ａ２　評価規準については，個人に対して評価を行っているので，男女間で差異はない。

Ｑ３　学習用ＰＣはインターネット等を利用する際，何か制限をされているのか？ （愛知県）
Ａ３　佐賀県が使用している学習用ＰＣについては，ｉ－フィルターというセキュリティ対策ソフトで管理がされている。

Ｑ４　バスケットボールの授業において，男女混合チームはつくらないのか？ （愛知県）
Ａ４　身体接触等を含めた安全上の視点から，グループ活動は行うが，男女混合チームでのゲームは行っていない。

Ｑ５　学習用ＰＣは，いつ頃から導入され，予算はどのようになっているのか？ （愛知県）
Ａ５　佐賀県では平成26年度から導入が始まり，生徒が入学時に５万円負担で購入する。県内高校の全教室に電子黒板，Wi-Fiが導入されており，学習用ＰＣの有効的活用を支えている。平成29年度は購入価格が４万８千円，平成30年度からは学習用ＰＣを県の備品として準備し，生徒に貸し出す仕組みになっている。

Ｑ６　ICT機器の活用によって，「学習用ＰＣが無いと授業を楽しむことができない」という生徒が増えるのではないか？ （長崎県）
Ａ６　デジタルポートフォリオのように自分の動きを客観的に捉えたり，効果的な練習の検索等，学習を深めるためのツールとしての位置づけを逸脱しないよう心掛けている。

Ｑ７　バスケットボールの授業において，正規のルールに則った５対５のゲームは行わないのか？ （長崎県）
Ａ７　人数の都合で４対４を行っているが，最終的には正規のルールの理解を深め，それに則した５対５のゲームを考えている。

Ｑ８　単元構造図の提示について，オリエンテーション時以外での提示を行っているのか？ （福岡県）
Ａ８　先ずはオリエンテーションで提示する。授業が進むなかで，生徒の学習活動に応じて変更する必要があれば変更し，その都度提示している。

Ｑ９　「思考」に関する評価方法について，「教えた内容」について「できた」・「わかった」を評価するのではないか？デジタルポートフォリオによる自己評価だけでは評価として成立しないのではないか？ （長崎県）
Ａ９　毎時間の活動内容を評価しており，デジタルポートフォリオによる自己評価は，あくまでその一部分として活用している。

(3) 指導講評　　**講師　岩手大学　准教授　清水　将　先生**

ＡＩやICT機器が進化した近未来型社会に対応した新学習指導要領は，「学習」が「学び」に置きかえられ，「何を知っているか」ではなく「何ができるか」に重点が置かれている。急速に変化を続ける今日の情報化社会では，効果的にインプットした情報をどのようにアウトプットしていくかが重要であり，その力を育むことが求められている。そのためには，①教科を横断したカリキュラムマネジメント，②共生社会に則した男女共習，③指導と評価の一体化，④ICT機器を用いた深い学びと授業外での学びの習慣化，という具体的な４つの柱を構築し，授業づくりを行う必要がある。４つの柱それぞれは画一的なものでなく，学校・生徒の特性に応じた「柱」となるよう各学校で工夫していただきたい。

指導講評の様子

4　成果と課題

(1) 成果

○　単元構造図を作成したことで，生徒が授業への見通しを持つことができ，自主的・意欲的な取り組みにつながった。

○　ICT機器の視覚情報の活用により自己を客観的に捉え，学びが深まり，運動技能の向上にもつながった。

○　ICT機器を活用するための言語活動を通して，思考力・判断力・表現力が高まり，仲間とともに運動の楽しさや喜びを味わいながら自己の目的を達成することができた。

(2) 課題

○　発達の段階や生徒の実態に応じて授業は変化していく必要があるため，常にそれに応じて指導内容や単元構造図を改善していく必要がある。

○　更なる無線LAN環境の整備や，授業時におけるICT機器（学習用パソコン（タブレットPC））の保管場所等の整備と確保が必要である。

○　ICT機器の操作の習得やアプリの活用，ICT機器を活用することでの，活動（運動）時間と学びあいに係る時間のバランスを考える必要がある。

第11分科会

佐賀県立牛津高等学校

所在地	〒849-0303　小城市牛津町牛津274
学校長	林　　嘉英
生徒数	460名（12学級）
連絡先	TEL 0952-66-1811　　FAX 0952-51-5008
	E-mail　ushidukoukou@mail.saga-ed.jp
ＵＲＬ	http://cms.saga-ed.jp/hp/ushidukoukou/

【研究主題】

スポーツに関心を持ち，生涯にわたって仲間と協働してスポーツに親しむ態度や能力を育む体育学習

体育理論　「勝てる薬いりますか？」

体育理論　グループ学習の様子

なぎなた　黙想後の様子

なぎなた　グループ学習の様子

研究協議の様子

佐賀県・開催県の国体記事を掲示

1　研究の概要

(1) 研究主題

「スポーツに関心を持ち，生涯にわたって仲間と協働して
スポーツに親しむ態度や能力を育む体育学習」

(2) 研究仮説（ねらい）

佐賀県は，2023年に二巡目となる国民スポーツ大会，全国障害者スポーツ大会の開催が内定しており，県内市町や各競技団体が着々と開催に向けた準備を行っている。また，2020年には，東京オリンピック・パラリンピックが開催される。これらのイベントについて，体育の授業でタイムリーに内容を取り扱っていくことで，県民体育大会やスポーツレクリエーション大会等の地域のスポーツイベントを身近なことと捉え，スポーツへの興味・関心が高まると考える。また，授業においては主体的・対話的で深い学びを中心とした学習活動に取り組むことにより，スポーツの楽しさに触れ，互いに生涯にわたって仲間と協働してスポーツに親しむ態度や能力を身に付けることができると考える。

(3) 研究内容

ア　主体的・対話的で深く学ぶ授業形態による，「かかわる」を保障した授業づくり

①　体育実技において，生徒同士が互いに教え合いかかわり合うための目標設定や場面設定について研究する。

②　体育理論において，自らがまず考えを持った上でグループの話し合いに参加し，積極的に意見を交換しながら理解を深めていくような授業形態を研究する。

③　男女共習の在り方については，本校の実態を加味した上でどのような体育実技・体育理論の学び方とかかわり方が求められるのかを研究する。

イ　ICTの利活用による，「できる」「分かる」を保障した授業づくり

①　学習用PCの機能により，自分の技術の習得状況と，目標とする技術を視覚的に把握し，より完成度の高い技能の習得を目指す。また，運動が苦手な生徒や意欲的でない生徒への配慮に取り組み，つまずいている生徒への手立てとして学習用PCを活用する。

②　教室の電子黒板と生徒が各自持つ学習用PCを効果的に利用することにより，より生徒の授業及び教材への関心を高め，理解を深める。

ウ　注目されるスポーツイベント情報の効果的な提供による生涯スポーツへの動機づけ

①　2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックについて，それに参加する顕著なスポーツ選手の情報だけでなく，開催する日本の情勢，競技を迎える市町村の盛り上がりなどを通じ，自らの東京オリンピック・パラリンピックへのかかわり方について関心が持てるような情報提供の方法について研究する。

②　2023年に佐賀県開催が内定している国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会について，「する」，「みる」，「支える」，「知る」というスポーツイベントへのかかわり方について生徒の興味・関心を高め，将来的にその大会へ積極的にかかわる態度を醸成し，ひいては生徒が生涯にわたって仲間と協働してスポーツに親しむ態度を育むための方法を研究する。

2　公開授業

(1) 第１学年　単元名　体育理論「ドーピングとスポーツ倫理」　　授業者　江頭　辰弥

体育理論の授業の進め方として，資料の提示後自分自身で考える，それを意見として出し，グループで共有してお互いの意見をまとめる，という話し合い学習を取り入れながら取り組んできた。男女共習の在り方，本校の特性である男子が少ない中でも女子と意見を言い合える環境づくり，お互いに意見を出し合う事を毎時間行い続けてきたことで，今日は違う環境下で生徒たちも緊張していた中でも発表ができたと感じている。他者の意見を聞き，自分と違った意見でも，なぜそのような考えなのかを尊重することができるようなってきている。発表が決まった３年間，生徒たちにスポーツに興味・関心を持たせることを意識してきたが，できれば自ら積極的に関わってほしいと願っている。

今回の公開授業の成果は，セイネットシステムを利用して授業後すぐアンケートを実施しその内容で生徒たちが意見を出してくれたことである。アンケートの内容は指導助言者の深見先生からいただいたものである。私自身としては内容を欲張り，振り返りを行う時間がとれなかった。しかし，生徒自身がよく考えて発言等を行ってくれたと思っている。

(2) 第１学年　単元名　武道「なぎなた」　　授業者　山本　智子

本校生徒は，様々な資格を取得し，社会に出て人と接する仕事に就くことを希望している生徒が多い。今回授業を行った食品調理科の生徒たちは，前向きで活発な生徒が多く，授業を意欲的に行うことができ，新しい技にもチャレンジをし，研究熱心でもある。指示が的確でなかった場面でも，意欲的に先を考えて動くことができていた。また，長物であり，本来は刃物であるということを頭に置き，それを扱うことによる安全面への配慮，男女共習，話し合い学習，見比べて助言をする，ということに重点を置いて授業を進めた。

なぎなたは相手がいて成り立つ競技であるため，相手を尊重する事に重きをおいている。調理の授業でもプロの先生方が講師で来てくださっているため，学科でも挨拶をきちんとすることができている。それをすべての場面でできる人間を形成してきたいと考えている。

深見先生の指導を受けて，生徒がわかりやすく技の提示物，自己評価しやすいノートを作成してきた。本時の振り返りについて，どのようなことに視点を合わせて振り返ればよかったかをもう少し詳しく指示したかった。時間配分や計画の甘さが出た部分であった。

3　研究協議

(1) 提案

佐賀県では，全国に先駆けて生徒全員が学習用パソコンを持ち授業を進めている。ICTを活用した授業を見られて気になる点やお気づきの点などを中心に意見の交換の場としたい。

(2) 協議内容

Ｑ１　学習用パソコンは何年前から導入され，今日に至るまでに感じたメリットとデメリットは何か。
Ａ１　H25年度に県立高校の教室に電子黒板を設置。H26年度入学生から学習用パソコンを各自購入し，H28年度には全ての生徒が学習用パソコンを持っている環境が整備さ

れた。H30年度入学生よりリースの形をとっている。全体的なデメリットとしては，ネットワークがうまく動かない，つながらない，教師側が不慣れという事が挙げられる。教育情報課より指導主事を派遣し，担当校で研修を行うことや，業者委託し支援員を配置することで導入に対する問題等に対応した。徐々に生徒が課外活動や調べ学習などで活用する場面が増え，活用する方法や教材，選択肢も増えてきて，H28年度辺りから今のような環境が整ってきた。

体育の授業でのメリットは，動画を見てイメージを持てること，比較等ができることである。デメリットは，機械のトラブルで授業が止まってしまうこと，使用するタイミングと頻度（運動量とのバランス）が挙げられる。これからも研修等を重ね，改善していきたい。

Ｑ２　今回の体育（なぎなた）は男女共習でされていたが，自由練習や球技等の身体接触が伴う種目の場合にはどのように考えられているか，また，どのようにされているか。

Ａ２　全ての場面において男女共習というのは難しい。しかし，生涯スポーツという点から考えると男女共習から学ぶことは多い。グループ学習等を通して，性別や年齢，障害の有無に関係なく，みんながどのようにすればスポーツを楽しむことができるかということを考え，工夫する力をぜひ身につけさせたい。また，技術や体力の高い生徒が，より充実した活動ができるよう，技術レベルに応じた試合形式等も取り入れる場面も必要である。このように，様々な場面を設定することで学ぶことが多くなるのではないだろうか。実際，男子が女子にアドバイスをする場面が出てきたり，相手のことを思いやってプレーする場面が出てきたりしているので，男女共習のメリットはあるように感じる。

Ｑ３　体育理論について，プロジェクターで示した文章等は，生徒は見るだけなのか。または，書き写したりする時間を設けるのか。

Ａ３　基本的にはパワーポイントを中心に，スクリーンを見ながら全員で内容を共有し理解を深める。また，動画等を準備し，イメージしやすいような工夫もしている。知識としてしっかりと覚えてほしいポイントなどについては，ワークシートを準備し，記入させる時間を取ることで知識の定着を図っている。

Ｑ４　体育理論（ICTを利活用した授業）の中で，グループで話し合った意見を代表一人の生徒がパソコンに入力し，プロジェクターで投影していたが，授業後にはその意見（内容）はグループ内でどのように共有するのか。また，教師側はどのようにその意見を保存したり，後で内容をチェックしたりするのか。

Ａ４　代表の生徒が保存をしているので，教師側から閲覧することができる。また，グループ内の生徒に情報を共有・還元する必要性がある場合は，配布をしたりする。例えば，各個人にデータを配布し，各自が記入，保存をし，教師側が回収するというシステムもあり，後で評価することができる。

Ｑ５　体育理論の評価について。元プロ野球選手の松井選手が高校時代に甲子園ですべて敬遠された。このことについて，フェアと思うか，それともアンフェアと思うのかグループでどちらかに意見をまとめ，全体で発表する，という活動における，思考・判断の評価をどのようにされるのか。
Ａ５　どちらの意見を選んだのかというところではなく，なぜそう思ったのかという理由付けの部分に着目して評価を考えている。今回，意見が３対３に分かれたグループがあったが，お互いがなぜそのように思ったかという理由を述べたり，相手の意見について考えたりしているところを評価したい。しかし，発表の時間が十分に取れず，評価の難しさも感じているのも事実である。

Ｑ６　授業規律があり，体育理論・武道ともにとてもスムーズに授業を行われていた。特性を抱えた生徒に対して配慮されたことや授業ルールについて教えてほしい。
Ａ６　特性や悩みを持つ生徒は実際に授業を行なったクラスにも存在している。いろんな考えや意見に触れる機会をつくるために，いろんな人と組ませるという方法もあるが，今回は活発な意見交換が行ないやすいように，生徒が話しやすい仲間同士でグループを作るようにした。なぎなたも同様に，自分たちで自由にグループを作らせた。孤立しそうな生徒に対しても生徒同士が自然に動き，グループを作っている。そこには，学校をあげてアクティブラーニング（ペアワークやグループワークなど）を積極的に取り入れていることによる成果だと考えている。

Ｑ７　タブレットPC導入から５年にわたるICT教育の成果について。（メリット・デメリット）
Ａ７　体育授業や部活動でのデータ集計等，使い方によっては生徒のやる気を引き出す効果がある。体育実技において，動画を見ながら生徒が活発に意見を交わしたり，自分たちで動きのポイント等に気付いたりすることができる。小テストの採点やアンケート集計が素早くできるが，PCを忘れた生徒に対しての対応（プリント準備等）が必要である点はデメリットである。

(3) 指導講評　　講師　　早稲田大学　准教授　深見　英一郎　先生

ア　体育理論について

学習指導要領改訂による４観点から３観点への移行期である。佐賀モデルをいかに反映させるか。また，充実したICT環境により，生徒一人ひとりの学びは深まると考えられるが，それを集団での学びとして深められるかがポイントであった。

PCを使用する・考える・書く・話し合う・発表するといった活動がすべてバランスよく取り入れられており，生徒を集中させる工夫がなされていた。その生徒の活動において，教師側のねらいや意図を伝えることが重要である。

答えのある問いだけではなく，答えがない問いに対して，自分の考えを発言することが社会に出ると求められる。グループの意見を１つにまとめる活動において，なぜそう考え

たのかを発言し，他者の考えを尊重し意見をまとめる取組みができていた。特に両方の立場で考え，受け答えができていた点は素晴らしかった。

ICTを活用するほどに，授業力・指導力が問われる。教材研究等には時間がかかるが，授業者として必要である。

イ　武道（なぎなた）について

教育基本法・学校教育法の中で，“伝統と文化を尊重し，それらを育んできたわが国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し”の文言から体育・保健体育でも武道に力を入れて取り組もうと言われてきた。

授業では，「気・剣・体」それぞれ細部のポイントを示し，ねらいを定めて学習できる工夫がなされていた。生徒同士の動きを撮影し，手本動画と比較することでお互い学び合う姿が見られた。動きのポイントを３つあげ，◎○△で評価し合う取組により，どうすればできるようになるか考えることができたのではないか。

その授業の時間で何を学ぶのか，また，そのために必要なことは何かに気付き，考えることの重要性を改めて感じた。

４　成果と課題

(1) 成果

・生涯スポーツの実践にいかにつなげていくか，ということを念頭に授業づくりを行ってきた。以前の生徒たちはスポーツに関する興味関心が薄く，ルールについて全く知らない生徒も多くみられた。もちろん運動部に所属し活発な女子生徒，意欲的に体育の授業に取り組む生徒たちもいるが，関心がない生徒が多いと感じていた。初めから面白くないという苦手意識をもっている生徒も多くおり，このままいけば，確実に将来スポーツを自らすることはないであろうと思われた。

人を相手とするサービス業につく生徒が多く，体力を高めることは必須であり，体力を高めるためにも，まずはスポーツに関心を持つことが大切であると考える。社会で生きていくためには人とのつながりも大切であり，相手を思いやる心や礼節，感謝の気持ちを醸成することも大切である。スポーツに対する関心を体育理論で深め，礼節や感謝の心を実技で高める，と思いながら計画を進めてきた結果，少しずつ高まっていることは大きな成果である。

・タブレットを使った授業の例として，バスケットボール時に，シュートの本数と成功数，得点をその場で入力カウントさせるシートを作成した。ゲームをしていないときにどれだけ他のゲームに関わることができるか，空きチームの活動として導入していったが，最終的にランキング付けで掲示した。活動が目に見えるため，生徒もそれを見ながら積極的に取り組むことができるようになった。また，入力をすることに責任をもつこともできるようになった。陸上競技では，持久走のシートで毎回タイムを入力させた。雨天時は体育館で15分間走になるが，室内１周をおよそ80mでカウントし，入力することによって頑張り具合が分かる。クラス内でも平均タイムや週数などの比較，自分のタイム推移などを見ることができ，意欲の向上につながった。今後は自分たちで入力できるようなデータ作成などを工夫していけたらと思っている。

他にもスカイメニューのアプリで動画比較ができ，よくできたときとできなかったとき

とを比較して原因を探ることができる。左右で見比べたり，重ねたりすることができるため，できない原因を知ることが可能である。ダンスの授業では違うクラスで同じ曲で同じ動きを踊ったものを重ねて，どちらが楽しそうに踊っているか，自分たちがどのようにするべきかを確認することができ，また２つを重ねたときは躍動感の違いなども比べることができ，視覚的にも分かりやすく，自ら考えることにつながった。

・生涯スポーツへの動機付け，スポーツ庁などの動画などを積極的に利用することにより，生徒たちももうすぐ開催されることを感じることができる。国体記事では佐賀県内の新聞で取り上げられている記事だけでなく，開催県の取り上げ方の違いなども掲載した。活躍した選手だけでなく，支える人たちのことも取り上げられており，情報を与える一つとしている。国体が都道府県対抗で順位が決まっていることを知らない生徒も多く，毎日の順位が変動していることを確認させながら関心をもたせる工夫を行い，生徒側から「佐賀県入賞していたので順位上がりましたよね」という声が上がるようになった。

(2) 課題

・スポーツへの関わり方も様々な事であることを知らせることができ，関心は高まっていると思う。2020年東京オリンピック，2023年佐賀国民スポーツ大会内定など，生徒に対して日本におけるイベントに関心をもち，「支えるスポーツ」もあることを示し，それぞれにおいて情報提供をしながら，佐賀県に住んでいればいずれかの形で関わることになるということを知識として得ることができたと思っている。それを踏まえ，次は自ら進んで関わるという行動を起こすことにつながればと思う。

・対話的な活動時間を確保し，ＩＣＴを活用した授業展開を行うことができた。改訂学習指導要領を踏まえた体育や保健の見方・考え方を働かせ，課題を発見し合理的・計画的な解決に向けた学習過程を意識すること，一人ひとりの違いに応じた課題を大切にするという視点で授業を展開し，授業研究の過程において佐賀県が県下全体で取り組んでいるＩＣＴ利活用推進の施策を取り入れながら工夫改善という視点からも授業を組み立てていけたらと考えている。

分科会研究発表・研究協議等記録

特別支援学校部会

第12分科会　佐賀県立
中原特別支援学校

第12分科会

佐賀県立中原特別支援学校

所　在　地	〒849-0101 三養基郡みやき町原古賀7262－１（本校舎）
校　　長	糸山　正孝
児童生徒数	245名（78学級）
連　絡　先	TEL 0942-94-3575　　FAX 0942-81-8002 E-mail nakabarutokubetsushien@mail.saga-ed.jp
Ｕ　Ｒ　Ｌ	http://cms.saga-ed.jp/hp/nakabarutokubetsushien/

【研究主題】

「わかった」「できた」「楽しい」思いを実感し、
「またやりたい」思いを引き出す保健体育学習

「本時の活動の流れを確認」

「タブレットパソコンによる学習ノート入力」

「iPadで自分のフォームチェック」

「補助具を使っての練習」

「練習した技術を生かしてのゲーム」

「振り返りで外部指導者によるアドバイス」

1　研究の概要

(1) 研究主題

「わかった」「できた」「楽しい」思いを実感し，

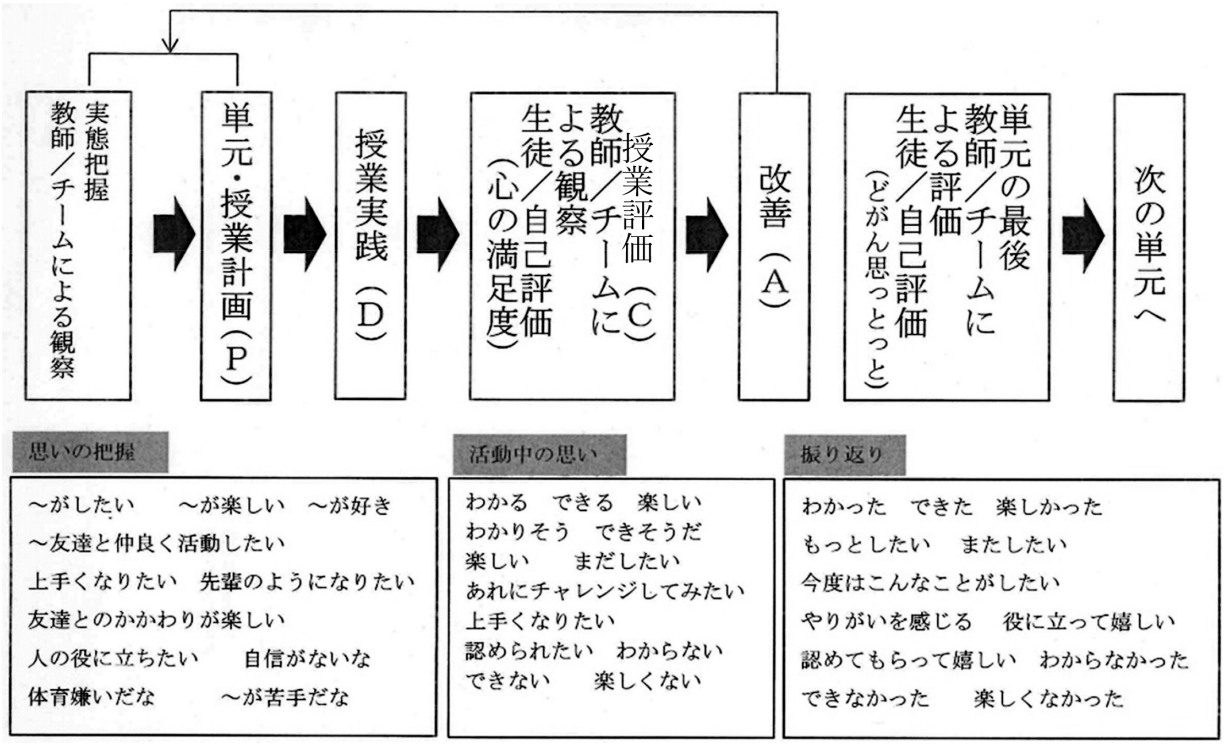
「またやりたい」思いを引き出す保健体育学習

(2) 研究仮説

児童生徒の保健体育学習における「思い」の実態把握を的確に行い，それぞれの「思い」に寄り添うような手立てを工夫することで，自分なりの体の動かし方や課題解決の方法を理解し（わかった），達成感を味わい（できた），活動への関心・意欲の高まりを実感し（楽しい），主体的に運動に取り組む気持ち（またやりたい「思い」）を養うことができるであろう。

(3) 研究内容【対象：中学部 病弱通常の学級・病弱重複障害学級】

ア 「思い」を大切にした授業づくり



それぞれの単元の活動に対する生徒の「思い」について，生徒の日頃の活動中の様子，表情，発言等から，チームによる観察で実態把握を行い，それを基に単元・授業計画（Ｐｌａｎ）を立てる。授業実践（Ｄｏ）を通して生徒の思いの変化を観察し，さらには，生徒による自己評価を確認し（Ｃｈｅｃｋ），必要な支援や手立て等を再検討し，授業の改善（Ａｃｔｉｏｎ）を図り，このＰＤＣＡサイクルを通して，生徒の思いに寄り添った手立てを工夫した授業を展開していく。

単元の最後には，「どがん思っとっと？（どう思っているの？）」アンケートを実施し，単元を通しての生徒の思いの変化を確認し，職員間で共通理解する。

イ　「☆わかった」「◇できた」「□楽しい」思いを実感できる授業の取組

・個別の指導計画を基にした実態把握（☆◇□）
・チームによる一人一人の綿密な実態把握に基づく授業作り（☆◇□）
・生徒の実態に応じた適切な支援，教材・教具の工夫（☆◇□）
・一人一人に応じたスモールステップでのめあて設定（☆◇□）
・生徒の実態に応じたルールの工夫（☆◇□）
・一人一人の生徒に応じた称賛（◇□）
・振り返りの方法の工夫及び次の課題の整理（☆◇□）

２　公開授業

(1) 中学部　病弱通常の学級・病弱重複障害学級

単元名　「ストロークの使い分け名人になろう！」バドミントン（ネット型）

授業者　Ｔ１　土井　志穂
　　Ｔ２　山下　薫　　石丸　浩平
外部指導者　　江口　博

本単元では初めての外部指導者活用で，初めての事や初めての人に苦手さを感じる生徒も多いことから不安な面もあったが，外部指導者とは生徒の実態を共有したり，生徒への紹介の仕方や関わり方を確認したり，教材・教具に関しての専門的なアドバイスをしてもらったりするなど，事前に入念な打ち合わせを行ったうえで授業に入った。また，生徒の実態に応じて，主に外部指導者と関わるのは生徒Ａ・生徒Ｃ，それ以外の生徒は教師と関わるようにした。

生徒Ａ・生徒Ｃは，専門的な指導を受け驚くほどに技術が上達した。ゲームでは負けたくないという強い思いをもっているが，外部指導者に負けるのは仕方がないと言いながらも，「悔しい，次は頑張る。」「今日は２点しかとれなかったから，次は３点とる。」等の前向きな発言が聞かれ，毎回外部指導者との対戦を楽しみにしていた。生徒Ａ・生徒Ｃ以外の生徒達も，外部指導者と直接打ち合うことはなかったが，打ち方の手本を見せてもらったり，「上手くなった。」と声をかけられたりすると嬉しそうだった。

本日の授業は単元終盤ということで，練習した技術をゲームで生かし，楽しむことをねらいとした。練習では，iPadやフォームチェックシートで前時を振り返る中で，教師や外部指導者のアドバイスも受けながら自分のめあてを設定することができた。そして，練習したことをゲームに生かしながら，攻防を楽しめるような展開にするために，対戦相手を教師や外部指導者にし，さらには中学部オフィシャルルールを設定して取り組みやすくした。

ほとんどの生徒は，自分の課題とするストロークの打ち方やゲームの流れが「わかり」，ストロークの使い分けや自分の得意なストロークで打ち返すことが「でき」，ゲームを「楽しむ」ことができた。心の満足度も75～100％と，「またやりたい」思いを抱く生徒が多かった。また，教師と対戦していた生徒が，単元を通して自信をもち，初めて友達ともやってみたいと発言した。

3　研究協議

(1) 協議内容

Q１　外部指導者の活用について
A１　本県では2023年に国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会開催が内定している。障害者スポーツの裾野の拡大と競技水準の向上を図るため，陸上競技や卓球等の全国障害者スポーツ大会の競技種目をはじめ，バドミントンや卓球バレー等を含む10競技のスポーツ教室が開催されている。 今年度は，日本障がい者スポーツ協会の「地域における障がい者スポーツの振興事業」で，佐賀県障がい者スポーツ協会とも連携を図り，外部指導者活用の授業を実施している。専門的な指導者と一緒に楽しく活動することを通して，お互いに親しみをもち，運動の楽しさや喜びを知ることで，現在そして卒業後も地域のスポーツ施設の利用や障がい者スポーツ教室への参加がしやすくなり，余暇活動の充実，さらには生涯にわたってスポーツ活動に親しみ，豊かなスポーツライフを実現することにつながると考える。

Q２　欠席をした生徒の対応について
A２　学級担任が個別に対応する中で，その日の調子によってはストレッチ運動をしたり，バドミントンをしたりしている。夏休みに登校する時には，本人の気持ちを確認した上でラジオ体操をしたり，ストレッチをしたりする活動をしている。

Q３　シャトルを吊るす方法もあるが，タオルとラミネートにした理由について
A３　シャトルを吊るすと紐が絡まって練習効率が悪くなることに加え，生徒達の打ち方の意識の向上につながらなかった。タオルとラミネートにすることで，それらの点が改善でき，かつ，「できた」かどうかを音で確認できるため。

Q４　脈の測定について（心拍数についての学習）
A４　授業前，ランニング後，活動後の３回計測している。毎年，年度初めに心拍数についての学習を取り入れている。自分の安静時心拍数や最大心拍数を確認し，運動の種類ごとに目標心拍数を出している。

Q５　誰が評価しているのか。
A５　授業者で話合いしながら評価をしている。通知表や個別の指導計画は，学年ごとに担当を決めている。

Q６　今後の学習予定について（ダブルスをしたり正規ルールでしたりするなどの予定）
A６　中学部オフィシャルルールのまま続けていく。ダブルスはしないが，先生達に挑戦したり，生徒同士で試合をしたりすることは考えている。最後にはローテーションラリーといって，全員で何回ラリーが続くかの挑戦も計画している。

Ｑ７　ゲームをする際の勝敗について（わざとらしくならないように）
Ａ７　生徒の実態に応じて，負けを受け入れられる生徒に対しては，大きな点数差にならない程度に試合をコントロールしている。どうしても負けを受け入れられない生徒には，わざとらしくならないように，教師がミスをして負けるのではなく，生徒が得点を決めて勝てるようにしている。少しずつ接戦にもって行き，同点は受け入れられるようになってきた。

Ｑ８　補助具の製作は誰が行っているか。
Ａ８　木工班在籍８年目の体育科職員が製作

Ｑ９　体育的行事は全校で実施しているか
Ａ９　全校で実施している体育的行事は体育祭で，病弱・知的障害・肢体不自由のすべての課程の児童生徒が一緒に行っている。

Ｑ10　週の保健体育の授業時数
Ａ10　週に２時間

(2) フリーディスカッション（教材・教具体験を含む）

Ｑ１研究主題について 「わかった」「できた」「楽しい」思いを…で，「わかる」「できる」という言い方もあるが，なぜこのような表現にしたのか。
Ａ１　生徒の思いを考え「わかる」ではなく「わかった」，「できる」ではなく「できた」にした。また，次へのつながりを意識した。

Ｑ２　授業の「はじめ」「なか」「おわり」で脈の測定があったが，「なか」の脈拍測定がランニング終了後だった。一番心拍数が上がるだろう試合中に脈を測定しなかった理由は何か。
Ａ２　試合の流れをくずさないため。今後検討する。

Ｑ３　シャトルの数がとても多かったが，学校のものか。外部指導者が持ってこられたものか。
Ａ３　外部指導者がもってきたもの。外部指導者が入るメリットでもある。学校にもあるが，羽根はすぐに消耗してしまうため数多くはない。

Ｑ４　振り返り等で全員がタブレットを使用していたが，認知の高い生徒は書くことができるのではないか。将来に向けてどのように考えてあるのか。
Ａ４　自分の思いを書くこと，また書字に苦手意識がある生徒が多いため，全員タブレットで選択できる形にしている。他教科でも板書を写すことが苦手で，板書を撮影するなどの実態がある。中学部の段階では，苦手の克服ではなく，苦手や不安を取り除き，得意なことを伸ばしていきたい。自己肯定感を高めたい。

Ｑ５　今回準備された数種類のラケットは，市販のものか。
Ａ５　規定のものではないものもあるが，市販である。

Ｑ６　負けるという経験も将来的には必要ではないか。わざとらしくならないためにも，先生が得点できる箇所を設定してはどうか。
Ａ６　たしかに必要な経験である。以前に比べると，少しずつ負けを受け入れられるようになっている生徒もいる。わざとらしくならないように気をつけている。

(3) 指導講評　　講師　筑波大学　准教授　澤江　幸則　先生

以前，障害児教育の月刊誌に「わかる・できる・やりたいと思える授業づくり」を書かせてもらった。「わかる」「できる」を目指した授業づくりは結構あるが，「もっとやりたい」というところまでを目指して，日々授業実践をしている。授業校も同じ思いで授業実践をしていた。新学習指導要領との関連をしっかり見ていく必要がある。

ア　運動指導場面における困難さと工夫について

障害のある生徒のほとんどは「わからない」「できない」状態を経験している。「わからない」「できない」が続くと「楽しくない」。当然「やりたくない」につながる。しかも，彼らはそれらを表現できない。指導者は彼らの困っていることを常に考え，授業づくりに生かすことが大切である。

イ　新学習指導要領について

新学習指導要領の構造について。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を構造内で考えていく。授業改善が非常に大きい。

ウ　授業改善について

授業を良いものをより良くしていくことが大切である。社会に開かれた教育課程として，「地域資源の活用」を進める。更には，毎年度，学部・学年で通すのではなく，「将来的見通しをもったカリキュラムマネジメント」を進める。授業をより流動的に動かし，独自の力，発想で創ってほしい。そして，子どもたちが主体的に取り組める授業にしてほしい。それが，主体的学び，対話的学び，深い学びにつながる。

エ　授業改善の実際について

①　わかった（理解の支援）→認知，感覚，情緒特性に合わせる。今回，生徒の情緒特性に応じた授業公開の形がパブリックビューイングであった。情報機器の課題は残るが，そもそも病弱学級の授業公開は珍しい。この方法であれば，いろいろな障害種の授業公開に生かせる。

②　わかりやすさの追求（構造化）→「課題の明確化」「目標の明確化」「結果の明確化」を工夫することで生徒たちが生き生きとなる。（※様々な教材画像で例が示され，構造化が目的になってしまうと，適切な運動に導けないこともあるなどの注意点も指導があった。）

③　できた（適切な運動課題）→課題は個別化することが大事。指導者は，個別に「確実にできる課題」「頑張ればできそうな課題」，そしてこれが大切なのだが「今はできない課題」を考えておく。今回は，ストローク練習では「頑張ればできそうな課題」，ゲー

ムでは「確実にできる課題」を大切に，教師がそれぞれの生徒に合わせて送球を調整していた。特別支援教育は一人一人を大切にできる教育である。

④　もっとやりたい（運動することの動機）→やる気をもたせるための肯定的なフィードバック，つまり「ほめること（称賛）」。今回は多くの場面で取り入れてあった。「即時に」「受容的態度で」「具体的に」「無条件」でほめる。社会性と運動発達は関連している。人との関わりの中で育つし，人を頼れるようになる。褒め方は一人一人違っていい。大げさな褒め方は，感覚の特性がある生徒には刺激が強すぎる場合もある。生徒に合うような褒め方（ささやく，合図，ＥＴタッチなど）をすることが大切である。

生徒側から授業がどうかを常に考えており，授業者として必要な視点，つまり，本当に授業がわかっているのか，できたと感じているのか，もっとやりたいと思っているのか，ということを意識した授業づくりを実践している。何を学ばせたのか，どのように学ばせたのか，何ができるようになったのかを突き詰めた作業は，新学習指導要領の授業改善の指標となるであろう。

４　成果と課題

(1) 成果

ア　思いの変容

活動前の思い	活動中の思い	活動後の思い
・「学校に行きたくてもいけない」⇒学習への不安、気分が乗らない ・でも体育には行きたい ・あまり言葉を発しない ・体調〇（学習ノートへの記入）	・練習でシャトルの高さによって打ち分けることができた→「できた」「楽しい」 ・褒められて嬉しい ・認められて嬉しい ・試合に勝って嬉しい ・得点が入るとガッツポーズが出てきた ・体調〇（学習ノートへの記入）	・ゲーム終了後に「先生を翻弄させ勝てた。」と発言した→満足感 ・振り返りでの心の満足度に100%と記入していた ・体調〇（学習ノートへの記入） ・担任や家族に楽しかったことを報告した ・担任に「またやりたい」ことを伝える

イ　「わかった」「できた」「楽しい」思いを実感できる授業の取組を工夫することで，「わかった」「できた」「楽しい」という思いを実感することができた。

ウ　生徒の振り返りから「わかった」「できた」「楽しい」思いを実感した生徒は，「またやりたい」思いを抱いたと考えられる。

(2) 課題

ア　その日その時の気分（思い）の変化が激しい生徒もいるため，支援の方法もそれに合わせて急遽変更せざるを得ないこともある。

イ　ゲームの勝ち負けだけにこだわりを見せる生徒もおり，どうしてもその勝ち負けのみが心の満足度を左右してしまう。

ウ　「またやりたい」思いを，学校外のスポーツ活動につなげていくこと。

平成30年度
全国学校体育研究表彰

最優秀校一覧

優良校一覧

功労者一覧

体育授業優秀教員一覧

受賞者代表謝辞

平成30年度　全国学校体育研究
最優秀校（文部科学大臣賞）一覧

都道府県	学　校　名	校長名
岩手県	和賀郡西和賀町立湯田小学校	盛島　　寛
茨城県	水戸市立大場小学校	猪野　典子
埼玉県	川口市立原町小学校	加田　　明

平成30年度　全国学校体育研究　優良校一覧

都道府県	学　校　名	校長名
北海道	札幌市立二条小学校	大牧　眞一
	旭川市立春光小学校	福島　義教
	亀田郡七飯町立七重小学校	工藤　達也
	旭川市立啓北中学校	田丸　直樹
	北海道大樹高等学校	金田　英司
青森県	弘前市立福村小学校	工藤　信敬
	平川市立平賀西中学校	西谷　龍彦
	青森県立六戸高等学校	平川　昌史
岩手県	北上市立黒沢尻西小学校	三浦　由和
秋田県	能代市立能代第二中学校	秋元　卓也
	秋田県立横手清陵学院高等学校	信田　正之
山形県	尾花沢市立常盤小学校	竹埜理恵子
	西置賜郡小国町立小国中学校	八木　幸夫
	山形県立米沢商業高等学校	海野　耕二
福島県	福島市立北沢又小学校	本多　充
	福島市立平野小学校	重巣　吉美
	福島市立福島第一中学校	伊藤　隆幸
茨城県	水戸市立大場小学校	猪野　典子
	茨城県立牛久高等学校	木口　邦夫
栃木県	宇都宮市立姿川第二小学校	中村ひろみ
群馬県	太田市立藪塚本町南小学校	阿部　幸雄
	前橋市立粕川中学校	都所　幸直
埼玉県	川口市立原町小学校	加田　明
	久喜市立栗橋南小学校	鈴木　美幸
	児玉郡上里町立上里中学校	新井　靖
	埼玉県立越谷西高等学校	大政　正一
千葉県	富里市立富里第一小学校	梅里　之朗
	山武郡芝山町立芝山小学校	五木田啓一
	船橋市立宮本中学校	秋山　孝
	袖ヶ浦市立昭和中学校	林　健司
東京都	練馬区立立野小学校	池上　育志
	国分寺市立第七小学校	藤原　栄子
	板橋区立志村第六小学校	杉本　昌彦
	東村山市立八坂小学校	矢部　崇
	足立区立蒲原中学校	光山　真人
	立川市立立川第九中学校	富永　立人
	東京都立村山特別支援学校	中島　雄佑

都道府県	学　校　名	校長名
神奈川県	川崎市立片平小学校	中川多起子
	川崎市立宮崎中学校	田中真理子
新潟県	妙高市立妙高小学校	福保　雄成
福井県	小浜市立遠敷小学校	山根　亮子
	勝山市立村岡小学校	斎藤　雅代
	大野市阪谷小学校	末永　巖
長野県	上田市立神科小学校	井坪　秀明
	上田市立第五中学校	小林　新治
岐阜県	岐阜市立長良西小学校	石神　淳司
	郡上市立大和中学校	大坪　裕
	岐阜県立大垣西高等学校	髙木　茂
静岡県	三島市立南小学校	木村　仁
	静岡市立清水有度第一小学校	松下　和弘
	浜松市立与進中学校	髙柳　正幸
	静岡県立科学技術高等学校	遠藤　克則
愛知県	名古屋市立大手小学校	西川　和幸
	知多郡美浜町立河和小学校	伊藤　成規
	豊橋市立高師台中学校	黄木　昭彦
	愛知県立鳴海高等学校	橋本　正秀
三重県	四日市市立三重北小学校	岡本　雅代
	鈴鹿市立創徳中学校	小川　正芳
	三重県立四日市中央工業高等学校	岡村　芳成
滋賀県	彦根市立稲枝東小学校	橋本美代子
	近江八幡市立八幡中学校	野村　正
	滋賀県立能登川高等学校	河下　太勇
大阪府	大阪市立三先小学校	中野　浩
	泉佐野市立佐野台小学校	佐々木理江
	東大阪市立英田北小学校	横田　幸子
	堺市立八田荘中学校	田中　廣之
	大阪府立芦間高等学校	萩原　英治
兵庫県	姫路市立飾磨小学校	原田　祐司
	洲本市立五色中学校	木下　秀次
	兵庫県立伊川谷北高等学校	鳴瀧　幸人
	兵庫県立尼崎高等学校	児玉　敏男
奈良県	葛城市立新庄北小学校	安川　昌和
	奈良市立都跡中学校	岩井　宏之
	天理高等学校	竹森　博志

都道府県	学　校　名	校長名
和歌山県	海南市立第三中学校	馬場　一博
鳥 取 県	鳥取市立湖東中学校	衣笠　　洋
岡 山 県	岡山市立太伯小学校	吉田　美香
	岡山市立竜操中学校	堀井　博司
	岡山県立倉敷天城高等学校	白神　敬祐
広 島 県	東広島市立小谷小学校	空本　秀寿
徳 島 県	阿波市立土成小学校	福井　　健
香 川 県	丸亀市立城北小学校	平田　貴久
	丸亀市立城乾小学校	小川　忠司
福 岡 県	北九州市立高生中学校	和田　義則
佐 賀 県	佐賀市立勧興小学校	中村　敏智
	佐賀市立新栄小学校	古賀　善充
	佐賀市立大和中学校	林　　正昭
	佐賀県立中原特別支援学校	糸山　正孝

都道府県	学　校　名	校長名
長 崎 県	長崎市立西坂小学校	野中　志朗
	諫早市立北諫早中学校	江口　　武
	長崎県立口加高等学校	狩野　博臣
熊 本 県	水俣市立水俣第二小学校	黒木　博寿
	熊本市立力合中学校	新垣　　力
	熊本県立小国支援学校	髙木佐由理
大 分 県	大分市立川添小学校	溝部富美子
	大分市立稙田西中学校	後藤　哲郎
	大分県立大分工業高等学校	安野　豊治
宮 崎 県	宮崎市立佐土原小学校	森山　欣一
鹿児島県	曽於市立財部北小学校	竹内　　篤
	出水郡長島町立鷹巣中学校	有馬　秀文
	鹿児島県立鹿屋養護学校	徳永　謙一

平成30年度　全国学校体育研究　功労者一覧

都道府県	氏　　名	所　　属	職名
北海道	小野寺　正	札幌市立手稲西中学校	校長
	柿崎　秀樹	旭川市立東明中学校	校長
	引地　秀美	北海道教育大学札幌校	教授
	若林　利行	北海道岩見沢東高等学校	校長
	谷坂　常年	北海道白石高等学校	校長
青森県	山谷　尚史	青森市立浜田小学校	校長
	齋藤　　実	青森市立浪岡中学校	校長
	花田　　慎	青森県立青森西高等学校	校長
岩手県	玉山　　勉	花巻市立宮野目小学校	校長
	田山　英治	盛岡市立米内中学校	校長
	松尾　和彦	岩手県立盛岡南高等学校	校長
宮城県	藤倉　　聖	宮城県柴田高等学校	校長
	津久井　隆之	仙台市立原町小学校	校長
	小林　好美	仙台市立国見小学校	校長
秋田県	佐藤　信英	秋田県立西目高等学校	校長
	堀川　茂進	秋田県立増田高等学校	校長
	飯坂　尚登	秋田県スポーツ振興課	課長
山形県	齋藤　英敏	山形市立第二小学校	校長
	松田　博之	天童市立第二中学校	校長
	阿部　　孝	山形県立上山明新館高等学校	校長
福島県	慶德　秀夫	郡山市立安積第三小学校	校長
	福士　寛樹	福島市立福島第二小学校	前校長
	矢澤　良伸	会津若松市立第二中学校	前校長
	比佐　　功	福島県立磐城桜が丘高等学校	校長
茨城県	谷田部孝子	筑西市立新治小学校	校長
	永田　　博	水戸市立第二中学校	校長
	堀越　　淳	坂東市立岩井中学校	副校長
	住谷　正己	水戸市立赤塚中学校	校長
栃木県	小池　雄一	宇都宮市立雀宮中央小学校	校長
	中山　俊美	宇都宮市立河内中学校	校長
	古口　英夫	栃木県立学悠館高等学校	教頭
群馬県	金子　健司	嬬恋村立嬬恋中学校	校長
	栗原　雅仁	太田市立薮塚本町中学校	前校長
	谷　　勝彦	群馬県立渋川工業高等学校	前校長
埼玉県	中島　豊吉	東松山市立青鳥小学校	校長
	山下　誠二	さいたま市立常盤中学校	校長
	菅野　潤一	新座市立第五中学校	校長
	大川　　勝	埼玉県立川口北高等学校	校長

都道府県	氏　　名	所　　属	職名
千葉県	増田　正利	香取市立佐原第五中学校	前校長
	鈴木　雄二	千葉市立加曽利中学校	校長
	津野　政彦	千葉市立新宿中学校	校長
	山﨑　成夫	千葉県立千葉女子高等学校	校長
東京都	中村　　豊	練馬区立豊玉小学校	校長
	土肥　和久	足立区新田学園足立区立新田小学校	校長
	寺村　尚彦	世田谷区立弦巻小学校	校長
	柴野晃一郎	江東区立第四大島小学校	校長
	長塚　琢磨	足立区立第九中学校	校長
	山崎　　要	足立区立東綾瀬中学校	校長
	平本　浩実	豊島区立巣鴨北中学校	校長
	矢野　勝義	東京都立矢口特別支援学校	校長
神奈川県	小澤　好一	横浜市立本町小学校	校長
	沼田　誓子	横須賀市立公郷小学校	教諭
	内田　幸博	相模原市立小山小学校	前校長
	板橋　一幸	相模原市立上溝南中学校	校長
	原　　弥生	神奈川県立座間高等学校	教諭
新潟県	齋喜　和彦	柏崎市立田尻小学校	校長
	諸橋　　徹	新潟市立坂井輪小学校	校長
	上野　裕文	上越市立雄志中学校	前校長
	宮崎　繁夫	新潟市立山の下中学校	校長
富山県	丸山　正樹	富山市立鵜坂小学校	校長
	中嶋　賢和	富山市立山室中学校	校長
	大谷　千春	富山県立氷見高等学校	教諭
石川県	西川　茂治	金沢市立大徳小学校	校長
	松本　　亮	金沢市立諸江町小学校	校長
	辻　　泰樹	小松市立板津中学校	校長
福井県	野瀬　　聡	福井市和田小学校	校長
	朝賀　博美	福井県立盲学校	教諭
長野県	湯本　　修	山ノ内町立西小学校	前校長
	南原　恒彦	阿智村立阿智中学校	前校長
岐阜県	政井　裕司	岐阜市立岐阜中央中学校	校長
	髙橋　幸平	岐阜県立岐阜総合学園高等学校	校長
静岡県	鈴木　珠美	沼津市立第三中学校	校長
	高村　一幸	湖西市立新居中学校	元校長
	村松　　学	浜松市立北部中学校	校長
	太田　仁美	静岡県立清流館高等学校	校長

都道府県	氏　　名	所　　属	職名
山梨県	仙洞田茂雄	甲府市立東中学校	校長
	北川　俊明	甲斐市立玉幡中学校	元校長
	松野　正士	山梨県立ひばりヶ丘高等学校	校長
愛知県	岩田　浩幸	名古屋市立守山小学校	校長
	金子　　徹	豊橋市立つつじが丘小学校	前校長
	鈴木　知宏	江南市立古知野中学校	校長
	大橋　虎男	愛知県立東海南高等学校	教頭
三重県	松ケ谷孝子	津市立橋南中学校	校長
	吉田　光徳	三重県立いなべ総合学園高等学校	校長
滋賀県	町釋　　惠	東近江市立箕作小学校	校長
	菅井　孝明	彦根市立南中学校	校長
	池松　和彦	滋賀県立草津東高等学校	教諭
大阪府	小林　　猛	大阪市立弁天小学校	校長
	宮﨑浩太郎	寝屋川市立和光小学校	校長
	松元　利男	茨木市立春日小学校	校長
	橋本　　寛	大阪市立菫中学校	校長
	永山　隆一	大阪成蹊女子高等学校	教諭
兵庫県	大西　伸宜	神戸市立福住小学校	校長
	楠本　　薫	神戸市立夢野の丘小学校	前校長
	尼子　尚公	姫路市立書写中学校	校長
	吉田　博昭	兵庫県立星稜高等学校	校長
奈良県	井上　正司	宇陀市立榛原小学校	校長
	上東　祥浩	下市町立下市中学校	校長
	木村　孝之	奈良県立添上高等学校	校長
和歌山県	亀位　直規	和歌山市立今福小学校	校長
	絹川　由美	和歌山市立日進中学校	教諭
鳥取県	黒見　　博	米子市立淀江中学校	校長
	松浦　靖明	北栄町立大栄中学校	校長
島根県	松本　泰治	出雲市立北陽小学校	校長
	黒見ひとみ	松江市立美保関小学校	教諭
	手島　勇人	松江市立川津小学校	教諭
岡山県	林　　仁志	岡山市立妹尾小学校	前校長
	坂元　佳彦	笠岡市立金浦中学校	教諭
	西原　智子	岡山県立岡山朝日高等学校	教諭

都道府県	氏　　名	所　　属	職名
広島県	西　　和子	廿日市市立四季が丘小学校	校長
	土生　士郎	東広島市立板城小学校	校長
	藤平　高憲	呉市立安登小学校	校長
徳島県	松田　雄史	阿南市立阿南第一中学校	校長
	桂　　由美	小松島市立小松島中学校	教諭
	中田　寛志	徳島県立鳴門渦潮高等学校	校長
愛媛県	乗松　秀樹	松山市立さくら小学校	前校長
	松岡誠一郎	松山市立南第二中学校	前校長
高知県	田内　　聡	高知市立潮江小学校	校長
	川島　祥嗣	高知県立嶺北高等学校	元校長
福岡県	丸山　晴幹	春日市立春日小学校	校長
	米多比正宏	北九州市立引野小学校	前校長
	深山　典嗣	久留米市立長門石小学校	前校長
	橋本真理子	福岡県立三潴高等学校	前校長
佐賀県	原口　憲明	佐賀市立諸富北小学校	校長
	下田　秀人	佐賀市立春日北小学校	校長
	中西　貞弘	白石町立有明東小学校	校長
	上野　志信	佐賀県立佐賀北高等学校通信制	教諭
長崎県	馬場　昭洋	長崎市立福田小学校	元校長
	宮﨑　義高	佐世保市立鹿町中学校	元校長
	上片昇一郎	長崎県立鶴南特別支援学校時津分校	教諭
熊本県	久保　明博	八代市立植柳小学校	校長
	中島仙一郎	宇城市立松橋中学校	校長
	平田　浩一	熊本県立天草高等学校	校長
大分県	江田　隆生	日田市立高瀬小学校	元校長
	重岡　秀徳	別府市立山の手中学校	校長
	中倉　幸雄	大分県立竹田高等学校	教諭
宮崎県	岡留　君子	宮崎市立木花中学校	校長
	藤本　　格	宮崎県立延岡星雲高等学校	校長
鹿児島県	菊永　俊郎	鹿児島市立大明丘小学校	前校長
	馬場　義彰	鹿児島市立紫原中学校	元校長
	坂口　純弘	鹿児島市立鹿児島女子高等学校	前校長
沖縄県	東　　健策	浦添市立内間小学校	前校長
	佐事　安弘	石垣市立新川小学校	校長
	早田　　実	宜野湾市立大謝名小学校	校長

平成30年度　体育優秀教員表彰者一覧

都道府県	氏　　名	所　　属	職　名
埼玉県	森田　哲史	埼玉大学教育学部附属小学校	教　　諭
東京都	岩田　純一	墨田区立業平小学校	指導教諭
岐阜県	森　　哲也	岐阜市立岐阜中央中学校	教　　諭
福岡県	相場　克哉	大野城市立御笠の森小学校	教　　諭
大分県	廣田　哲也	大分市立大在小学校	教　　諭

受賞者代表謝辞

佐賀市立諸富北小学校長
原　口　憲　明

受賞いたしました「最優秀校」「優良校」「功労者」「優秀教員」を代表して，感謝とお礼の言葉を述べさせていただきます。

文部科学省　スポーツ庁　公益財団法人日本学校体育研究連合会から学校体育に関し，名誉ある賞を賜り誠にありがとうございました。受賞校，受賞者一同大変感激しているところであります。

また，私達のために，このようなすばらしい表彰式をご用意くださいまして，誠にありがとうございました。

本日，栄誉ある賞をいただけたのは，今までの取り組みに対して，ご指導・ご支援をいただいた各教育委員会をはじめとする，関係者の方々，また，共に切磋琢磨して様々な取り組みを成し遂げてきた仲間や同僚のおかげです。皆様にこの場をお借りして，心から御礼申し上げます。

私達が取り組んできた学校体育。「生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現すること」を重視した体育科・保健体育科の取り組みは，運動やスポーツが好きな子供の割合が高まったことや体力の低下傾向に歯止めがかかったこと，子供達の健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身についていることなど，一定の成果が見られるとの報告があっています。

一方，習得した知識や技能を活用して課題解決することや運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られるなど様々な課題も指摘されています。

そこで私達は，目の前にいる子供達が，運動やスポーツの楽しさを味わい，現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた，楽しく明るいものにするために，この受賞を期に，再度，学校体育のあり方を考え，研究を継続し，一層の研鑽に励み，それぞれの地域の中核として，また後進の育成など他をリードしながら充実した活動を展開し，学校体育の発展に寄与していく決意を新たにしたところです。

今後とも，ご指導・ご鞭撻のほど，よろしくお願い申し上げます。

本日は，誠にありがとうございました。

主催・共催・後援

□　スポーツ庁

スポーツ庁長官	鈴木大地
スポーツ庁次長	今里　譲
スポーツ庁審議官	藤江陽子
スポーツ庁スポーツ総括官	齋藤福栄
スポーツ庁政策課長	鈴木敏之
スポーツ庁政策課学校体育室長	塩川達大
スポーツ庁政策課教科調査官	高田彬成
スポーツ庁政策課教科調査官	高橋修一
スポーツ庁政策課教科調査官	横嶋　剛

□　公益財団法人日本学校体育研究連合会

会長	本村清人	副会長	友添秀則
副会長	池田延行		
理事長	岡出美則		
理事	菅原健次	理事	村上みな子
理事	細越淳二	理事	近藤智靖
理事	吉原昌子	理事	古家　眞
監事	奈尾　力	監事	関　毅彦
参与	加藤正克	参与	田中美智子
参与	手打和明	参与	古川浩洋
参与	吉永武史	参与	深見英一郎
参与	吉野　聡	参与	杉本眞智子
事務局長	後藤一彦		
事務局	藤井かね子	事務局	山崎寿美子

□　開催県・市教育委員会

佐賀県教育委員会教育長	白水敏光
佐賀市教育委員会教育長	東島正明

佐賀大会実行委員会

会　長	中　島　慎　一	佐賀県立多久高等学校　校長
副会長	菅　原　真　爾	鳥栖ルンビニ幼稚園　園長
	原　口　憲　明	佐賀市立諸富北小学校　校長
	三　上　智　一	吉野ヶ里町立東脊振中学校　校長
	糸　山　正　孝	佐賀県立中原特別支援学校　校長
顧　問	白　水　敏　光	佐賀県教育委員会　教育長
	東　島　正　明	佐賀市教育委員会　教育長
参　与	牛　島　　徹	佐賀県教育庁保健体育課　課長
	百　﨑　静　磨	佐賀市教育委員会学事課　課長
	小　川　　聡	実行委員会会長　前会長
	渡　瀬　浩　介	西九州大学　准教授
	吉　松　幸　宏	佐賀県立佐賀商業高等学校　校長
監　事	原　口　弘　之	佐賀市立高木瀬小学校　校長
	江　浦　伸　昌	佐賀市立城南中学校　校長
会場校	錦　織　昌　貴	錦華幼稚園　園長
	大　串　千代美	龍谷こども園　園長
	中　村　敏　智	佐賀市立勧興小学校　校長
	音　成　　隆	佐賀市立循誘小学校　校長
	平　田　繁　正	佐賀市立神野小学校　校長
	古　賀　善　充	佐賀市立新栄小学校　校長
	大　薮　日左恵	佐賀市立城西中学校　校長
	林　　正　昭	佐賀市立大和中学校　校長
	古　賀　勝　利	佐賀大学教育学部附属中学校　校長
	渡　邊　成　樹	佐賀県立佐賀北高等学校　校長
	林　　嘉　英	佐賀県立牛津高等学校　校長
	糸　山　正　孝	佐賀県立中原特別支援学校　校長

【総務事務部】

部　長	大　木　貴　博	佐賀市立西与賀小学校　校長
副部長	中　西　順　也	多久市立東原庠舎東部校　校長
	島　　一　満	小城市立三日月中学校　校長
主　任	實　松　清　之	吉野ヶ里町立東脊振小学校　校長
	大　坪　　泰	佐賀市立城東中学校　校長
	野　﨑　武　人	鹿島市立東部中学校　校長
	平　井　敏　博	鹿島市立古枝小学校　校長
	浅　井　慎　司	武雄市立若木小学校　校長
	行　徳　武　彦	佐賀市教育委員会　指導主事

委　員	髙　山　　健	小城市立三日月小学校　教頭
	諸　永　康　弘	神埼市立千代田東部小学校　指導教諭
	高　木　勝　己	佐賀市立北川副小学校　教諭
	森　田　美佳子	佐賀県立唐津特別支援学校　教諭

【研究編集部】

部　長	下　田　秀　人	佐賀市立春日北小学校　校長
副部長	尾　﨑　達　也	大町町立大町ひじり学園　校長
	福　井　宏　和	伊万里市立啓成中学校　校長
	牟　田　尚　敏	唐津市立長松小学校　校長
主　任	石　井　博　善	佐賀市立小中一貫校北山校　校長
	松　雪　　誉	佐賀県立佐賀工業高等学校　教頭
	江　口　賢　久	佐賀県立唐津西高等学校　教頭
	秀　島　邦　治	伊万里市立啓成中学校　教頭
委　員	北　村　樹　生	三光幼稚園　教諭
	永　渕　　武	佐賀市立東与賀小学校　教諭
	中　島　正　敏	佐賀市立日新小学校　教諭
	中　島　伸　一	基山町立基山中学校　教諭
	原　　隆　史	北陵高等学校　教諭
	渕　野　ひかる	佐賀県立嬉野高等学校　教諭
	岡　　真紀子	佐賀県立中原特別支援学校　教諭

【式典事業部】

部　長	下　平　博　明	白石町立有明中学校　校長
副部長	川　﨑　智　幸	佐賀市立思斉館中学部　校長
	代　居　正　巳	佐賀県立嬉野高等学校　副校長
	中　原　真　平	鹿島市立鹿島小学校　校長
主　任	鳥　谷　功　治	佐賀市立小中一貫校芙蓉校　校長
	田　辺　義　雄	小城市立牛津小学校　校長
	橋　口　繁　美	佐賀市立思斉館小学部　教頭
委　員	中　野　秀　敏	佐賀市立金立小学校　教諭
	井　田　丈　嗣	佐賀市立思斉館小学部　教諭
	清　水　紀　子	佐賀県立伊万里商業高等学校　教諭
	權　藤　三　佳	佐賀県立神埼高等学校　教諭
	島　松　奈　生	佐賀県立杵島商業高等学校　教諭
	永　田　真由美	佐賀県立大和特別支援学校　教諭
	野　田　真　己	佐賀市立東与賀小学校　教諭
	堤　　理　恵	佐賀市立諸富南小学校　教諭
	出　口　輝　子	佐賀市立若楠小学校　教諭
	伊　藤　明　子	佐賀市立巨勢小学校　教諭

【事務局】

事務局長	山　田　良　典	佐賀市立赤松小学校　校長
副事務局長	北　島　寿　人	佐賀県教育庁保健体育課　係長
	平　野　隆　治	佐賀県立佐賀西高等学校　教諭
事務局員	西　村　雪　彦	佐賀県教育庁保健体育課　指導主事
	田　島　正　義	佐賀県教育庁保健体育課　指導主事
	峯　　秀　一	佐賀県立佐賀西高等学校　教諭
	樋　口　祥　太	佐賀大学教育学部附属小学校　教諭
	小　川　雄　也	佐賀大学教育学部附属小学校　教諭
	陶　山　淳　史	佐賀市立本庄小学校　教諭
	熊　本　晋　作	佐賀市立本庄小学校　教諭

【分科会一覧】

	分科会	会場校園	公開①			公開②			指導助言者（大学教授等）
			領域（内容）	学年	授業者	領域（内容）	学年	授業者	
幼稚園	1	錦華幼稚園	運動遊び				年長 年中 年少	江頭　未希 金岡あかね 吉田菜々子	東京学芸大 教授 吉田伊津美
幼稚園	2	龍谷こども園	運動遊び①②③				3歳児 4歳児 5歳児	小池　友美 原田　知佳 黒木佳奈子 江口　未帆 牧口千音美 井上　智子	十文字学園大学 准教授 鈴木　康弘
小学校	3	佐賀市立 勧興小学校	体つくり運動	3年	大串　郁子	体つくり運動	5年	戸高　俊彦	安田女子大学 教授 徳永　隆治
小学校	4	佐賀市立 循誘小学校	器械運動 （跳び箱運動）	6年	野崎　慎悟	器械運動 （マット運動）	4年	前田　晃宏	西九州大学 教授 福本　敏雄
小学校	5	佐賀市立 神野小学校	ボール運動 （ゴール型）	5年	真崎　芳洋	ボール運動 （ゴール型）	6年	河上　泰彦	佐賀大学 准教授 堤　公一
小学校	6	佐賀市立 新栄小学校	保健 （けがの防止）	5年	田中　蓉子	走・跳の運動 （高跳び）	4年	吉田　宗平	愛媛大学 准教授 日野　克博
						公開③			
						ボール運動 （ソフトバレーボール）	6年	田中　孝	
中学校	7	佐賀市立 城西中学校	陸上運動 《走り高跳び》				1年	千住　靖明 森　千恵子	立命館大学 教授 大友　智
中学校	8	佐賀市立 大和中学校	保健 （がんの予防）	3年	平野　弘高 （三日月中教諭）	武道 （剣道）	3年	添田　貴之 中尾久美子	豊前市立 角田中学校 校長 藤田　弘美
中学校	9	佐賀大学 附属中学校	器械運動 （マット運動）	1年	安武　誠	体育理論 （文化としての スポーツの意義）	3年	内川梨恵子	宮崎大学 教授 三輪　佳見
高等学校	10	佐賀県立 佐賀北高等学校	球技 （バスケットボール）	1年	緒方　重宣 中島　耕一	武道 （柔道）	1年	寺戸　健 久保　貴大	岩手大学 准教授 清水　将
高等学校	11	佐賀県立 牛津高等学校	体育理論 （ドーピングと スポーツ倫理）	1年	江頭　辰弥	武道 （なぎなた）	1年	山本　智子	早稲田大学 准教授 深見英一郎
特別支援学校	12	佐賀県立 中原特別支援学校	球技（ネット型） バドミントン				中学部 1～3年 病弱通常学級 病弱重複障害学級	土井　志穂 山下　薫 石丸　浩平 副島　晶子 山口　貴子 松舟　裕子	筑波大学 准教授 澤江　幸則

【分科会の運営担当】

分科会	第１分科会	第２分科会	第３分科会	第４分科会
会場校	学校法人 錦華幼稚園	九州龍谷短期大学附属 龍谷こども園	佐賀市立 勧興小学校	佐賀市立 循誘小学校
分科会会長	錦織　昌貴	大串千代美	中村　敏智	音成　　隆
会場責任者	平井　敏博	浅井　慎司	髙山　　健	實松　清之
運営委員長	行徳　武彦	田辺　義雄	牟田　尚敏	下田　秀人
研究発表者	江頭　未希	浅井　太希	古城　武史	金矢　真知
授業者	江頭　未希 金岡あかね 吉田菜々子	牧口千音美 黒木佳奈子 江口　未帆 原田　知佳	大串　郁子 戸髙　俊彦 井﨑　夢元（外部指導者）	野崎　慎悟 前田　晃宏
司会	陣内　恵美	橋口　繁美	中野　秀敏	諸永　成樹
記録	山田真梨子	小池　友実 井上　智子	宮原　和也	溝口健太郎
受付・弁当・接待	福井　京子 古賀　久美	鷹木　初子 境　　貴恵 小柳　るみ	山下　能成 陶山　淳史	矢川　亮太 宮地　祥至
誘導・駐車場・会場準備	中村　政弘 相浦　岩男	田中　正博 他　　２名	内田　俊明 久保田　淳 岩﨑　祐貴	山﨑　　洋 船津左智子 浦田　恭兵 水町　祐介 堤　　義典 橋爪　健太
荷物	東　　祐子	砥上　康子	ＰＴＡ役員４名 西九生４名	船津左智子

分科会	第５分科会	第６分科会	第７分科会	第８分科会
会場校	佐賀市立 神野小学校	佐賀市立 新栄小学校	佐賀市立 城西中学校	佐賀市立 大和中学校
分科会会長	平田　繁正	古賀　善充	大薮日左恵	林　　正昭
会場責任者	諸永　康弘	中西　順也	大坪　　泰	島　　一満
運営委員長	尾﨑　達也	永渕　　武	石井　博善	中島　伸一
研究発表者	真崎　芳洋	吉田　宗平	力久　茂昭	江頭　満恵
授業者	真崎　芳洋 河上　泰彦	田中　蓉子 吉田　宗平 田中　　孝	千住　靖明 森　千恵子	添田　貴之 中尾久美子 平野　弘高
司会	中島　正敏	久保　明広	石井　博善	中島　伸一
記録	出口　輝子	堤　　理恵	北村　朋美 小形紗衣香	野田由美子 野田　敬義
受付・弁当・接待	野上友紀奈 林田　　睦	髙平　祐二 高木　勝己	山﨑太一郎 本村　晃一 北村　朋美 小形紗衣香 岩本　由紀 佐大生２名	野田由美子 楠本　早希 渡辺　正樹 大坪佐和子 大久保幸美 大学生１名
誘導・駐車場・会場準備	田川　雄基 山田　照昭 大野　一伸 井田　丈嗣	重松　照幸 福地　清隆 居石　　憲 前島　　仁	古川　浩之 村上　雄磨 佐大生３名 西九生１名	荒木　直之 牟田有一郎 岩橋　　潤 谷本　繁信 野田　敬義 前田　良紀 佐大生２名 西九大生２名
荷物	ＰＴＡ２名	早﨑　玄喜 森　　郁美	内川　恵輔 西九生２名	西九大生２名

分科会	第９分科会	第10分科会	第11分科会	第12分科会
会場校	佐賀大学教育 学部附属中学校	佐賀県立 佐賀北高等学校	佐賀県立 牛津高等学校	佐賀県立 中原特別支援学校
分科会会長	古賀　勝利	渡邊　成樹	林　　嘉英	糸山　正孝
会場責任者	野﨑　武人	松雪　　誉	江口　賢久	森田美佳子
運営委員長	栗秋　圭太	松雪　　誉	原　　隆史	岡　真紀子
研究発表者	栗秋　圭太	松永　成旦	江頭　辰弥	土井　志穂
授業者	安武　　誠 内川梨恵子	緒方　重宣 中島　耕一 寺戸　　健 久保　貴大	山本　智子 江頭　辰弥	土井　志穂 山下　　薫 石丸　浩平 副島　晶子 山口　貴子 松舟　裕子
司会	秀島　邦治	清水　紀子	權藤　三佳	岡　真紀子
記録	北村さつき 中畠　志保	宮﨑　　晃 丸小野仁之	福田　圭吾 宮原千賀子	永田真由美 荒川満由美
受付・弁当・接待	北村さつき 中畠　志保 橋本　直美 江口こずえ	堤　　啓剛 蒲原　明美 多田　美紀 岡　　亜紀 古賀恵里華 江越　由季	森　　千明 杉永　沙矢 稲富　知世 成林　礼彩	永田真由美 荒川満由美 大島　美香
誘導・駐車場・会場準備	舩津　法大 朝重　勇哉 佐大生３名 西九大生１名	藤﨑　進司 紀伊　孝哉 三根　伸介 新開　光輝 阿世賀紀光 坂井　宗輝 小島啓太郎 長野　祥雄	西川　知城 吉田　侑司 畑田　光貴 田中　龍史 江頭　寛美	今村　貴史 金丸　哲也 和木田　昇 古賀　貴登 廣森　賢治 美間坂　斎 宮﨑有希子 光武由香子 南里賢太郎 安藤　万莉 坂井　友美 中村　郁恵
荷物	西九大生２名	松尾　智博 沖田　祥章	野原　拓哉 野崎　沙希	林　　秀宣 永瀬　ゆり

全国学校体育研究大会開催地及び研究主題一覧

回	年　度		開催地	研究主題
1	1962	昭和37	千　葉	新学習指導要領による体育学習は、どのように展開したらよいか
2	1963	昭和38	兵　庫	―
3	1964	昭和39	鳥　取	―
4	1965	昭和40	東　京	学習内容の精選と指導の質の向上
5	1966	昭和41	岐　阜	運動技能の効果的な指導はどのようにしたらよいか
6	1967	昭和42	大　阪	運動技能の効果的な指導はどのようにしたらよいか
7	1968	昭和43	福　島	学校体育の中で体力つくりをどのように進めたらよいか
8	1969	昭和44	高　知	体育の効果的な学習指導をどのようにすすめるか －とくに、体力つくりの面から－
9	1970	昭和45	長　崎	自主的体育学習はどのようにすすめるか －とくに体力技能づくりの面から－
10	1971	昭和46	埼　玉	運動の特性や発達段階に応じた効果的な学習指導はどのようにしたらよいか
11	1972	昭和47	福　井	運動の特性や発達段階に応じた効果的な学習指導 －次代をきりひらくたくましい児童生徒の育成を目指して－
12	1973	昭和48	和歌山	体育学習における効果的な指導を行うにはどうすればよいか －とくにたくましい人間形成をめざして－
13	1974	昭和49	山　形	生涯学習の基礎を築く児童・生徒のいきいきとした授業の開発 －技能習得過程における子どもの意識－
14	1975	昭和50	東　京	体育指導の充実をめざして
15	1976	昭和51	滋　賀	体育指導と体力の向上
16	1977	昭和52	熊　本	すすんで実践する体育学習をめざして
17	1978	昭和53	群　馬	体力向上の在り方をもとめて
18	1979	昭和54	東　京	心身の健康をめざして
19	1980	昭和55	東　京	望ましい態度・習慣の育成をめざして
20	1981	昭和56	大　阪	たくましいからだと心を育てる
21	1982	昭和57	新　潟	生涯スポーツを志向した学校体育の推進を目指して
22	1983	昭和58	神奈川	運動の実践力を高める学習過程はどうあるべきか
23	1984	昭和59	沖　縄	運動の特性に基づく楽しさを味わうための学習はどうすればよいか
24	1985	昭和60	鹿児島	生涯体育を指向し、豊かな人間性を育成する学習指導のあり方
25	1986	昭和61	兵　庫	学習効果をより高める体育指導はいかにあるべきか
26	1987	昭和62	宮　城	21世紀をたくましく生きぬく児童生徒の育成を目指す学校体育の創造
27	1988	昭和63	愛　知	いのちを尊び、心と体を鍛え、たくましく生きる子どもの育成をめざす体育学習指導
28	1989	平成元	千　葉	自ら運動に親しみ、豊かな心と健やかな体を育て、生涯スポーツをめざす 新しい学校体育を求めて

回	年　度		開催地	研究主題
29	1990	平成２	北海道	21世紀を豊かに、たくましく生きる子どもの育成を目指す学校体育の在り方を求めて
30	1991	平成３	大　分	生涯スポーツを指向し、豊かな人間性を育成する学校体育の推進をめざして
31	1992	平成４	静　岡	生涯体育・スポーツの基礎を培い、心身ともに健康で活力に満ちた幼児・児童・生徒を育成する学校体育の在り方
32	1993	平成５	山　梨	21世紀を心豊かに、たくましく生きる幼児児童生徒を育成する学校体育の在り方
33	1994	平成６	石　川	一人一人が、運動の楽しさを味わい、ゆたかな心とすこやかな身体を育てる生涯スポーツをめざした学校体育のあり方
34	1995	平成７	香　川	自ら運動を求め、楽しみ、生涯わたって運動に親しむ子供の育成を目指して
35	1996	平成８	秋　田	生涯スポーツをめざして、一人一人が運動する喜びを味わえる体育学習のあり方
36	1997	平成９	奈　良	21世紀を生き抜く、生涯体育・スポーツの深化を図る体育学習・運動あそびの在り方をもとめて
37	1998	平成10	岡　山	遊び・スポーツのある豊かな社会 －学校体育の役割－
38	1999	平成11	茨　城	ともに、すこやかなスポーツライフをはぐくむあそび・スポーツの在り方
39	2000	平成12	青　森	発達段階に応じ、喜びや感動を与える体育学習の在り方を求めて
40	2001	平成13	宮　崎	仲間と一緒に夢中になって取り組む運動遊び・体育学習の在り方
41	2002	平成14	北海道	はずむ心と体、共に高め合う体育学習
42	2003	平成15	三　重	学びをひらく体育の創造 －体育ってなに？今を生きる子どもたちにとって－
43	2004	平成16	徳　島	未来を生きる力を育む体育学習を求めて －心と体をひとつに－
44	2005	平成17	富　山	基礎・基本を身につけ、学び続ける力をはぐくむ体育学習
45	2006	平成18	栃　木	生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎を培う体育学習を求めて
46	2007	平成19	京　都	健やかな心と体を育む体育学習を求めて
47	2008	平成20	岩　手	「いきる　わかる　できる」 生涯スポーツの基礎を培う、確かな力を育てる授業の創造
48	2009	平成21	島　根	確かな知識と技術を身につけ、学ぶ喜びが味わえる体育学習
49	2010	平成22	福　岡	運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造 －幼児児童生徒の発達の段階を踏まえて－
50	2011	平成23	長　野	すべての子どもが夢中になり、健康で豊かなスポーツライフの実現をめざす体育学習の創造 －「わかる」「できる」「かかわる」楽しさの創造－
51	2012	平成24	北海道	未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実 －授業から日常へ、授業から未来へ－
52	2013	平成25	東　京	生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を身に付ける体育学習
53	2014	平成26	岐　阜	生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業
54	2015	平成27	広　島	『わかる・できる・かかわり合う』体育授業 －運動への関心や意欲を高め、自ら考えたり工夫したりする力を身に付ける体育学習の充実－
55	2016	平成28	福　島	『仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業』～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～
56	2017	平成29	和歌山	「主体的・対話的で深い学びを通して自ら考え工夫していく力を身に付ける体育・保健体育学習」 ～自らが進んで運動（遊び）に取り組み、仲間とともに高め合う姿を求めて～
57	2018	平成30	佐　賀	生涯にわたり，仲間とともに主体的に運動やスポーツに親しむ資質・能力を育む保健体育学習

第57回全国学校体育研究大会

佐賀大会報告書

発　行　　平成31年２月
編　集　　佐賀大会実行委員会研究編集部
発行者　　佐賀大会実行委員会
会　長　　中島　慎一
連絡先　　佐賀大会実行委員会事務局
　事務局長　山田　良典
　〒840-0022　佐賀市中の館町１番39号
　TEL　0952－24－4225
　FAX　0952－24－4226
印　刷　　株式会社古川総合印刷
　〒849-0936　佐賀市鍋島町大字森田881番地
　TEL　0952－34－5345
　FAX　0952－34－5335